

3. 7 魚類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

| 分類群 | 絶滅 (EX) | 野生 絶滅 (EW) | 絶滅危惧 I 類 | | 絶滅危惧 II 類 (VU) | 準絶滅 危惧 (NT) | 絶滅のおそれ ある地域個体群 (LP) | 情報 不足 (DD) | 合 計 | |
|------------|------------|------------------|---------------|---------------|----------------------|-------------------|---------------------------|------------------|-----|-----|
| | | | I A 類 (CR) | I B 類 (EN) | | | | | | |
| 初版 1996 | 0 | | 2 | — | — | 6 | 3 | 0 | 27 | 38 |
| 改訂第2版 2005 | 1 | 0 | 37 | 23 | 14 | 9 | 4 | 1 | 4 | 56 |
| 改訂第3版 2017 | 1 | 0 | 69 | 49 | 20 | 14 | 10 | 0 | 30 | 124 |

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー一名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

魚類は、前回の改訂以降、沖縄県下から新しい発見が相次ぎ、本改訂では大幅な種数の追加が行われた。さらに、従来の淡水・汽水に生活する魚類に加え、個体数の減少が懸念される海域に生息する種にもスポットをあてたことも最も大きな点である。魚類の調査は、観察者の水中での活動時間が制限されるため、正確な分布範囲や個体数の把握が難しい。また、河川に棲む多くの種が、両側回遊型の生活史を持つため、個体数の年変動が著しい。これまで比較的、上位にランクされていた種でも、現時点での生息数が多いと判断された種は、今改訂でランクの引き下げを行った。

(2) 本改訂で明らかになったこと

沖縄県は、数多くの島嶼よりなる島嶼県であり、各島には数多くの河川が走り、河口にマングローブ水域が広がる場所も多い。さらに、各島嶼を取り巻く海域には、サンゴ礁に囲まれたサンゴ礁池（イノー）が広がる。この複雑な陸水域と海域には、驚くべき多様性に富んだ魚類群集が形成されている。例えば、西表島の浦内川からは400種をこえる魚類が記録されているが、今回の改訂に伴う調査でさらに7種が追加された。さらに、陸水の純淡水魚には、長期にわたる隔離により、独自の進化を遂げたと考えられる極めて学術的価値の高い種が含まれる。

本改訂の結果、絶滅種1種、絶滅危惧 I 類69種、絶滅危惧 II 類14種、準絶滅危惧10種、情報不足30種、計124種をリストアップした。前回の改訂以降、学術的研究が飛躍的に進展し、新記録種の追加、各種の生活史の解明、集団遺伝学的解析など多くの情報が集積されてきた。また、海域に生息する魚類の中にも過度の漁獲圧や生息地の環境悪化などにより、個体数が著しく減少しているものが確認され、それらもリストアップすることにした。その結果、今回の改訂では、記載種が前回の2.2倍以上（56種から125種）に急増した。海産魚類の正確な分布や個体数の把握は、極めて難しく、今後どのように評価していくべきか議論していく必要がある。また、今改訂では、個体数の変動が大きい両側回遊魚のランク評価を、過去数年間の個体数により再評価し、ランクを下げた種があるが、これらに関しては、今後、継続的かつ慎重なモニタリングが必要である。さらに、今改訂で情報不足とした種の中には、実際には危機的状態にある種が含まれている可能性がある。次回の改訂までに、これら情報不足種の生活史特性や分布域を精査し、正確なランク評価を行うことが急務である。そのためには、次回の改訂に向けたタイムスケジュールを早めに設定し、長期的視野に立った継続的な調査計画の立案が必要である。

執筆者 立原 一憲（琉球大学理学部・准教授）

(3) 掲載種の解説

1) 絶滅(EX)

和名 : リュウキュウアユ
分類 : サケ目 アユ科
学名 : *Plecoglossus altivelis ryukyuensis* Nishida, 1988
方言名 : ヤジ (奄美大島)
カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体長 18 cm。背鰭は体の中央部に位置し、腹鰭はその直下の腹面にある。背部は緑色を帯びたオリーブ色で、腹部は銀白色。胸鰭から鰓蓋にかけて 1~3 個の鮮やかな黄色斑がある。

近似種との区別 : 体形は基亜種のアユに比べ小型で、ややずんぐりとしており、胸鰭軟条数 12 と少ない。アユに比べて鱗が大きく、縦列鱗数が少ない。

分布の概要 : 中琉球の奄美大島と沖縄島にのみ分布。沖縄島では 1970 年代中ごろには、北部西岸に注ぐ、少なくとも 11 河川に生息していたが、1978 年の記録を最後に絶滅した。奄美大島では、主に中南部の住用湾に注ぐ役勝川・川内川・住用川・山間川および焼内湾に注ぐ河内川に生息。沖縄島における絶滅の要因としては、急速な開発に伴う河川環境の悪化が考えられる。1992 年から、奄美大島産の親魚から種苗生産した稚魚を福地ダム・安波ダム・辺野喜ダムに放流し、これらのダム湖とその流入河川には陸封個体群が定着するに至っている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 基亜種のアユが日本本土から朝鮮半島、中国、台湾からベトナム国境近くまで分布するのに対し、リュウキュウアユは奄美大島と沖縄島にのみ分布する。

生態的特徴 : 両側回遊を行う。本亜種の産卵期は、11~2 月である。受精卵は水温 20℃ の条件下で、7~10 日で孵化する。孵化仔魚は体長約 5.8 mm で、河川を流下した後、2~3 ヶ月間を海域で過ごして河川へ遡上する。遡上体長は、基亜種のアユに比べ、小型 (25~30 mm) である。

生息地の条件 : 沖縄島の河川は、度重なる河川改修と取水による水量の減少により、生息環境が悪化している。両側回遊の生活環をもつ個体群を復元するため、種苗放流を試みており、ごくわずかながら、両側回遊個体群が戻ってきた例が確認されている。河川環境は、住民意識の向上により回復してきつつあるが、河口周辺の海岸環境は荒廃したままであり、両側回遊型の生活史を持つ本亜種の定着には、まだ時間を要する。

現在の生息状況 : 沖縄島個体群は絶滅した。奄美大島個体群も年変動が大きい。1998 年には河内川の産卵場に農道建設に伴う大量の土砂が流入し、大打撃を被り、現在に至るまで河内川の個体群は回復していない。

学術的意義・評価 : リュウキュウアユは、琉球列島の固有亜種であり、基亜種のアユとは 100 万年以上の間、遺伝的交流が無い。本亜種の存在は、琉球列島の地史的背景を深く刻み込んでおり、この地域の淡水魚の進化を理解するうえで、極めて貴重な存在である。

生存に対する脅威 : 奄美大島における本亜種の生存を脅かす要因としては、森林伐採、ダム建設、河川開発、道路工事、土地造成などが挙げられている。沖縄島における絶滅もこれらの複合的要因に加え、河口周辺の海岸環境の悪化が原因であろう。

特記事項 : 琉球列島 (沖縄島・奄美大島) 固有亜種。IUCN カテゴリー : Endangered (EN)。

原記載 : Nishida, M., 1988. A new subspecies of the ayu, *Plecoglossus altivelis* (Plecoglossidae) from the Ryukyu Islands. Japanese Journal of Ichthyology, 35: 236-242.

参考文献 : 岸野 底・四宮明彦, 2003. 奄美大島の役勝川におけるリュウキュウアユの遡上生態. 日本水産学会誌, 69(4): 624-631.

岸野 底・四宮明彦, 2003. 奄美大島の河川におけるリュウキュウアユ遡上個体の出現状況. 日本水産学会誌, 70(2): 179-186.

岸野 底・四宮明彦, 2004. 奄美大島の役勝川と河内川におけるリュウキュウアユの孵化時期と体サイズ. 魚類学雑誌, 51(2): 149-156.

Sawashi, Y. and M. Nishida, 1994. Genetic differentiation in population of the Ryukyu-ayu *Plecoglossus altivelis ryukyuensis* on Amami-oshima Island. Japanese Journal of Ichthyology, 41: 253-260.

西田 睦・澤志泰正・西島信昇・東 幹夫・藤本治彦, 1992. リュウキュウアユの分布と生息状況 - 1986 年の調査結果 -. 日本水産学会誌, 58(2): 199-206.

四宮明彦, 1997. リュウキュウアユ, “日本の希少淡水魚の現状と系統保存 - よみがえれ日本産淡水魚 -”, 長田芳和・細谷和海 (編), 緑書房, 東京, 36-47.

Tachihara, K. and K. Kawaguchi, 2003. Morphological development of eggs, larvae and juveniles of laboratory-reared Ryukyu-ayu *Plecoglossus altivelis ryukyuensis*. Fisheries Science, 69: 323-330.

執筆者名 : 立原一憲

2) 絶滅危惧 I A 類 (CR)

和名 : コゲウツボ
 分類 : ウナギ目 ウツボ科
 学名 : *Uropterygius concolor* Rüppell, 1838
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 全長約 25 cm、体は細長く円筒形。背鰭と尾鰭は尾鰭付近に限られ、後鼻孔周辺に頭部側線管の開口を欠く。肛門は体中央部に位置し、体側に斑紋を欠き、一様に濃褐色。

近似種との区別 : キカイウツボ亜科に分類され、日本からは 3 属が知られている。本種はアミカイウツボ属に含まれ、タカマユウツボ属は、後鼻孔の背側に頭部側線管の開口があること、キカイウツボ属は、肛門が体中央より後方にあること、本属他種は体に斑紋があることで識別される。

分布の概要 : インド洋から西・中央太平洋の熱帯域。日本では、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島。

生態的特徴 : 本種の生活史に関する情報はない。仔魚期はレプトセファルスとして海域で過ごし、変態後に河川に遡上するものと推測されている。

生息地の条件 : マングローブのある河口域に生息し、干潮時には泥底の転石の下に隠れる。

現在の生息状況 : これまでに西表島の数河川、石垣島の 1 河川、沖縄島の 2 河川から記録があるが、生息環境が悪化し、近年確認されていない河川もある。

学術的意義・評価 : 河川汽水域に生息するウツボ科魚類であり、その生態は未解明であり、学術的価値が高い。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であり、かつ生息場所である河口域は、架橋の付け替え、道路工事、リゾート開発、水質汚濁、赤土の流入などにより、環境が著しく悪化しつつある。沖縄島最大の生息場所である大浦川では、観光用の木道が建設され、その生息が危ぶまれる状況にある。

原記載 : Rüppell, W. P. E. S., 1838. Neue Wirbelthiere zu der Fauna von Abyssinien gehörig. Fische des Rothen Meeres. Siegmund Schmerber, Frankfurt am Main.

参考文献 : 波戸岡清峰, 2013. ウツボ科. “日本産魚類検索 全種の同定 第三版”, 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 秦野, 244-261, 1786-1792.
 Sakai, H. and M. Sato, 1982. First records of five teleostean fish and three second records of gobiid fishes from Japan, collected in rivers on the Ryukyu Islands. Bulletin of the Faculty of Fisheries, Hokkaido University, 33(2): 79-88.
 Smith, D. G., 2012. A checklist of the moray eels of the world (Teleostei: Anguilliformes: Muraenidae). Zootaxa, (3474): 1-64.
 鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.
 瀬能 宏, 2015. コゲウツボ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 10-11.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : ナミダカワウツボ
 分類 : ウナギ目ウツボ科
 学名 : *Echidna rhodochilus* Bleeker, 1863
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体は細長く、側扁する。背鰭と臀鰭は低く、前者が鰓孔の直上、後者が肛門の直後から始まる。肛門は体中央よりわずかに前に位置する。生時の体色は、一様に赤みを帯びた褐色で、眼の下から下顎後部に 1 白色斑がある。眼の周囲は、白く縁どられ、虹彩は黒い。

近似種との区別 : 眼の下から下顎後部の 1 白色斑で日本産のウツボ科魚類と識別できる。

分布の概要 : フィリピン、インドネシア、フィジー。日本では西表島と沖縄島。

生態的特徴 : 生息個体数が少なく、本種の生活史に関する情報はない。仔魚期はレプトセファルスとして海域で過ごし、変態後に河川に遡上するものと推測されている。

生息地の条件 : マングローブが発達した河口の汽水域に生息する。

現在の生息状況 : 西表島と沖縄島の各 1 河川から確認されている。

学術的意義・評価 : 河川汽水域に生息するウツボ科魚類であり、その生態は未解明であり、学術的価値が高い。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であり、かつ生息場所である河口域は、架橋の付け替え、道路工事、リゾート開発、水質汚濁、赤土の流入などにより、環境が著しく悪化しつつある。沖縄島大浦川の生息地では、観光用の木道が建設され、その生息が危ぶまれる状況にある。

原記載 : Bleeker, P., 1863. Sur une nouvelle espèce d'*Echidna* de l'île de Rotti. Nederlandsch Tijdschrift voor de Dierkunde, 1: 246-247.

参考文献 : 波戸岡清峰, 2013. ウツボ科. “日本産魚類検索 全種の同定 第三版”, 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 秦野, 244-261, 1786-1792.
 波戸岡清峰・瀬能 宏・藍澤正宏, 1992. 日本およびフィジーより初記録のナミダカワウツボ (新称). I. O. P. Diving News, 3(4): 2-3.
 鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.
 瀬能 宏, 2015. ナミダカワウツボ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 12-13.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : **ゼブラアナゴ**
分類 : ウナギ目 アナゴ科
学名 : *Heteroconger polyzona* Bleeker, 1868
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長約 30 cm。左右の上唇が連続し、胸鰭を欠き、脊椎骨数 152~158。体は白色で約 20 の褐色横帯を有する。

近似種との区別 : 同属のチンアナゴとは褐色横帯を持つこと、脊椎骨数が少ないことで、別属のニシキアナゴとは左右の上唇が連続することで識別できる。

分布の概要 : フィリピン、インドネシア。国内では西表島の 1 箇所のみで記録。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産アナゴ科チンアナゴ亜科魚類は 5 種知られているが、本種以外はいずれもサンゴ礁外縁の水深 5~30 m に生息。

生態的特徴 : 砂底に直立した状態で群生し、体の後半部を砂中に、前半部を露出させてプランクトンを食べる。

生息地の条件 : 水深 1~2 m の海草藻場の砂底。

現在の生息状況 : 西表島にのみ生息。

学術的意義・評価 : 近縁種に比べ、極めて浅い所に分布する。本種の生態は未解明であり、学問的にも重要。

生存に対する脅威 : 西表島は、年々観光客が増加しており、本種の生息地にも開発の波が押し寄せつつある。

原記載 : Bleeker, P., 1868. Description de trois espèces inédites des poissons des îles d'Amboine et de Waigiou. Versl. Akad. Amsterdam (Ser. 2), 2: 331-335, 1 pl.

参考文献 : Hatooka, K., T. Yoshino, H. Senou and K. Yano, 1986. The fourth garden eel (Pisces, Congridae, Heterocongrinae) from Japan. Galaxea, 5: 255-259.

波戸岡清峰, 2000. アナゴ科. “日本産魚類検索 全種の同定 第二版”, 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 東京, 227-234.

Weber, M. and L. F. de Beaufort, 1916. The fishes of the Indo-Australian Archipelago, vol. III. Ostariophysi: II Cyprinoidea, Apodes, Symbranchi. E. J. Brill, Leiden.

吉野哲夫, 2005. ゼブラアナゴ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編”, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 145.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : **ドロクイ**
分類 : ニシン目 ニシン科
学名 : *Nematalosa japonica* Regan, 1917
方言名 : アシチン (リュウキュウドロクイと混称)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態 : 体長 25 cm。体はやや細長く、強く側扁する。体高は体長の 33~38%、吻の先端は丸みを帯び、口は小さく下方に位置する。生時の体色は、銀白色で、体側背部はやや青みを帯びた銀灰色。胸鰭上方の体側に 1 黒色斑を有す。躯幹部から尾部の体側上半に黄緑色の小斑が縦列する。背鰭前方の鱗は、すべて重なり合い正中線を覆う。腹鰭後方の稜鱗数は 13~16。背鰭最後軟条は、糸状に伸長する。

近似種との区別 : コノシロとは、背鰭前方の鱗は、すべて重なり合い正中線を覆うことで、リュウキュウドロクイとは、体高/体長比が小さいこと、腹鰭後方の稜鱗数が多いことで識別可能である。ただし、後種とは雑種を形成することがあるため、注意が必要である。

分布の概要 : 中国大陸沿岸、台湾。日本では、瀬戸内海、九州北岸、和歌山県、高知県で確認されているが個体群はいずれも小さい。琉球列島では沖縄島の沿岸に生息し、水産重要種として漁獲対象となっている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島では、近縁のリュウキュウドロクイと同所的に生息している。沿岸の埋め立てが進行した場所ほど、両種の自然交雑個体の割合が増加する。

生態的特徴 : 沖縄島における産卵期は、1~5(盛期 2~4)月で、50%成熟体長は雌雄ともに 160 mm である。最高齢は雌雄ともに約 7 歳、3 歳までに約 190 mm に達し、その後、成長が緩やかになる。孵化仔魚は、日齢 10 まで沖合に分散し、体長 10 mm で波打ち際の砂浜干潟に移動する。さらに、体長 15 mm になると泥干潟に移動し、そこで成長する。

生息地の条件 : 波打ち際の干潟を生育場とし、接岸時には砂浜海岸を、その後の生育には泥干潟を必要とする。全生活史を内湾の浅海域で完結する特異な生活史特性を持つ。

現在の生息状況 : 日本では模式産地の瀬戸内海を含め、近年、土佐湾と沖縄島以外での確認記録がない。今後、東アジア各地の集団との比較も必要である。さらに、沖縄島沿岸では同属のリュウキュウドロクイとの交雑個体が認められ、埋め立てによる生息および繁殖場所の攪乱が懸念されている。

学術的意義・評価 : 沖縄島集団は動物地理学上貴重であり、形態学的にも遺伝学的にも土佐湾集団とは違いが認められる。さらに沖縄島内でも中城湾と羽地内海で遺伝的差異が確認されている。

生存に対する脅威 : 埋め立てによる生息場所の消失およびそれに伴うリュウキュウドロクイとの交雑。

原記載 : Regan C. T., 1917. A revision of the clupeoid fishes of the genera *Pomolobus*, *Brevoortia* and *Dorosoma* and their allies. Annals and Magazine of Natural History (Ser. 8), 19 (112): 297-316.

参考文献 : Nelson G. and M. N. Rothman, 1973. The species of gizzard shads (Dorosomatinae) with particular reference to the Indo-Pacific Region. Bulletin of the American Museum of Natural History, 150: 131-206.

上原匡人・今井秀行・岩本健輔・太田 格・海老沢明彦・吉野哲夫・立原一憲, 2015. ドロクイ属

2種の分布および生息環境：近年の沿岸域の改変と交雑個体の出現の関係。魚類学雑誌，62：13-28。

Uehara, M. and K. Tachihara, 2015. Eproductive traits of the western Pacific gizzard shad *Nematalosa cometa*: implication for conservation and management in a population at its distributional margin. *Environmental Biology of Fishes*, 98: 1-10.

Whitehead P. J. P., 1985. Clupeoid fishes of the world, part 1. *FAO Fisheries Synopsis*, (125),7: i-x + 1-303.

執筆者名：立原一憲

和名：フナ属の1種
 分類：コイ目 コイ科
 学名：*Carassius* sp.
 方言名：ターイユ
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態：体長約 20 cm。背鰭 15~18 軟条、臀鰭 5 軟条、側線有孔鱗数 28~30、鰓耙数 41~57、体高比 2.1~3.0。体は楕円形で側扁し、臀鰭起点付近より後方で体高が急に低くなる。側線は完全。体色は通常オリーブ色を基調とした青黒褐色で、背側は褐色、腹側は銀色を帯びる。オスの鰓蓋と胸鰭には周年追星が見られる。

分布の概要：沖縄県内では、伊平屋島、伊是名島、沖縄島、渡嘉敷島、座間味島、久米島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島から報告があるが、南大東島の個体群は沖縄島からの移殖と考えられる。琉球列島内では、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島などから報告がある。国内のほぼ全域に生息し、国外では台湾、アジア大陸全土に広く分布する

近縁な種および群との分布状況の比較：沖縄島には、ゲンゴロウブナが移殖され、一部の水域では定着している。また、かつてナガブナと同定されたフナ属魚類が報告されたことがあるが、定着には至っていない。

生態的特徴：沖縄島における本種の産卵期は、通常3、4月を中心とした3~8月で、1産卵期間中に複数回産卵し、卵は通常3日で孵化する。産卵初期に生まれた雄は数ヶ月で成熟し、産卵後期には産卵に参加する。集団内に倍数性が存在し、染色体数 $2n=10$ の2倍体、 $3n=150$ の3倍体、 $4n=200$ の4倍体が確認されている。2倍体集団では雌雄がほぼ同率で存在し、通常の有性生殖で繁殖する。3倍体集団は雌のみで構成され雌性生殖を行う。4倍体集団には雌雄が存在し、メスは雌性生殖を行うが、雄が繁殖にどのように関わっているのかは不明である。

生息地の条件：平野部の湖沼や、そこに通ずる流れの緩やかな河川に生息する。稀に塩分の高い汽水域にも出現する。産卵に利用する水草が繁茂していることが望ましい。

現在の生息状況：以前は県内の全域で見られたが、近年の急速な河川環境の悪化に伴い、分布域・個体数ともに急速に減少している。また、県内の全域に中国・台湾・本州から人為的に移殖されたと考えられるフナが定着しており、在来フナの遺伝的固有性も急速に失われつつある。伊是名島、沖縄島、渡嘉敷島、久米島、宮古島、石垣島には在来のフナと移殖のフナが分布する。現在在来フナだけが分布するのは伊平屋島だけである。西表島、与那国島では近年フナが確認されず、絶滅の可能性が示唆される。

学術的意義・評価：ミトコンドリアDNAの分析から、琉球列島に生息するフナ個体群は、他地域の集団からおよそ100万年前に分化したと推定される自然分布集団であることが確認できている。本種は琉球列島の在来純淡水魚の歴史を考えるうえで極めて貴重な存在である。

生存に対する脅威：開発に伴う河川環境の悪化および産卵場所の消失により、生息・再生産可能な環境が急速に減少している。また、中国、台湾、日本の本州から移殖されたフナにより在来フナの遺伝子の攪乱が進んでいる。さらに、近年十分な情報がないままに安易に行われている“善意の放流”は、残り少ない在来フナの遺伝的独自性の消失を助長している。水系間および島嶼間でのフナの移動は厳に慎むべきである。

特記事項：現在日本に生息するフナ属魚類は、ゲンゴロウブナ、ギンブナ、ニゴロブナ、ナガブナ、キンブナ、オオキンブナの5亜種に分類されている。しかし、ゲンゴロウブナ以外の4亜種は互いに形態が類似し、形態による分類が困難な場合があり、分類学上の問題が未解決である。そのため、琉球列島で確認されるフナは形態よりギンブナに分類されるが、ここでは便宜上フナとした。

原記載：学名未確定。

参考文献：青柳兵司，1984。琉球列島産淡水魚類総説。動物学会誌，58：13-14。
 黒岩 恒，1927。琉球弧における淡水魚類採集概報。動物学雑誌，39：355-368。

Takada, M., K. Tachihara, T. Kon, G. Yamamoto, K. Iguchi, M. Miya, M. Nishida, 2010. Biogeography and evolution of the *Carassius auratus*-complex in East Asia. *BMC Evolutionary Biology*, 10: article 7.

高田未来美, 立原一憲, 西田 陸, 2010。琉球列島におけるフナ類の分布と生息場所：在来フナ類と移殖フナ類の比較。魚類学雑誌，57(3)：113-123。

執筆者名：遠藤(高田)未来美

和名：ドジョウ
 分類：コイ目 ドジョウ科
 学名：*Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリ：情報不足 (DD)

<魚類>

形態 : 全長約12 cm。雄に比べ雌がやや大きくなる。背鰭7軟条、臀鰭5-6軟条、胸鰭10軟条、腹鰭5軟条、脊椎骨数45~48。口ひげは5対。背側部に不明瞭な斑紋を持つが腹面は単色で斑紋はない。尾鰭と背鰭に褐色の小斑が散在する。尾鰭基部の上角に小黒色斑がある。雄の胸鰭は伸張し、第2鰭条基部に骨質板を形成する。雄の胸鰭の先端はとがり、雌の胸鰭は丸いため、胸鰭の形状で雌雄の判別が可能である。また、産卵期の雄では背鰭前方と背鰭基底付近に各1対のこぶ状突起が出現する。

近縁種との区別 : 本種の口ひげは5対だが、他のドジョウ科魚類は3もしくは4対である。

分布の概要 : 沖縄県内では伊平屋島、沖縄島、久米島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島から報告があるが、南大東島の個体群は沖縄島からの移殖である。琉球列島内では種子島、屋久島、奄美大島、徳之島で確認されている。日本各地に広く分布し、国外では中国大陸中部、台湾、朝鮮半島に広く分布する。

近縁な種および群との分布状況の比較 : 日本の本州ではカラドジョウの移入が問題となっているが、琉球列島への移入はなく、他の近縁種も分布しない。

生態的特徴 : 日本の本州における産卵期は6~7月である。夜間、水田などの浅い場所で雄が骨質板とこぶ状突起を用いて雌の腹部に巻きつき産卵する。卵は泥上にばら撒かれる。放卵雌の腹部には雄がまきつけた跡が明瞭に残る。孵化仔魚は浅い泥底の水域で育ち、1年後に成熟する。集団内に倍数性が存在する。

生息地の条件 : 平野部の浅い池沼、水田やそこに通じる水路、流れのない用水などを好む。泥底で、水生植物が繁茂することが望ましい。フナやタイワンキンギョなどと同所的に生息していることが多い。

現在の生息状況 : 琉球列島のどの島嶼でも分布域が急速に減少しつつあり、沖縄島では北部地域の水田を伴ったわずかな水系で確認されるのみである。

学術的意義・評価 : 沖縄県の個体群については自然分布、移殖起源の両論があるが、沖縄島および西表島のドジョウは他地域の集団から遺伝的に分化するだけでなく、形態が異なることが確認されており、自然分布の可能性が高い。この地域のドジョウが在来であれば、琉球列島における純淡水魚の分布の歴史的背景を探る上で極めて貴重な存在である。

生存に対する脅威 : 土地開発などによる水田の消失、水路の側溝化、河川改修による泥底の減少などの生息環境・繁殖場所の消失および外来魚による卵・仔稚魚の捕食などが挙げられる。

特記事項 : 遺伝学的・形態学的な調査から琉球列島のドジョウは自然分布の可能性が高いが、県外から複数回ドジョウが持ち込まれた記録もある。この地域のドジョウの起源は、早急に解決すべき問題である。
IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Canter, T. E., 1842. General features of Chusan, with remarks on the flora and fauna of that island. Ann. Mag. Nat. Hist. (N. S.), 9: 484-493.

参考文献 : 青柳兵司, 1984. 琉球列島産淡水魚類総説. 動物学会誌, 58: 13-14.
細谷和海, 2000. ドジョウ科. “日本産魚類検索 全種の同定 第二版”, 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 東京, 272-277.
鹿野雄一・中島 淳・水谷 宏・仲里裕子・仲里長浩・揖 善継・黄 亮亮・西田 信・橋口康之, 2012. 西表島におけるドジョウの危機的生息状況と遺伝的特異性. 魚類学雑誌, 59: 37-43.
黒岩 恒, 1927. 琉球弧における淡水魚類採集概報. 動物学雑誌, 39: 355-368.
清水孝昭・高木基裕, 2010. ミトコンドリア DNA による愛媛県を中心としたドジョウの遺伝的集団構造と攪乱. 魚類学雑誌, 57: 13-26.

執筆者名 : 遠藤 (高田) 未来美

和名 : タウナギ
分類 : タウナギ目 タウナギ科
学名 : *Monopterus* sp.
方言名 : トーナナジャー・ターウナジー
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 全長60~80 cm。体形は著しく伸長した円筒形で後端は細長く尖り、鰓蓋と胸鰭および腹鰭を欠く。背鰭・臀鰭・尾鰭は互いにつながり、わずかに隆起するのみである。体色は黄褐色の地色に暗褐色の不規則な斑紋がある。

近縁種との区別 : 体形の類似したウナギやオオウナギとは、鰓蓋と胸鰭を欠くことにより、容易に識別可能である。

分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、久米島、石垣島に生息している。琉球列島内では、奄美大島からの報告がある。国外ではミャンマーを西限とするインドシナ半島、インドネシア、フィリピン、中国南部、台湾、朝鮮半島に分布する。日本本土に生息する個体群は、移殖起源であるとされている。

近縁な種および群との分布状況の比較 : 近縁種は日本国内に生息していない。

生態的特徴 : 産卵期は6~8月で、雄は泥底にU字状の巣穴を作り、その中に泡でできた巣を作る。巣穴の近くで産卵し、雄は受精卵を口にくわえて巣穴に運び、泡巣に収容し、孵化まで卵に新鮮な空気を送るなど、保護を行う。雄は孵化仔魚を口内で保育する。1回の産卵数は10~数百である。雌性先熟型の性転換を行い、小型のものは雌、全長20~45 cmで間性、それより大型のものは雄である。空気呼吸を行い、水中に閉じ込めると窒息死する。水が無い条件下でも湿ってさえいれば生存可能で、水域から離れた場所で見つかることもある。

生息地の条件 : 水田やそれに隣接する水路、池沼、湿地、流れのゆるい河川に生息する。どの水域でも泥底で水生植物が繁茂していることが望ましい。空気呼吸を行うため、溶存酸素の低い水域でも生存可能である。

現在の生息状況 : 開発や畑作転換により水田や湿地が急速に減少し、ほとんどの生息場所が消失した。残された水域の環境も悪化の一途を辿っている。残存する個体群の生息場所は著しく分断されており、憂慮すべき状況にある。

学術的意義・評価 : 琉球列島のタウンナギは570年以上前に他地域の集団から分化した自然分布集団である。遺伝的特異性と進化的独自性の高い琉球列島の個体群は、この地域における純淡水魚の由来を知る上で極めて貴重な存在である。

生存に対する脅威 : 土地の造成や畑作転換に伴う沼や湿地の消失、河川改修に伴う自然川岸の消失などが挙げられる。また、業者やマニアによる採集圧も著しい。

原 記 載 : 学名未確定。

参 考 文 献 : 今谷信夫, 1989. タウンナギ. “日本の淡水魚”, 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山と溪谷社, 東京, 676-678.

前畑政善, 2003. タウンナギ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), (財) 自然環境研究センター, 東京, 201-202.

松本清二・岩田勝哉, 1997. タウンナギの雄による卵保護と仔稚魚の口内保育. 魚類学雑誌, 44: 34-41.

Matsumoto S., T. Kon, M. Yamaguchi, H. Takeshima, Y. Yamazaki, T. Mukai, K. Kuriwa, M. Kohda, M. Nishida, 2010. Cryptic diversification of the swamp eel *Monopterus albus* in East and Southeast Asia, with special reference to the Ryukyuan populations. Ichthyological Research, 57: 71-77.

米沢俊彦, 2003. タウンナギ. “鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 ー鹿児島県レッドデータブックー”, (財) 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 148.

Zuiew, B., 1793. Biga Muraenarum, novae species. Nova Acta Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, 7: 296-301.

執 筆 者 名 : 遠藤 (高田) 未来美

和 名 : **チンヨウジウオ**

分 類 : ヨウジウオ目 ヨウジウオ科

学 名 : *Bulbonaricus brauni* (Dawson and Allen, 1978)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) **環境省カテゴリー** : 該当なし

形 態 : 全長 7 cm。吻が管状に突出せず、胸鰭、背鰭、臀鰭を欠く。生時の体色は、濃赤色で白色の微小点が散在し、頭部前縁部と口唇部が白色を呈する。

近似種との区別 : 吻が管状に突出しないこと、胸鰭、背鰭、臀鰭を欠くこと、体色から他の日本産のヨウジウオ類とは区別される。

分布の概要 : 西部オーストラリア、パラオ諸島、スマトラ島沖。日本では西表島のみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本属には他に 2 種が知られ、西部太平洋と東部インド洋の熱帯域に分布する。

生態的特徴 : 生きたアザミサンゴの大型群体上で、多くの場合、雌雄ペアで生息する。生活史の詳細は未解明。

生息地の条件 : 西表島沿岸の水深 6~23 m のサンゴ礁域。

現在の生息状況 : 国内からの発見例は、極めてわずかである。

学術的意義・評価 : ヨウジウオ類の中でも特異な形態をしている。さらに、生きたサンゴ群体と共生している可能性が高く、学術的に極めて興味深い。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

生存に対する脅威 : 共生すると考えられるサンゴ群体が白化すると生息場所を失う。

原 記 載 : Dawson, C. E. and G. R. Allen, 1978. Synopsis of the ‘finless’ pipefish genera (*Penetopteryx*, *Apterygocampus* and *Enchelyocampus*, gen. nov.). Records of the Western Australian Museum, 6(4): 391-411.

参 考 文 献 : Dawson, C. E., 1984. *Bulbonaricus Herald* (Pisces: Syngnathidae), a senior synonym of *Enchelyocampus* Dawson and Allen, with description of *Bulbonaricus brucei* n. sp. from eastern Africa. Copeia, 1984(3): 565-571.

Dawson, C. E., 1985. Indo-Pacific pipefishes (Red Sea to the Americas). Gulf Coast Research Laboratory, Ocean Springs, Mississippi.

鈴木寿之・矢野維幾・瀬能 宏・吉野哲夫, 2003. 西表島から採集された日本初記録のヨウジウオ科の稀種チンヨウジウオ. I. O. P. Diving News, 14(1): 2-5.

吉野哲夫, 1990. 西表島崎山湾の魚類相. “崎山湾自然環境保全地域調査報告書”. 環境庁自然保護局 (編), 193-225.

吉野哲夫, 2005. チンヨウジウオ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編”, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 146.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : **ホシイッセンヨウジ**

分 類 : トゲウオ目 ヨウジウオ科

学 名 : *Microphis argulus* (Peters, 1855)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 体長約 13cm。背鰭 42~59 軟条、胸鰭 15~18 軟条、臀鰭 4 軟条、尾鰭 9 軟条、体輪数 16、17+36~39。軀幹部の下隆起線は不明瞭で、尾部の下隆起線とは不連続。吻は比較的短く、尾部は軀幹部より長い。生時の体色は、灰色を帯びた褐色。軀幹部も灰褐色だが、腹中線の周辺が橙色になること

<魚類>

もある。吻から鰓蓋にかけて濃褐色の縦帯がある。躯幹部側面に白い縁取りのある小黑斑が並ぶ。尾鰭は濃褐色で白い縁取りがある。

近似種との区別 : 同属のイッセンヨウジとは、躯幹輪数 16、躯幹部の小黑斑の存在により区別可能。
分布の概要 : インド洋のコモロ諸島・モーリシャス諸島、西・中央太平洋のジャワ島からマルケサス諸島。日本では西表島のみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表島の 2 河川からのみ知られている。

生態的特徴 : 両側回遊魚であると考えられているが、詳細は未解明。

生息地の条件 : 河川上流の渓流域に生息する。

現在の生息状況 : 西表島の限られた河川のみ。

学術的意義・評価 : 北半球における唯一の生息場所であり、生物地理学的に極めて興味深い。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であるとともに、個体数が少ない。リゾート開発、取水や観光客の生息地への立ち入りにより、生息地が荒廃しつつある。

原 記 載 : Peters, W., 1855. Uebersicht der in Mossambique beobachteten Fische. Archiv für Naturgeschichte, 21: 234-282.

参 考 文 献 : Dawson, C. E., 1984. Revision of the genus *Microphis* Kaup (Pisces:Syngnathidae). Bulletin of Marine Science, 35(2): 117-181.

瀬能 宏, 2013. ヨウジウオ科. “日本産魚類検索 全種の同定 第三版”, 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 秦野, 615-635, 1909-1913.

瀬能 宏・鈴木寿之・細川正富, 1995. 西表島で採集された北半球初記録の淡水性ヨウジウオ, ホシイッセンヨウジ (新称). I. O. P. Diving News, 6(3): 2-3.

瀬能 宏, 2015. ホシイッセンヨウジ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 68-69.

鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : タニヨウジ

分 類 : トゲウオ目 ヨウジウオ科

学 名 : *Microphis retzii* (Bleeker, 1856)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 体長約 13 cm。背鰭 32~42 軟条、胸鰭 16~20 軟条、臀鰭 4 軟条、尾鰭 9 軟条、体輪数 15~17+27~31。躯幹部と尾部の上隆起線・下隆起線はいずれも不連続。主鰓蓋骨に縦走隆起線が発達する。吻は比較的短く、尾部は躯幹部より長い。生時の体色は、茶色みを帯びた金色で、体背面は明灰色を帯びた茶色。眼から吻・鰓蓋後部・下部に向けて放射状の濃褐色帯がある。躯幹部中央隆起線上とその下方および尾部の下隆起線に沿って黒い縁取りのある白色小斑が並ぶ。尾鰭は濃褐色で透明または橙色の縁取りがある。

近似種との区別 : 尾鰭があること、躯幹部と尾部の上・下隆起線が不連続であること、背鰭鰭条数が 32~63 の範囲であることで他の日本産ヨウジウオ科魚類から識別され、同属他種とは主鰓蓋骨に縦走隆起線が発達することで区別される。

分布の概要 : インドネシアのロンボク島以东・フィリピン諸島以南の西太平洋、ポーンペイ島、サモア諸島。日本では西表島と静岡県河津川。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表島の数河川から記録されている。静岡のものは無効分散と考えられる。

生態的特徴 : 両側回遊性の生活史を持つと考えられ、雄が育児嚢で卵を保護する。詳細は未解明。

生息地の条件 : 河川の河口から渓流域にかけて生息。

現在の生息状況 : 西表島の生息場所は環境の悪化が懸念されている。

学術的意義・評価 : 西表島は分布の北限であり、生物地理学上興味深い。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であるとともに個体数が少ない。河川工事、橋梁の架け替え、リゾート開発、河川からの大規模取水などによる生息地の消失や環境悪化。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

原 記 載 : Bleeker, P., 1856. Beschrijvingen van nieuwe of weinig bekende vischsoorten van Manado en Makassar, grootendeels verzameld op eene reis naar den Molukschen Archipel in het gevolg van den Gouverneur Generaal Duymaer van Twist. Acta Societatis Regiae Scientiarum Indo-Neerlandicae, 1(6): 1-80.

参 考 文 献 : Dawson, C. E., 1984. Revision of the genus *Microphis* Kaup (Pisces:Syngnathidae). Bulletin of Marine Science, 35(2): 117-181.

Dawson, C. E., 1985. Indo-Pacific pipefishes (Red Sea to the Americans). The Gulf Coast Research Laboratory, Ocean Springs, Mississippi.

瀬能 宏, 2015. タニヨウジ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 70-71.

鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

Yoshino, T. and H. Yoshigo, 1998. First records of tow freshwater pipefishes of the genus *Microphis* (Syngnathiformes: Syngnathidae) from Japan. Ichthyological Research, 45(2): 201-204.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : ヒメテングヨウジ

分類名： トゲウオ目 ヨウジウオ科
 学名： *Microphis jagorii* Peters, 1968
 カテゴリ： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ： 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態： 体長約 17 cm。背鰭 33~40 軟条、胸鰭 18~22 軟条、臀鰭 4 軟条、尾鰭 9 軟条、体輪数 18~21+23~26。 軀幹部と尾部の上隆起線・下隆起線はいずれも不連続。主鰓蓋骨に縦走隆起線が発達する。吻は比較的長く、尾部は軀幹部より短い。生時の体色は、頭部や軀幹部が白あるいは淡黄色で、尾部は灰褐色。吻から鰓蓋にかけて濃褐色の縦帯が走る。軀幹部中央隆起線に沿って黒色小斑が並ぶ。尾鰭は濃褐色で白い縁取りがある。

近似種との区別： 吻長が頭長の 43.5~52.6%、軀幹輪数 19~20 であることから、同属他種と識別される。

分布の概要： フィリピン諸島。日本からは西表島と沖繩島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 西表島の 2 河川と沖繩島の 1 河川からのみ知られている。

生態的特徴： 両側回遊性の生活史を持つと考えられ、雄が育児嚢で卵を保護する。詳細は未解明。

生息地の条件： 河川中流域から渓流域。

現在の生息状況： 西表島では、道路工事による環境悪化と観光客の生息地への侵入が懸念されている。

学術的意義・評価： 沖繩島は分布の北限であり、生物地理学上興味深い。

生存に対する脅威： 分布が局所的であるとともに個体数が少ない。河川工事、橋梁の架け替え、リゾート開発、河川からの大規模取水などによる生息地の消失や環境悪化。

特記事項： IUCN カテゴリ： Data Deficient (DD)。

原記載： Peters, W., 1968. Über die von Hrn. Dr. F. Jagor in dem ostindischen Archipel gesammelten und dem Königl. Zoologischen Museum übergebenen Fische. Monatsberichte der Königlichen Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1868: 254-281.

参考文献： Dawson, C. E., 1984. Revision of the genus *Microphis* Kaup (Pisces: Syngnathidae). Bulletin of Marine Science, 35(2): 117-181.
 Dawson, C. E., 1985. Indo-Pacific pipefishes (Red Sea to the Americas). The Gulf Coast Research Laboratory, Ocean Springs, Mississippi.
 瀬能 宏, 2015. ヒメテングヨウジ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 72-73.
 鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.
 Yoshino, T. and H. Yoshigo, 1998. First records of tow freshwater pipefishes of the genus *Microphis* (Syngnathiformes: Syngnathidae) from Japan. Ichthyological Research, 45(2): 201-204.

執筆者名： 立原一憲

和名： カワボラ
 分類名： ボラ目 ボラ科
 学名： *Cestraeus plicatilis* Valenciennes, 1836
 カテゴリ： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ： 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態： 体は流線型で、よく側扁する。上顎に単尖頭と 2 尖頭からなる固着性の歯がある。下顎の前縁下部に角質の隆起線が発達し、腹面には 1 対の肉質突起がある。生時の体色は、背部が黒ずみ、体側から腹部にかけてオリーブ色から銀白色のグラデーションとなる。

近似種との区別： 口部周辺の特徴から、他のボラ科魚類と区別される。

分布の概要： フィリピン、スラウェシ、ニューギニア、ニューカレドニア、フィジー。日本では西表島のみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本属に含まれる 3 種は、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニアの大きな河川上流域に分布する。

生態的特徴： 降下回遊もしくは海洋性両側回遊をされると考えられるが、詳細は不明。

生息地の条件： 流量の多い河川上流域の岩盤や巨石がある淵に生息する。

現在の生息状況： 本種は、西表島の 1 河川に少数個体が生息しているのみ。

学術的意義・評価： 本属魚類は、ボラ科魚類の系統類縁関係を考える上で学術的に極めて重要な種である。また、熱帯の島嶼河川に分布する本種が西表島にも分布することは生物地理学的に興味深い。

生存に対する脅威： 生息数が極めて少なく、西表島の 1 河川に局所的に分布すること、生息する河川の上流から大規模な取水が計画されていることから、緊急に保全措置が必要である。

特記事項： IUCN カテゴリ： Data Deficient (DD)

原記載： Valenciennes, A., 1836. Histoire naturelle des poissons, 11. Levrault, Paris.

参考文献： 瀬能 宏, 2013. ボラ科. “日本産魚類検索 全種の同定 第三版”, 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 秦野, 636-941, 1913-1918.
 瀬能 宏, 2015. カワボラ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 74-75.
 瀬能 宏・吉野哲夫・鈴木寿之, 2006. 沖繩県のレッドデータブックに掲載された保全上重要な淡水性ボラ科魚類の同定と新標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 53: 196-198.
 Harrison, I. J. and H. Senou, 1999. Order Mugiliformes: Mugilidae. “The living marine resources of the Western Central Pacific”, Carpenter K. E. and V. H. Niem (eds.), FAO Species Identification Guide for Fishery Purposes, 4, 2069-2108.
 Weber, M. and L. F. de Beaufort, 1922. The fishes of the Indo-Australian Archipelago, vol. IV. E. J. Brill, Leiden.
 鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

執筆者名：立原一憲

和名：ナガレフウライボラ

分類：ボラ目 ボラ科

学名：*Crenimugil heterocheilos* (Bleeker, 1855)

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態：体長約 30 cm。上唇下縁中央部には乳頭状突起があるが、側方部はやすり状の縁のみ。下唇前縁はなめらかで、ひだ状になっていない。第 1 背鰭が 4 棘、第 2 背鰭が 8~10 軟条、臀鰭条数が 3 棘 8~9 軟条。縦列鱗数 35~39。体色は、銀白色で背部はややオリーブ色。虹彩上部は橙色を呈し、主鰓蓋骨上部に黄色斑、胸鰭基底上端に 1 黒色斑を有す。

近縁種との区別：上唇下縁全体に乳頭状突起がないこと、下唇前縁がひだ状になっていないことで同属のフウライボラと区別できる。

分布の概要：フィリピン諸島、インドネシア、ニューヘブリディーズ諸島、クイーンズランド、モーリシャス。日本では石垣島と西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較：常時生息するのは、西表島の 2 河川のみ。近縁のフウライボラは海産で沿岸域に生息するのに対し、本種は河川の淡水域に遡上する。

生態的特徴：淡水性両側回遊の生活史を持つと推測される。岩表面に生える微小藻類を摂餌し、長方形の食み跡を残す。

生息地の条件：流量のある清冽な渓流域が不可欠。

現在の生息状況：西表島の生息域では、個体数が減少しており、特に大型個体が少なくなりつつある。

学術的意義・評価：南琉球の渓流域で特異な生態的地位を持つ。海産のフウライボラと比較することで、海産魚が島嶼の淡水域に二次淡水魚として侵入、進化していく過程を知り得る学術的に貴重な種である。

生存に対する脅威：分布が局所的であり、個体数が年々減少している。現在、最も憂慮されるのは、生息河川上流域から大規模な取水が計画されている事であり、生息環境の悪化が懸念される。

特記事項：IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載：Bleeker, P., 1855. Tweede bijdrage tot de kennis der ichthyologische fauna van Batjan. Natuurkd. Tijdschr. Neder. Indië, 9: 191-202.

参考文献：Harrison I. J. and H. Senou., 1999. Order Mugiliformes: Mugilidae. "The living marine resources of the Western Central Pacific", Carpenter K. E. and V. H. Niem (eds.), FAO Species Identification Guide for Fishery Purposes, vol. 4, 2069-2108.

瀬能 宏, 2000. ボラ科. "日本産魚類検索 全種の同定 第三版", 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 秦野, 636-641, 1913-1918.

瀬能 宏, 2015. ナガレフウライボラ. "レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-4 汽水・淡水魚類", 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 208-209. 鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51 (1): 72-74.

執筆者名：立原一憲

和名：ミナミメダカ

分類：ダツ目 メダカ科

学名：*Oryzias latipes* (Temminck and Schlegel, 1846)

方言名：タカミー

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU)

形態：体長約 3.5 cm、雌が雄よりもやや大きくなる。頭部は前端でやや縦扁し、両眼の間は広く平坦である。プランクトンや落下昆虫を食べる雑食性である。側線は無く、背鰭が臀鰭後端に相対する背部後方に位置する。雄では背鰭外縁が大きく欠刻するが雌ではしないなど、背鰭と臀鰭に明瞭な性差が認められる。雌雄ともに暗褐色の背中線が 1 本走る。体は半透明で黄色味を帯びた淡褐色である。

近縁種との区別：外来種のグッピーやカダヤシとは臀鰭の形状から容易に識別できる。ミナミメダカでは臀鰭基底が背鰭のそれより長い、前 2 種では両基底の長さがほぼ同じである。

分布の概要：沖縄県内では沖縄島、渡嘉敷島、久米島、伊平屋島、南大東島から報告があるが、南大東島の個体群は明らかに移殖されたものである。琉球列島内では、種子島、奄美大島、喜界島、加計呂麻島などから記録がある。ミナミメダカはいくつかの型に分けられており、沖縄県のものは琉球型とされている。

近縁な種および群との分布状況の比較：ミナミメダカの分布が確認されているすべての島嶼にグッピー、カダヤシ、ソードテールなど、本種の競争相手となる可能性の極めて高い外来種が侵入・定着している。

生態的特徴：基本的に 1 年魚である。沖縄島での産卵期は 3~10 月頃である。産卵は早朝に行われ、雌は受精卵を塊のまま腹につけて保護した後、卵膜の付着糸で卵塊を水草などに何度かに分けて絡み付ける。孕卵数は 50~70 粒で、1 回の産卵で産み出す卵数は 10 粒程度である。卵はおよそ 3 日で孵化する。

生息地の条件：河川下流の緩流部、水田とそれに付随する細流、池沼などのうち、産卵に利用する水草の繁茂した水域に生息する。塩分耐性が高く、まれに塩分の高い汽水域にも出現する。

- 現在の生息状況** : 沖縄島では1960年代まで南部にも生息していたが、1970年代に生息場所・個体数ともに急速に減少した。現在は限られた一部の地域に少数が生息するのみである。生息地は互いに分断されている。
- 学術的意義・評価** : 琉球列島のメダカ集団は、遺伝的に分化した固有個体群であることがミトコンドリアDNAの分析から明らかになっている。沖縄島でしか確認できない遺伝子型を示す個体も確認されているものの、他地域から人為的に持ち込まれたメダカも確認されており、遺伝子の攪乱が進行していると推定される。琉球列島のミナミメダカは、この地域における純淡水魚の由来を知る上で極めて貴重な存在である。
- 生存に対する脅威** : 開発やそれに伴う埋め立てにより、生息場所の減少・消失および環境悪化が著しい。また、産卵場所消失につながる河川の側溝化も大きな問題である。残り少ない生息地でも、競合する外来種の侵入・定着による個体数の減少や、他地域から持ち込まれたメダカ科魚類との交雑による遺伝子の攪乱が懸念される。
- 特記事項** : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
- 原記載** : Temminck, C. J. and H. Schlegel, 1846. Pisces, Siebold's Fauna Japonica, 173-269.
- 参考文献** : 林 公義, 1998. メダカ. “日本の希少な野生生物に関するデータブック” 水産庁 (編), 日本水産資源保護協会, 東京, 162-163.
細谷和海, 2015. メダカ南日本集団. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 296-297.
伊藤 優・立原一憲・今井秀行, 2006. 琉球型メダカ集団の現状と低い遺伝的変異性. 2006年度日本魚類学会講演要旨, 22.
岩松鷹司, 1993. メダカ学. サイエンス社, 東京.
黒岩 恒, 1927. 琉球弧における淡水魚類採集概報. 動物学雑誌, 39: 355-368.
幸地良仁, 1985. 沖縄島におけるメダカ類3種の種間関係. 日本生物教育会誌, 21: 2-18.
Matsuda, M., H. Yonekawa, S. Hamaguchi, M. Sakaizumi, 1997. Geographic variation and diversity in the mitochondrial DNA of the Medaka, *Orizias latipes*, as determined by restriction endonuclease analysis. Zoological Science, 14: 517-526.
米沢俊彦, 2003. メダカ. “鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編—鹿児島県レッドデータブック—”, (財)鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 144.

執筆者名 : 遠藤 (高田) 未来美

- 和名** : ヒゲソリオコゼ
分類 : スズキ目 ハオコゼ科
学名 : *Tetraroge nigra* (Cuvier, 1829)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体はやや細長く、側扁する。涙骨に2棘をもち、後方の棘は大きく、先端が主鰓蓋骨後端を越える。前鰓蓋骨上部に後方に向かう大きな1棘、その下に埋没した2棘、主鰓蓋骨に弱い2棘を有す。生時の体色は、体全体が黒もしくは濃褐色、頭部から軀幹部にかけての腹部はやや白い。

近似種との区別 : 体表は無鱗だが、小突起がある事で他のハオコゼ科魚類と識別される。同属のアゴヒゲオコゼとは、髭を欠くことで容易に区別される。

分布の概要 : インド洋から西太平洋の熱帯域に広く分布。日本では西表島のみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表島の数河川に分布が限られている。

生態的特徴 : 両側回遊型の生活史を持つと考えられるが、詳細は未解明。

生息地の条件 : 河川の汽水域から淡水域。マングローブの岩盤や河川の礫底に生息。

現在の生息状況 : 西表島の数河川から知られているに過ぎない。

学術的意義・評価 : 西表島が分布北限に当たり、魚類の分散戦略を考えるうえで興味深い。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であり、個体数も少ない。河川工事や観光客の生息地への侵入が懸念される。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Cuvier, G. and A. Valenciennes, 1829. Histoire naturelle des poissons, 4. Levrault, Paris.

参考文献 : 瀬能 宏, 2015. ヒゲソリオコゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 78-79.
鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.
Yoshino, T. and H. Senou, 1983. Two scorpaenoid fishes of the genus *Tetraroge* collected from the Ryukyu Islands. Galaxea, 2: 15-20.

執筆者名 : 立原一憲

- 和名** : アゴヒゲオコゼ
分類 : スズキ目 ハオコゼ科
学名 : *Tetraroge barbata* (Cuvier, 1829)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体長9 cm。体は側扁した卵型で、頭部が大きく、背鰭起部と吻端間の傾斜は急で強く下を向く。下顎前端に1対の髭を持つ。生時の体色は、茶褐色から黒褐色で、尾鰭に太い白色縦帯がある。

近似種との区別 : 体形と体色で同属他種と識別可能。同属のヒゲソリオコゼとは1対の髭を持つことで区別。

分布の概要 : フィリピン諸島、ジャワ、スラウェシ島、アンボン島、ニューギニア、ソロモン諸島、ニューカレ

ドニア、パラオ諸島。日本では西表島のみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 西表島の数河川に限定。

生態的特徴： 生活史は未解明。

生息地の条件： マングローブが発達した河口域の落ち葉の堆積した砂泥底に生息。

現在の生息状況： わが国では西表島のみ生息。

学術的意義・評価： 西表島が本種の分布北限であるとともに、本科魚類で河川汽水域に棲むものは珍しく、学術的に興味深い。

生存に対する脅威： 分布が局所的で、個体数も少ない。河川工事による環境変化が懸念される。

特記事項： IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。

原記載： Cuvier, G and A. Valenciennes, 1829. Histoire naturelle des poissons, 4. Levrault, Paris.

参考文献： 鈴木寿之, 2015. アゴヒゲオコゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 76-77.

鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

Yoshino, T. and H. Senou, 1983. Two scorpaenoid fishes of the genus *Tetraroge* collected from the Ryukyu Islands. Galaxea, 2: 15-20.

執筆者名： 立原一憲

和名： タマカイ

分類： スズキ目 ハタ科

学名： *Epinephelus lanceolatus* (Bloch, 1790)

方言名： アーラミーバイ

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態： 体長約 200 cm に達する世界最大のハタ科魚類。背鰭第 3~11 棘は、ほぼ同長で最長背鰭軟条よりも短い。背鰭は 11 棘 14~16 軟条、臀鰭は 3 棘 8 軟条。側線有孔鱗数 54~62 であり、有孔側線鱗の貫通管に 4~6 本の放射状小管を有す。体色は、黒褐色で多数の不規則な白色斑紋がある。各鰭の軟条部は黄色を呈し黒褐色斑が散在。

近似種との区別： 側線鱗に放射状小管を備え、黒褐色で多数の不規則な白色斑を有す独特の体色から同属の他種と区別できる。

分布の概要： 紅海、アフリカ東岸からハワイ、ポリネシアまでのインド-太平洋の熱帯域。日本では、沖縄島以南の琉球列島、和歌山県、伊豆・小笠原諸島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 他の多くのハタ科魚類と重複した分布域を持つ。

生態的特徴： サンゴ礁に生息する最大の硬骨魚類。生態系で最上位の生態的地位にあり、獷猛で大型の甲殻類、魚類、爬虫類などを幅広く摂餌する。

生息地の条件： サンゴ礁外縁の急斜面からその外側の深みに生息する。

現在の生息状況： 日本における生息個体数はきわめて少ない。

学術的意義・評価： サンゴ礁に生息する最大の硬骨魚類であるにもかかわらず、生活史は未解明であり、生態学的にも興味深い。

生存に対する脅威： 電燈潜り、はえ縄漁などによる漁獲。

特記事項： IUCN カテゴリー： Vulnerable (VU)。

原記載： Bloch, M. E., 1790. Naturgeschichte der ausländischen Fische. Berlin. Naturg. Ausl. Fische, 4: i-xii + 1-128, pls. 217-252.

参考文献： Heemstra, P. C. and J. E. Randall., 1993. Groupers of the world (family Serranidae, subfamily Epinephelinae). FAO Fisheries Synopsis, (125), 16: i-viii + 1-382, pls. 1-31.

片山正夫, 1984. ハタ科. “日本産魚類大図鑑”, 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編), 東海大学出版会, 東京, 123-134, pls. 114-124.

Randall, J. E. and P. C. Heemstra, 1991. Revision of Indo-Pacific groupers (Perciformes: Serranidae: Epinephelinae), with descriptions of five new species. Indo-Pacific Fishes, (20): 1-332, pls. 1-41.

瀬能 宏, 1997. ハタ科. “日本の海水魚”, 岡村 収・尼岡邦夫 (編・監修), 山と溪谷社, 東京, 251-277.

吉野哲夫, 2005. タマカイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編”, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 178.

執筆者名： 立原一憲

和名： オオアオノメアラ

分類： スズキ目 ハタ科

学名： *Plectropomus areolatus* (Rüppell, 1930)

方言名： アカジンミーバイ (混称)

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態： 体長 100 cm. 背鰭棘数が 8、前鰓蓋骨下縁に前向棘を有し、臀鰭第 1 棘が皮下に埋没する。尾鰭後縁は載形に近い円形。生時の体色は、暗赤褐色の地色に、瞳孔と同大の黒い縁取りのある青色斑が全身に散在する。

近似種との区別： 近縁のスジアラとは、尾鰭が載形に近い円形であること、青色斑が大きいことで識別可能である。

<魚類>

生息地の条件 : 未成魚は、汽水とその直上の淡水域の瀬と淵を行き来する。大型個体は汽水域の上端に生息することが多い。

現在の生息状況 : 局所的に西表島の1河川に生息し、個体数も少ない。

学術的意義・評価 : 本種は、パプアニューギニア南部と西表島のみから報告されており、生物地理学的に極めて興味深い。

生存に対する脅威 : 本種は河川の汽水域から淡水域の下端を行き来して生活している。現在、西表島の生息地である浦内川の上流域から大規模な取水が計画されており、汽水上端と淡水域下端の接続域の環境が大きく変わる可能性が懸念されている。

原 記 載 : Macleay, W., 1882. Contribution to a knowledge of the fishes of New Guinea. Proceedings of the Linnean Society of New South Wales, 7: 224-250.

参 考 文 献 : Allen, G R., 1985. Snappers of the world. An annotated and illustrated catalogue of lutjanid species known to date. FAO Fisheries Synopsis, (125), 6: i-v + 1-208, pls.1-28.

Allen, G R. and F. H. Talbot., 1985. Review of the snappers of the genus *Lutjanus* (Pisces: Lutjanidae) from the Indo-Pacific, with the description of a new species. Indo-Pacific Fishes, (11): 1-87, pls.1-10.

瀬能 宏, 2015. ウラウチフェダイ. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 82-83.

鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

瀬能 宏・鈴木寿之, 1992. 西表島から採集された日本初記録のウラウチフェダイ(新称). I. O. P. Diving News, 3(4): 4-5.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : テッポウウオ

分 類 : スズキ目 テッポウウオ科

学 名 : *Toxotes jaculator* (Pallas, 1767)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 体長 20 cm. 体は、体高があり、強く側扁し、頭部断面が逆三角形をなす。口は大きく、吻が尖る。口蓋の正中線上に1縦溝があり、ここから水を噴出する。生時の体色は、地色が銀白色で、背部がやや緑がかかった暗色。体側背部に5本の黒色横斑が並ぶ。尾鰭は黄色、背鰭軟条部と背鰭は黄色に縁どられ、その基底に灰褐色の縦帯を有す。

分布の概要 : ベンガル湾からベトナム、インドネシア、フィリピン、パラオ、ニューヘブリデス諸島、オーストラリア北岸などに分布する。日本では西表島のみに。

生態的特徴 : 陸上の昆虫を口から噴出した水で撃ち落として捕食する独特な捕食習性を持つ。生活史は未解明である。

生息地の条件 : マングローブ湿地の水路に生息する。河口近くの木が水面にオーバーハングした場所や汽水域の河道中央部に形成された砂州の浅場に定位する。

現在の生息状況 : 西表島の3河川に生息するのみ。

学術的意義・評価 : 西表島が分布北限に当たり、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 局所分布であり、個体数もそれほど多くはない。近年、しばしばルアーフィッシングにより釣獲されている。汽水域の水質汚染、港の増設により、かつての生息場所が失われた例がある。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原 記 載 : Pallas, P. S., 1767. Philosophical Transactions of the Royal Society of London, 56(1766): 187-188.

参 考 文 献 : Allen, G., 1978. A review of the archerfishes (family Toxotidae). Records of the Western Australian Museum, 6: 355-378.

瀬能 宏, 2015. テッポウウオ. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 86-87.

瀬能 宏・吉野哲夫・矢野維幾, 1987. 西表島で採集されたテッポウウオ *Toxotes jaculator*. 魚類学雑誌, 34(2): 231-232.

鈴木寿之・瀬能 宏・矢野維幾・細川正富・吉郷英範, 2002. 西表島に定着したテッポウウオ. I. O. P. Diving News, 13(2): 2-4.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : ヨコシマイサキ

分 類 : スズキ目 シマイサキ科

学 名 : *Mesopristes cancellatus* (Cuvier, 1829)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 体長 30 cm. 体は体高があり、側扁する。吻は尖り、成魚の上顎が下顎より著しく前方に突出し、上唇が肥厚する。生時の体色は、地色は光沢のある鈍い銀緑色を呈し、腹面は銀白色。体側上半に6本の濃色横帯が、体側下半に3本の縦帯もしくは縦列斑がある。

近似種との区別 : 背鰭と臀鰭軟条部の外縁が直線状、前後の鼻孔が接近して開孔、体側に横列斑と縦列斑が並ぶことなどで同属2種と容易に識別可能。

生態的特徴 : 両側回遊型の生活史を持つと考えられるが、詳細は未確認。

分布の概要 : 台湾、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニア、ソロモン諸島。日本では、西表島の3河

川と沖縄島の2河川で見つかっている。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本属魚類は5種知られており、そのうち3種が日本に分布している。

生息地の条件： 流量の比較的多い清冽な河川の淵と瀬を行き来して生活。

現在の生息状況： 分布が局所的で、個体数も極めて少ない。

学術的意義・評価： 本属魚類は海起源の海産魚類が島嶼で淡水に適応・分化していく例として生物地理学的に極めて興味深い。

生存に対する脅威： 本種は河川の淡水域下端から上流の淵と瀬を行き来して生活している。現在、西表島の主要な生息地である浦内川の上流域から大規模な取水が計画されており、汽水上端と淡水域下端の接続域の環境が大きく変わる可能性が懸念されている。

特記事項： IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載： Cuvier, G and A. Valenciennes, 1829. Histoire naturelle des poissons, 3. Levrault, Paris.

参考文献： Maeda, K., T. Saeki and K. Tachihara, 2011. New record of a freshwater terapontid fish, *Mesopristes cancellatus* (Teleostei: Terapontidae) from Okinawa Island in the Ryukyu Archipelago. Biogeography, 13: 45-50.

瀬能 宏, 2015. ヨコシマイサキ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 88-89.

鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

Vari, R. P., 1978. The terapon perches (Percoidei, Teraponidae). A cladistic analysis and taxonomic revision. Bulletin of the American Museum of Natural History, 159: 175-340.

Yoshino, T., H. Yoshigou and H. Senou, 2002. *Mesopristes iravi*, a new terapontid fish (Perciformes: Terapontidae) from Rivers of Iriomote Island, the Ryukyu Islands. Ichthyological Research, 49: 234-239.

執筆者名： 立原一憲

和名： ニセシマイサキ

分類： スズキ目 シマイサキ科

学名： *Mesopristes argenteus* (Cuvier, 1829)

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態： 体長約 30 cm。体は体高があり、強く側扁する。吻が尖り、成魚の上顎は下顎よりも突出し、上唇はやや肥厚する。前後の鼻孔は離れる。生時の体色は、銀色の光沢をもつ灰色で、腹面は銀白色。背鰭と尾鰭は、くすんだ黄色、腹鰭と臀鰭は濃灰色を呈す。幼魚は、銀白色で4本の明瞭な黒色縦帯がある。

近似種との区別： 未成魚には体側に4本の黒色縦帯があるが、成魚では、体色が一律な銀白色であること、幼魚では眼を通る黒色縦帯が眼の後方で分断されないこと、背鰭第5棘が長いことで同属のシミズシマイサキと識別可能。

分布の概要： スマトラ島からカリマンタン島、フィリピン諸島からバヌアツにかけての熱帯域。日本では西表島と石垣島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本属魚類5種のうち、3種が日本に分布している。同所的に3種が出現するのは、西表島のみである。

生息地の条件： 成魚は、流量のある河川の汽水域に生息、主に幼魚が淡水域に侵入する。

現在の生息状況： 西表島ではコンスタントに観察されるが、個体数は決して多くない。

学術的意義・評価： 本種は主に汽水域から淡水域に生息し、八重山諸島が分布北限となっている。また、海起源の魚類が島嶼で淡水に適応し、種分化していく過程を知るうえで、学術的にも極めて興味深い。

生存に対する脅威： 本種は河川の汽水域と淡水域を行き来して生活している。現在、西表島の主要な生息地である浦内川の上流域から大規模な取水が計画されており、汽水上端と淡水域下端の接続域の環境が大きく変わる可能性が懸念されている。

特記事項： IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載： Cuvier, G and A. Valenciennes, 1829. Histoire naturelle des poissons, 3. Levrault, Paris.

参考文献： 瀬能 宏, 2015. ニセシマイサキ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 90-91.

鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

Vari, R. P., 1978. The terapon perches (Percoidei, Teraponidae). A cladistic analysis and taxonomic revision. Bulletin of the American Museum of Natural History, 159: 175-340.

Yoshino, T., H. Yoshigou and H. Senou, 2002. *Mesopristes iravi*, a new terapontid fish (Perciformes: Terapontidae) from Rivers of Iriomote Island, the Ryukyu Islands. Ichthyological Research, 49: 234-239.

執筆者名： 立原一憲

和名： シミズシマイサキ

分類： スズキ目 シマイサキ科

学名： *Mesopristes iravi* Yoshino, Yoshigou and Senou, 2002

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態： 体長 25 cm。体は体高があり、強く側扁する。吻がとがり、成魚の上顎と下顎の先端は、ほぼ同じ位置にあり、上唇は肥厚しない。前後の鼻孔はよく離れる。生時の体色は、銀色光沢のあるくすん

<魚類>

だ黄緑色を呈し、体側に幅の広い4本の黒色縦帯がある。眼を通る縦帯は、眼の後方で不連続となる。各鱗は黒ずんだ黄色。

近似種との区別： 未成魚のみならず成魚も体側に4本の黒色縦帯をもつこと、眼を通る黒色縦帯が眼の後方で分断されること、第5背鱗が短いことで、同属のニセシマイサキと識別可能。

分布の概要： 西表島、フィリピン、パプアニューギニアに分布する。西表島では2河川から知られているのみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本属魚類5種のうち、3種が日本に分布している。同所的に3種が出現するのは、西表島のみである。

生息地の条件： 流量のある河川の淡水域の瀬と淵を行き来して生活している。両側回遊型の生活史を持つと考えられるが、詳細は未確認。

現在の生息状況： 西表島の2河川からのみ知られているが、生息个体数は極めて少ない。

学術的意義・評価： 本種は2002年に西表島産のホロタイプを基に新種記載された。海起源の魚類が島嶼で淡水に適応し、種分化していく過程を知るうえで、学術的にも極めて興味深い。

生存に対する脅威： 本種は河川の淡水域下流から上流の淵と瀬を行き来して生活している。現在、西表島の主要な生息地である浦内川の上流域から大規模な取水が計画されており、汽水上端と淡水域下流の接続域の環境が大きく変わる可能性が懸念されている。

原記載： Yoshino, T., H. Yoshigou and H. Senou, 2002. *Mesopristes iravi*, a new terapontid fish (Perciformes: Terapontidae) from Rivers of Iriomote Island, the Ryukyu Islands. *Ichthyological Research*, 49: 234-239.

参考文献： 瀬能 宏, 2015. シミズシマイサキ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 92-93.
鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. *魚類学雑誌*, 51(1): 72-74.
Vari, R. P., 1978. The terapon perches (Percoidae, Teraponidae). A cladistic analysis and taxonomic revision. *Bulletin of the American Museum of Natural History*, 159: 175-340.

執筆者名： 立原一憲

和名： トゲナガユゴイ

分類： スズキ目 ユゴイ科

学名： *Kuhlia munda* (De Vis, 1884)

方言名： ミキュー (混称)

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態： 体長 18 cm。体型は卵型でやや延長し、強く側扁する。頭部背縁はほぼ直線的。生時の体色は、銀白色の地色で、体側に斑紋を欠き、成魚では尾鱗が一様に黒色を呈する。

近似種との区別： 同所的に生息するユゴイ、オオクチュゴイとは、体側に斑紋を欠くことと尾鱗の色彩で識別可能。

分布の概要： クイーンズランド、ニューカレドニア、バヌアツ、パプアニューギニア、フィジー、ビキニ島に分布。日本では屋久島、西表島、小笠原諸島に生息。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 日本に生息するユゴイ科4種のうち、ギンユゴイを除く3種が河川に生息する。ユゴイとオオクチュゴイが汽水と淡水域に広く分布するのに対し、本種は汽水域に多い。

生態的特徴： 生活史は未解明であるが、おそらくユゴイやオオクチュゴイ同様、降河回遊型の生活史を持つものと推測される。

生息地の条件： 比較的水量のある河川の汽水域。川岸に植生がオーバーハングした場所に定位する。

現在の生息状況： 西表島の生息地では確認されることが少なくなっている。

学術的意義・評価： 琉球列島が分布の北限にあたり、生物地理学的に重要である。また、生活史が未解明であり、琉球列島の個体群が再生産に関与しているかどうか調べる必要がある。

生存に対する脅威： 個体数が少ないうえ、生息場所周辺における河川改修や架橋の付け替えなどによる生息環境の悪化。

特記事項： IUCN カテゴリー： Data Deficient (DD)。

原記載： De Vis, C. W., 1884. *New Australian fishes in the Queensland Museum. Proceedings of the Linnean Society of New South Wales*, 9: 389-400.

参考文献： 林 公義・萩原清司, 2013. トゲナガユゴイ. “日本産魚類検索 全種の同定 第三版”, 中坊徹次(編), 東海大学出版会, 秦野, 1072.

執筆者名： 立原一憲

和名： カンムリブダイ

分類： スズキ目 ブダイ科

学名： *Bolbometopon muricatum* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1840)

方言名： クジラブツタイ

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態： 体長約 120 cm。両顎の歯板は、クチバシ状で外表面がタイル状である。成魚になると顎部が垂直に突出するが、その幅は狭い。前鼻孔より後鼻孔が大きい。側線が体側後部で中断する。生時の体色は、未成魚では暗灰色、成魚になると暗緑色を呈す。

近似種との区別： 本種と同様に大型となるメガネモチノウオとは、両顎の歯がクチバシ状の歯板を形成すること、他の顎部の突出するブダイ科魚類とは、歯板がタイル状であること、後鼻孔が前鼻孔よりも大きいことなどで容易に識別可能。

分布の概要： インド-太平洋の熱帯海域に広く分布。日本では八重山諸島近海。
 近縁な種及び群との分布状況の比較： 20種以上のブダイ科魚類が、本種と同所的に生息している。
 生態的特徴： 昼間、数10個体で群泳し、生きた造礁サンゴや微小付着藻類を捕食する。夜間になるとサンゴ礁の棚部や造礁サンゴ群体などの下で眠る。
 生息地の条件： 健全なサンゴ礁が発達した場所が必要。幼魚は礁池内にもいるが、成魚は外洋に面した水深30mまでのサンゴ礁外側斜面や水路部に生息。
 現在の生息状況： 小型個体が時々市場に水揚げされるが、大型個体は極めて少ない。海外では中・大型個体が群泳する場所があるが、琉球列島でそのような光景に出合うことは稀である。
 学術的意義・評価： 世界最大のブダイ科魚類であり、サンゴ礁生態系の中で造礁サンゴ食者として重要な位置を占めている。
 生存に対する脅威： 健全な造礁サンゴ群体の減少と電燈潜りなど漁業による漁獲。
 特記事項： IUCN カテゴリー： Vulnerable (VU)。
 原記載： Cuvier, G and A. Valenciennes, 1840. Histoire naturelle des poissons, 14. Pitois-Levrault, Paris.
 参考文献： Bellwood, D. R., 2001. Scaridae. "The living marine resources of the Western Central Pacific", Carpenter K. E. and V. H. Niem (eds.), Identification Guide for Fishery Purposes, 6, 3468-3492, pls.6-14.
 吉野哲夫, 2005. カムリブダイ. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編", 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 179-180.

執筆者名： 立原一憲

和名： ウラウチヘビギンポ
 分類： スズキ目 ヘビギンボ科
 学名： *Enneapterygius cheni* Wang, Shao and Shen, 1996
 カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態： 体長2cm。体は、やや側扁した円筒形で、頭部がやや縦扁し、背鰭が3基ある。吻が尖り、両眼間隔は狭い。生時の体色は、体前半が灰青色、体後半が淡茶褐色、腹部と尾部下面が灰色を呈す。眼の下に白色線、体側に5暗色斜帯、臀鰭基底から尾柄部に8、9個の小暗色点、尾柄部に白色斜線を有す。

近似種との区別： 上述の色彩から日本産の同属他種と識別可能である。
 分布の概要： 台湾南部と西表島のみ。
 近縁な種及び群との分布状況の比較： 日本国内に生息する同属他種の内、汽水域に生息するのは、本種のみである。
 生態的特徴： 日本産ヘビギンボ科魚類で唯一、河川汽水域に生息する。生活史に関して未解明。
 生息地の条件： 環境が良好な河川の河口域とそれに隣接する岩礁域に生息する。
 現在の生息状況： 西表島の1河川にのみ生息。
 学術的意義・評価： 西表島と台湾のみに分布し、生物地理学的に興味深い。
 生存に対する脅威： 局所分布であり、個体数も多くないため、わずかな環境変化で絶滅する恐れがある。
 特記事項： IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。
 原記載： Wang, S. C., K. T. Shao and S. C. Shen, 1996. *Enneapterygius cheni*, a new triplefin fish (Pisces: Tripterygiidae) from Taiwan. Acta Zoologica Taiwanica, 7(1), 9-83.
 参考文献： 渋川浩一・鈴木寿之・細川正富, 2004. 西表島浦内川で採集された日本初記録のウラウチヘビギンポ(新称). I. O. P. Diving News, 15(3): 2-6.
 鈴木寿之, 2015. ウラウチヘビギンポ. "レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-4 汽水・淡水魚類", 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 94-95.
 鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51(1): 72-74.

執筆者名： 立原一憲

和名： カワギンポ
 分類： スズキ目 イソギンボ科
 学名： *Omobranchus ferox* (Herre, 1927)
 カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態： 体長5cm。体は、やや細長く側扁し、吻がやや尖る。頭部に皮弁や皮質突起がない。眼隔管と下顎管の開口数は、いずれも3個であり、鰓孔が狭い。背鰭、臀鰭ともに鰭膜で尾鰭と繋がらない。生時の体色は橙色で、眼の前縁から吻端と、目の下縁から口唇に白色線を有す。また、眼の後縁直後に1本の短い青白色の横線が、頭部腹面から胸部に多数の白色斑がある。さらに、躯幹部から尾部に多数の白色横帯があり、その後半は網目模様となる。雄の背鰭最後部には1眼状斑がある。

近似種との区別： 眼の後縁直後の青白色の横線で同属他種と識別される。
 分布の概要： 南アフリカ、インドからインドネシア、台湾からオーストラリアにかけてのインド-太平洋の熱帯域。日本では西表島のみから記録されている。
 生態的特徴： 汽水域の牡蠣殻を産卵床としているが、生活史は未解明。
 生息地の条件： 河川汽水域の転石や牡蠣殻に生息することが多いが、倒木やヒルギの支柱根も利用する。
 現在の生息状況： 西表島の3河川にのみしか生息していないにもかかわらず、生息地の環境変化が進んでいる。
 学術的意義・評価： 西表島が分布のほぼ北限に当たり、生物地理学的に重要である。
 生存に対する脅威： 局所分布であり、個体数も少ない。河口付近の架橋の付け替え、リゾート開発に伴う環境変化等の

<魚類>

生息場所の消失。
特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Herre, A., W. C. T., 1927. Four New Fishes from Lake Taal (Bombon). Philippine Journal of Science, 34 (3): 273-280.
参考文献 : 瀬能 宏, 2015. カワギンポ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 98-99.
執筆者名 : 立原一憲

和名 : ヒルギギンポ
分類 : スズキ目 イソギンポ科
学名 : *Omx biporos* Springer, 1972
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体長 4 cm。体は、やや細く側扁し、吻がやや尖り、頭部に皮弁や皮質突起を欠く。眼隔管の開口数は 4、下顎管の開口数は 3。鰓孔は狭く、背鰭と臀鰭は、膜鰭で尾鰭につながらない。雄の尾鰭の上下の鰭条がやや伸長する。生時の雄の体色は、頭部が濃褐色で側面に 3、4 本の白色横線、吻上に 2、3 本の白色縦線を有す。軀幹部から尾部は、灰褐色で正中に円形の 9 小斑が並ぶ。生時の雌の体色は、頭部は雄と同じであるが、軀幹部から尾部には幅広い濃褐色横帯と白色横線が交互に並ぶ。
近似種との区別 : 頭部に皮弁や皮質突起を欠き、背鰭と臀鰭が尾鰭と連続しないこと、背鰭と臀鰭の軟条数が、各々 15~17、17~19 本であることから、日本産の同属他種と識別可能である。
分布の概要 : タイランド湾、パラオ、インドネシア、ニューギニア、ニューカレドニアに分布。日本では西表島と石垣島から記録されている。
生態的特徴 : 汽水性魚類と考えられるが、生活史は未解明。
生息地の条件 : マングローブ湿地の発達する河川汽水域に生息する。ヤエヤマヒルギの気根に棲むことが多いが、死サンゴ塊や倒木も隠れ家として利用する。
現在の生息状況 : 西表島の 6 河川と石垣島の 1 河川に生息している。これらの内、生息環境が維持されている場所は少なく、多くの場所で生息環境の悪化が進行している。
学術的意義・評価 : 八重山諸島が、本種の分布北限に当たり、生物地理学的に重要である。
生存に対する脅威 : 局所分布であり、個体数も少ないにもかかわらず、架橋の付け替え、リゾート開発、道路工事などにより、生息場所の環境が消失・悪化しつつある。
特記事項 : IUCN カテゴリー : Data Deficient (DD)。
原記載 : Springer, V. G., 1972. Synopsis of the tribe Omobranchini with descriptions of three new genera and two new species (Pisces: Blenniidae). Smithsonian Contributions to Zoology, 130: 1-31.
参考文献 : 瀬能 宏, 2015. ヒルギギンポ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 96-97.
執筆者名 : 立原一憲

和名 : クシヒゲヌメリ
分類 : スズキ目 ネズップ科
学名 : *Eleutherochir mccaddeni* Fowler, 1941
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体長 4 cm。第 1 背鰭を有し、第 2 背鰭は 9、10 軟条、臀鰭は 10、11 軟条である。尾鰭中央部の軟条の先端が分枝し、前鰓蓋骨棘の後端が鉤状とならない。口は横に広く、下唇上縁に多数の肉質突起がある。下顎が上顎より突出し、両眼間隔が眼径より狭い。
近似種との区別 : 同所的に生息するオオクチヌメリとは、下顎が上顎より突出すること、両眼間隔が眼径より狭いこと、臀鰭軟条が 10、11 本であることから識別可能。
分布の概要 : フィリピン Leyte 島、沖縄島の中城湾、西表島の浦内川河口に隣接するトゥドゥマリ浜から記録されている。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の生息地は局限される。
生態的特徴 : 砂浜海岸の波打ち際に生息しているが、詳細な生活史情報は皆無である。
生息地の条件 : 陸水の影響を受け、砂岩や泥岩由来の砂が主体となる砂浜に生息する。琉球列島では、造礁サンゴや有孔虫などの生物に由来する砂浜が多く、本種の生息環境は限定される。
現在の生息状況 : 中城湾では与那原町の与那原と中城村の久場に分布していたが、与那原の生息地は、埋め立てにより完全に消失した。久場における現在の状況は不明であるが、中城湾では大規模な埋め立て工事が進行中である。西表島のトゥドゥマリ浜では、リゾートホテルが開業し、環境が変化しつつある。
学術的意義・評価 : 分布が局限され、生物地理学的に重要である。生活史が未解明である。
生存に対する脅威 : 生息場所の埋め立てによる消失。開発による底質の変化。
原記載 : Fowler, H. W., 1941. New fishes of the Family Callionymidae, mostly Philippine, obtained by the United States Bureau of Fisheries Steamer 'Albatross'. Proceedings of the United States National Museum, 90: 1-31.
参考文献 : 吉郷英範・太田 格・吉野哲夫, 2006. 日本初記録のネズップ科魚類クシヒゲヌメリ (新称) *Eleutherochir mccaddeni*. 魚類学雑誌, 53: 189-193.

執筆者名：立原一憲

和名：ツバサハゼ
 分類：スズキ目 ツバサハゼ科
 学名：*Rhyacichthys aspro* (Valenciennes, 1837)
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態：頭部と軀幹部の前半が縦扁し、下面は平らである。口は小さく、頭部の下面に位置する。第2背鰭と臀鰭の基底は短く、尾柄は長い。胸鰭は側方に大きく張り出し、基底が傾斜し、下側が前方に位置する。左右の腹鰭は広く離れ、下面が肉質に肥厚する。尾鰭後縁は湾入する。側線を有する。体色は、黄褐色または淡灰色の地に、細かい暗色斑が密在す。大型個体は体長 20 cm を超える。

近似種との区別：沖縄県内および国内に近似種は分布しない。

分布の概要：沖縄県内では、沖縄島、石垣島、西表島に分布する。他に、国内では屋久島と奄美大島、国外では台湾、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニア、パラオ、ソロモン諸島から知られる。ただし、これらの記録には、同属の *Rhyacichthys guilberti* と正確に区別されていないものが含まれている可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ツバサハゼ科には 2 属 3 種が含まれる。*R. guilberti* はニューカレドニア北部およびバヌアツからインドネシアにかけて分布し、*Protogobius attiti* はニューカレドニア南部のみに生息する。

生態的特徴：両側回遊性と考えられる。同属の *R. guilberti* では、海で約 1 ヶ月の浮遊期を過ごすと考えられ、本種も同様と推測される。体長 2 cm 未満で河川に加入し、淡水域の早瀬や流れのある淵頭などに生息する。流れの速い場所で、底質の岩盤または大きな岩に貼り付くようにして静止していることが多い。大きな滝の上流には分布しない。食性の詳細は不明であるが、藻類食とされ、また胃内容物には水生昆虫も観察されるといふ。

生息地の条件：本種の生息には、自然な地形の残された溪流環境が不可欠である。腹鰭が吸盤状ではないため、大きな堰や滝の上流には遡上できない。冬季の水温が低い場所では、越冬が難しいようである。

現在の生息状況：当歳と考えられる小型個体が一時的に見られる川は少なくないが、大型個体が恒常的に生息する川はわずかである。沖縄島では、複数の小型個体が見つかるが越冬せずに姿を消すことが多い。大型個体が数年にわたり継続して観察される例はあるが、そのような個体数は少ない。石垣島においても稀である。西表島では複数河川に恒常的に生息し、再生産している可能性もあるが、本種の生息環境は悪化しつつある。

学術的意義・評価：ツバサハゼ科はハゼ類の系統の中で最も根元で分岐した分類群と考えられており、ハゼ類の系統、進化を研究する上で欠かせない。急流生活に適応した種の一つとして、その生態や形態も非常に興味深い。琉球列島は分布の北限にあたり、その出現は浮遊仔魚の分散や加入、定着を考える上で重要な示唆をもたらすと考えられる。

生存に対する脅威：河川の浚渫により生息地が破壊される例がある。特に流れの速い場所を好む本種の生息には淵と瀬のメリハリのある河川地形が必須であり、平坦に均された川には生息が不可能である。河川の直線化も、生息可能な環境を消失させる要因となる。回遊を妨げる堰などの河川構造物や取水による河川水の減少および河口閉塞も本種の生息を妨げていると考えられる。西表島においては、生息地を訪れる観光客の増加も脅威の一つとなっている。

特記事項：IUCN カテゴリ：Data Deficient (DD)。

原記載：Cuvier, G. and A. Valenciennes, 1837. Histoire naturelle des poissons, 12. Levrault, Paris.

参考文献：Miller, P. J., 1973. The osteology and adaptive features of *Rhyacichthys aspro* (Teleostei: Gobioidae) and the classification of gobioid fishes. *Journal of Zoology*, 171: 397-434.

鈴木寿之, 1998. ツバサハゼ. “日本の希少な野生生物に関するデータブック”, 水産庁 (編), 日本水産資源保護協会, 東京, 184-185.

鈴木寿之, 2015. ツバサハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 100-101.

Tabouret, H., M. Tomadin, L. Taillebois, M. Iida, C. Lord, C. Péchevran and P. Keith, 2014. Amphidromy and marine larval phase of ancestral gobioids *Rhyacichthys guilberti* and *Protogobius attiti* (Teleostei: Rhyacichthyidae). *Marine and Freshwater Research*, 65: 776-783.

執筆者名：前田 健

和名：トカゲハゼ
 分類：スズキ目 ハゼ科
 学名：*Scartelaos histophorus* (Valenciennes, 1837)
 方言名：トントンミー (総称)
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態：体は細長い。背鰭は 2 基。第 1 背鰭は細く伸長する。尾鰭は槍状で長い。腹鰭は吸盤状である。吻は突出し、上唇前縁を被う。下顎に 1 列のひげがある。眼は上方に突出し、眼下に眼を収容するくぼみと下眼瞼がある。体色は背側が暗緑褐色、腹側が淡青色で、尾部体側に数本の暗色横帯がある。最大体長は 12 cm である。

近似種との区別：沖縄県内では、トビハゼ属の 2 種が、本種と同様に干潮時に泥質干潟の表面で活動するが、本種は

<魚類>

体形が非常に細長いこと、第1背鰭が伸長すること、泥面上を滑るように這って移動し、飛び跳ねることはまれであること等により区別される。

分布の概要： 国内における分布は沖縄島に限定され、中城湾沿岸および大浦湾沿岸にのみ生息する。戦前には那覇周辺にも生息していたようであるが、現在では見られない。2006年に漫湖で数個体が観察されたが、それ以降見つからない。国外では台湾、中国、マレーシア、インドネシア、インド、オーストラリア北部等に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 同属の *Scartelaos gigas* が、台湾、中国、朝鮮半島に分布する。

生態的特徴： 半陸生性であり、内湾の泥質干潟に生息孔を掘って生活する。日中の干潮時には干潟上の干出域を這い回って摂餌等の活動を行い、冠水時には生息孔中に潜る。産卵期は4~7月頃、生息孔内に産卵室を作り、卵はその天井に産み付けられる。産卵は雌雄1つがいで行われ、その際、雄によるジャンプ等の一連の求愛行動が観察される。また、主に雄が産着卵を孵化するまで保護するが、この期間には、空気を口に含んでから巣穴に戻るエアレーション行動が観察される。孵化仔魚は下げ潮により沖合いに輸送拡散され、約1ヵ月の浮遊生活を送る。浮遊末期の仔魚は夜間の上げ潮に乗って干潟に加入し、変態・着底する。稚魚および成魚は干潟表面に生息する珪藻等の微小生物を食する。

生息地の条件： トカゲハゼの生息地は内湾の泥質干潟である。底質は島尻層の堆積物に由来し、粘土とシルトの中間的な特性を示す軟泥質で、その堆積厚は最低20cmである。生息地の地盤高は小潮時の潮汐変動範囲である。本種は干出時に乾燥せずに海水が残存している溜まりや滞筋沿いに生息孔を掘り、その周辺で活動する。また中城湾では、浮遊仔魚は湾中央部から南部にかけての水深20~30mの海域に生息する。したがって本種が生息していく上で、泥質干潟の底質、間隙水及び海水を含めた、干潟生態系の保全が不可欠となる。

現在の生息状況： トカゲハゼの生息数を確認するため、沖縄県により、日中の干潮時に干潟表面で活動している本種の個体数が年4回程度カウントされている。中城湾内では、調査が開始された1989年以降、最少で約700個体、最大で約3,000個体が確認され、2014年3月時点における確認個体数は約900であった。中城湾におけるトカゲハゼの主な生息地は南城市佐敷とうるま市具志川の沿岸である。佐敷では、2009年3月に約2,000個体が確認されたが、それ以降減少傾向にあり、2014年3月時点では約600個体であった。当地域は中城湾内で最大の生息地であり、沖縄島における本種個体群の維持に重要な役割を担っていると考えられる。うるま市具志川沿岸では、かつて干潟の奥部に位置した生息地が埋め立て事業にともない水路部の奥に取り残された。1990年以降個体数が激減し、1995年には約20個体となったが、人工干潟の造成と人工増殖による種苗放流を行った結果漸増し、2000年には1,000個体を超えるまでに回復した。しかし2007年以降、個体数が大幅に減少し、2014年3月には約130個体となった。また、大浦湾沿岸では、2002年5月に成魚23個体の生息が確認されている。

学術的意義・評価： トカゲハゼはインド・西太平洋に広く分布する一方、琉球列島においては沖縄島のみが生息するという独特の分布パターンを示し、生物地理学的に重要である。また、泥質干潟の生物群集の重要な一員であり、半陸上生活をする点でも興味深い。

生存に対する脅威： 沖縄島では大規模な埋め立て事業により干潟の面積が大幅に減少してきた。これにより、トカゲハゼをはじめとする干潟の生物の生息環境が狭められ、個体数も大幅に減少したと考えられる。現在も本種の国内唯一の生息地である中城湾と大浦湾で大規模な埋め立てが進行中または計画中である。1995年、沖縄県により「中城湾全体におけるトカゲハゼ保全計画」が策定された。それ以降、人工干潟の造成と人工増殖による種苗放流などの対策が取られ、個体数が一時的に回復に至った生息地もあった。しかし、近年では生息環境の変化を引き起こす新たな脅威の拡大により個体群は縮小傾向にある。佐敷では、砂嘴の内側に泥質干潟が形成され、県内最大の生息地となっていたが、近年この砂嘴の形状が変化し、陸側に移動しつつある。泥質干潟は年々縮小し、2010年までは5ha以上あることが多かったが、現在では1ha程度となっており、トカゲハゼ個体群の維持が危ぶまれる。うるま市具志川では、埋め立て地の護岸に植栽されたヒルギダマシの分布が急激に拡大してトカゲハゼの生息地を覆うようになり、本種個体数の減少をもたらしている。

原記載： Cuvier, G and A. Valenciennes, 1837. *Histoire naturelle des poissons*, 12. Levrault, Paris.

参考文献： 細谷誠一, 1998. トカゲハゼ. “日本の希少な野生水生生物に関するデータブック”, 水産庁(編), 日本水産資源保護協会, 東京, 96-97.

細谷誠一, 2014. トカゲハゼ: 沖縄島中城湾における泥質干潟生態系の保全. 魚類学雑誌, 61: 109-114.

昆 健志・桜井 雄・武井直行, 2003. 沖縄県名護市楚久地先で確認されたハゼ亜目魚類トカゲハゼ *Scartelaos histophorus*. 沖縄生物学会誌, 41: 25-32.

立原一憲, 2005. 琉球列島にすむ希少魚. “希少淡水魚の現在と未来: 積極的保全のシナリオ”. 片野修・森 誠一(編), 信山社, 東京, 297-311.

執筆者名： 前田 健・津波古優子* *前回改訂版(2005)における津波古による記載内容を一部引用した。

和名： チワラスボ属の1種1

分類： スズキ目 ハゼ科

学名： *Taenioides* sp. 1

カテゴリー： 絶滅危惧IA類(CR) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態： 体は非常に細長く、円筒形。眼は小さい。頭部には皮褶があり、下顎の下面に3対(計6本)の鬚状突起を持つ。下顎から後ろに伸びる皮褶の後端は、眼下後方の縦列皮褶の近くに達する。背鰭は1基で基底が長く、6棘42~44軟条。臀鰭も基底が長く、41~44軟条。胸鰭は糸状の遊離軟条を持

たず、16～19軟条。脊椎骨数は29または30。鱗を欠く。腹面は赤く、背面は赤黒い。背鰭の基部と尾鰭の中央は黒褐色。最大体長は約14 cmである。

近似種との区別： チワラスボ属の1種2とチワラスボ属の1種3とは、体がやや太短いこと、下顎の下面に6本の鬚状突起を持つこと（チワラスボ属の1種2と3では、7本）、背鰭と臀鰭の軟条数がそれぞれ42～44、41～44であること（チワラスボ属の1種2ではそれぞれ64～68、63～65、チワラスボ属の1種3ではそれぞれ44～50、44～51）、体の赤みが強いこと（チワラスボ属の1種3は赤みが薄く、金色がかかる）などにより区別される。

分布の概要： 沖縄県内では沖縄島の大浦川のみから知られる。国内では、今のところ他の場所からは知られていない。分類が整理されておらず、国外における分布は不明。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 同種もしくは近縁と考えられる *Taenioides anguillar* はタイ産地が中国で、インド・西太平洋に分布するとされる。国内には少なくとも4種のチワラスボ属が生息する。本種ともう1種（チワラスボ属の1種2）は沖縄島のみから知られ、別の1種（チワラスボ）は佐賀県と和歌山県から知られる。残る1種（チワラスボ属の1種3）は琉球列島から日本本土に広く分布する。

生態的特徴： 汽水域の泥底から採集される。穴の中に潜む。チワラスボ属の1種3と同所的に見られるが、個体数はより少ない。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件： 唯一知られる生息地は、自然な川岸が残り、比較的広い河川汽水域の干潟である。内湾の泥底にも生息する可能性があるが、調査が進んでいないため不明である。

現在の生息状況： 最近まで国内のチワラスボ属は1種と考えられ、正確に区別されて来なかった。そのため情報が不十分ではあるが、本種はこれまでの調査において1河川からしか知られていないため、チワラスボ属の1種3と比べて生息環境が限定されていると考えられる。また個体数も非常に少ない。

学術的意義・評価： チワラスボ属の分類は未解決の問題を多く含むが、泥干潟の生物多様性を示す意味で重要である。また眼が小さく、鱗を欠き、体が細長いなど特殊な形態を持っており、泥中での生活への適応と考えられる。本種の生態はほとんど不明であるが、泥の中でどのように生活し、繁殖しているのか非常に興味深い。

生存に対する脅威： 大浦川の干潟には最近木道が建設された。また名護市の天然記念物に指定されているマングローブの一部の伐採を伴う水害対策が計画され、木道建設と合わせて今後の干潟環境の変化が懸念される。大浦川が注ぐ大浦湾では、米軍基地の建設が進められている。本種の仔魚は湾内で成長すると推測されるため、浮遊期の生息環境が失われる可能性があるほか、湾内の環境が今後全体的に変化する可能性がある。このように本種の生息地は、これまで比較的良好的な環境を保ってきた場所であったが、さまざまな開発が計画、進行中であり、本種個体群への影響が危惧される。

特記事項： 本種は、Kurita and Yoshino (2012) の中で、*Taenioides* sp. A とされている。*Taenioides anguillar* (Linnaeus, 1758) の可能性があり、分類の研究が進められている。

原記載： 学名未確定

参考文献： Kurita, T. and T. Yoshino, 2012. Cryptic diversity of the eel goby, genus *Taenioides* (Gobiidae: Amblyopinae), in Japan. *Zoological Science*, 29: 538–545.

執筆者名： 前田 健

和名： チワラスボ属の1種2

分類： スズキ目 ハゼ科

学名： *Taenioides* sp. 2

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態： 体は著しく細長く、円筒形。眼は小さい。頭部には皮褶があり、下顎の下面に3対および中央に1本（計7本）の鬚状突起を持つ。下顎から後ろに伸びる皮褶の後端は、眼下後方の縦列皮褶の近くに達しない。背鰭は1基で基底が長く、6棘64～68軟条。臀鰭も基底が長く、63～65軟条。胸鰭は糸状の遊離軟条を持たず、16～20軟条。脊椎骨数は44。鱗を欠く。体は赤い。唯一採集されている成魚の体長は13 cmである。

近似種との区別： 本種は背鰭と臀鰭の軟条数が非常に多いことにより、チワラスボ属の1種1とチワラスボ属の1種3と容易に識別される。

分布の概要： 沖縄島の大浦湾から1個体の成魚が採集され、また中城湾の佐敷沖からシラスパッチ網で複数の浮遊期末期の仔魚（体長約13 mm）が採集されている。国内では、今のところ他の場所からは知られていない。分類が整理されておらず、国外における分布は不明。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 同種もしくは近縁と考えられる *Taenioides kentalleni* はサウジアラビアのペルシヤ湾で採集された1個体の標本しか知られていない。国内には少なくとも4種のチワラスボ属が生息する。本種ともう1種は沖縄島のみから知られ、別の1種（チワラスボ）は佐賀県と和歌山県から知られる。残る1種は琉球列島から日本本土に広く分布する。

生態的特徴： 大浦湾の海底から1個体の成魚の死体が取得された。詳しい生態は不明であるが、内湾海底の泥の中に住む可能性が高い。仔魚は内湾で浮遊期を過ごし、13 mm前後で着底すると考えられる。

生息地の条件： 本種の生息地である大浦湾と中城湾は沖縄島東海岸にある湾であるが、性質が異なる。大浦湾は比較的小規模であるが、水深50 mを超える深い場所もあり、海底の様子は変化に富む。大浦川、汀間川など汽水域の発達した河川が流入する。中城湾は比較的規模が大きい、大きな流入河川はない。沿岸にはかつては広大な干潟が存在したが、埋め立てが進み、その面積は大幅に縮小している。沿岸部は都市化が進み、自然の海岸は少なくなっている。

<魚類>

- 現在の生息状況 : 本種はこれまでに2カ所からわずかな個体数が見つかったのみである。成魚は1個体しか見つかっておらず、生息状況の詳細は不明であるが、仔魚の出現状況からも他種と比べて個体数は多くないと推測される。
- 学術的意義・評価 : 本種と同種もしくは近縁と考えられる *Taeniooides kentalleni* は遠く離れたペルシャ湾で1個体が採集されたのみであり、本種の沖縄島における個体群は非常に貴重である。眼が小さく、鱗を欠き、体が細長いなど特殊な形態を持っており、泥中での生活への適応と考えられる。本種の生態はほとんど不明であるが、泥の中でどのように生活し、繁殖しているのか非常に興味深い。
- 生存に対する脅威 : 本種の生息地である大浦湾では、米軍基地の建設が進められており、埋め立てが計画されている。本種の生息環境が失われる可能性があるほか、湾内の環境が今後全体的に変化する可能性があり、本種個体群への大きな影響が懸念される。中城湾では埋め立てにより干潟の面積が大幅に縮小し、自然海岸も減少している。湾内の環境も大きく改変されており、個体群の存続が危ぶまれる。生息環境条件の解明が本種の保全のために重要といえる。
- 特記事項 : 本種は、Kurita and Yoshino (2012) の中で、*Taeniooides* sp. D とされている。*Taeniooides kentalleni* Murdy and Randall, 2002 の可能性があり、分類の研究が進められている。
- 原記載 : 学名未確定
- 参考文献 : Kurita, T. and T. Yoshino, 2012. Cryptic diversity of the eel goby, genus *Taeniooides* (Gobiidae: Amblyopinae), in Japan. *Zoological Science*, 29: 538–545.
Murdy, E. O. and J. E. Randall, 2002. *Taeniooides kentalleni*, a new species of eel goby from Saudi Arabia (Gobiidae: Amblyopinae). *Zootaxa*, 93: 1–6.
- 執筆者名 : 前田 健

和名 : ハヤセボウズハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Stiphodon imperiorientis* Watson and Chen, 1998
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 吻は丸く、口は下付き。雄の第1背鰭は伸長し、先端が尖るが、雌では伸長せず丸い形である。雄は普通淡褐色でやや緑色みを帯び、背面が暗色、体側に12本の暗色横帯を持つ。第1背鰭と第2背鰭は赤褐色。尾鰭中央部には暗色斑と白色斑が横帯を形成する。胸鰭鰭条に沿って4~14個の小さな黒色斑が並び、その間に小さな白色斑を有する。婚姻色の雄では、体が黒くなり、頭部側面、胸鰭基部の上部、体側の上部が空色または白色に輝き、尾柄はやや白っぽくなることが多い。また、背鰭、臀鰭、尾鰭、腹鰭が黒くなる。雌は淡い黄褐色で体側に2本の黒色縦帯を持つ。第1背鰭、第2背鰭、尾鰭、胸鰭の鰭条に沿って、小さな黒色斑と白色斑が交互に並ぶ。体長は最大で5.2 cm。

近似種との区別 : 雌は同属他種と似るが、第1背鰭、第2背鰭、尾鰭、胸鰭の鰭条に沿って、小さな黒色斑と白色斑が交互に並ぶこと(コンテリボウズハゼは胸鰭に斑紋をほとんど持たない; ナンヨウボウズハゼとヒスイボウズハゼは黒色斑を持つ個体もあるが、通常明瞭な白色斑を欠く)、臀鰭の縁近くに黒色線を持たないこと(コンテリボウズハゼは黒色線を有する)、第2背鰭鰭条数が普通9、胸鰭鰭条数が15または16であること(ナンヨウボウズハゼではそれぞれ普通10、14、カキイロヒメボウズハゼでは9、14)、歯の数(同サイズの個体を比べた場合、ハヤセボウズハゼは、コンテリボウズハゼ、ナンヨウボウズハゼ、ニライカナイボウズハゼ、トラフボウズハゼより歯の数が少ない)、鱗の配置と大きさ(カキイロヒメボウズハゼは躯幹部前半に鱗を欠く; トラフボウズハゼは頭部背面の鱗が細かい)などにより区別される。フィリピンに分布する *Stiphodon pulchellus* は、雌雄ともハヤセボウズハゼに似る。ハヤセボウズハゼの雄は、胸鰭の黒色斑がより細かく、先端部に黒色斑を欠くことにより区別されるが、雌は形態による確実な識別が现阶段では困難である。沖縄県内でも見つかる可能性があるため、注意が必要である。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島に分布する。国内では他に奄美大島において記録がある。かつては琉球列島固有種とされていたが、近年広東省(中国)と台湾からも報告された。東南アジアにも分布する可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県内では、ナンヨウボウズハゼが普通種として分布し、本種を含むその他のナンヨウボウズハゼ属の種はいずれも個体数が少ない。東南アジアにおける分布状況が不明であるが、本種の分布域は比較的狭いと推測される。

生態的特徴 : 両側回遊性と考えられる。河川加入後は中流域に分布し、比較的大きな淵に生息することが多い。大きな滝や堰の上流には見られない。岩の表面を削るように摂餌する様子が観察されることから、附着藻類食と推測される。

生息地の条件 : 本種の生息には、瀬と淵の明瞭な自然な地形の残された溪流環境が不可欠である。冬季の水温が低い場所では越冬が難しいようである。

現在の生息状況 : 沖縄島では4河川から見つかっているが、いずれの場所でもその出現は散発的で、同時に見つかる個体数は1または2個体。複数年に亘って生息することは少ないと考えられる。ヒスイボウズハゼやコンテリボウズハゼと同所的に見つかることが多い。石垣島においても稀なようである。西表島では数河川で確認されている。生息状況の継続的な調査は行われていないが、規模の大きい2河川では、まとまった個体数が観察されており、恒常的に生息していると推測される。他の既知の分布地である奄美大島、台湾、広東省においては極めて稀に見つかるのみである。

学術的意義・評価 : ボウズハゼ類は、熱帯島嶼河川の淡水域に限られた環境でニッチを分けて、多くの属、種に分化しており、生態学的に興味深い。本種は、分布域が比較的狭く、特に西表島は確実な生息場所として重要である。いずれの場所においても個体数が少ないが、その散発的な出現は仔魚の海洋分散を示

唆しており、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。西表島の仲間川が本種のタイプ産地である。
生存に対する脅威 : 本種はその和名に反して淵を中心に生息し、河川の浚渫や敷石、直線化により淵が消滅すると生息環境が失われる。汽水域や下流域における大規模な改修工事は加入を妨げる可能性がある。西表島の河川では、取水による水量の低下が本種の生息環境の悪化を引き起こすことが心配される。
特記事項 : IUCN カテゴリー : Vulnerable (VU)。
原記載 : Watson, R. E. and I-S. Chen, 1998. Freshwater gobies of the genus *Stiphodon* from Japan and Taiwan (Teleostei: Gobiidae: Sicydiini). *Aqua, Journal of Ichthyology and Aquatic Biology*, 3: 55–68.
参考文献 : Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. *Société Française d'Ichtyologie*, Paris.
 Maeda, K., T. Yoshino and K. Tachihara, 2011. A redescription of *Stiphodon pulchellus* (Herre, 1927) (Gobiidae: Sicydiinae). *Cybium*, 35: 319–328.
 Nip, T. H. M., 2010. First records of several sicydiine gobies (Gobiidae: Sicydiinae) from mainland China. *Journal of Threatened Taxa*, 2: 1237–1244.

参考文献 : 前田 健

和名 : コンテリボウズハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Stiphodon atropurpureus* (Herre, 1927)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 吻は丸く、口は下付き。雄の第1背鰭はやや伸長するが先端は丸い。雄の体色は背側が灰褐色、腹面は白っぽく、吻から尾柄にかけて淡い青緑色の縦帯を持つ。第1背鰭、第2背鰭、尾鰭の各鰭条に沿って暗色斑と白色斑が交互に並ぶ。胸鰭には目立つ模様はない。婚姻色の雄は体が黒っぽくなり、頭部から尾部の体側が金属光沢のある鮮やかな青色になる。背鰭、臀鰭、尾鰭、腹鰭は黒くなり、第1背鰭、第2背鰭の縁が赤くなる。雌は淡い黄褐色で体側に2本の黒色縦帯を持つが、これらの縦帯が赤みを呈する個体もある。第1背鰭の後半部、第2背鰭、尾鰭の鰭条に沿って、1~6個の黒色斑が並ぶ。臀鰭の縁は白く縁取られ、その内側に黒色の線を持つ。最大体長は4.7 cm。

近似種との区別 : 雌は同属他種と似るが、臀鰭の縁近くに黒色線を持つこと（トラフボウズハゼを除く他種は持たない）、第1背鰭の後半部、第2背鰭、尾鰭の鰭条に沿って並ぶ明瞭な黒色斑を有すること（ナンヨウボウズハゼとヒスイボウズハゼでは黒色斑を持つ個体もあるが、通常やや不明瞭）、胸鰭に目立つ模様を欠くこと（ハヤセボウズハゼ、ニライカナイボウズハゼ、トラフボウズハゼは多数の黒色斑を持つ）、第2背鰭鰭条数が普通9、胸鰭鰭条数が普通15であること（ナンヨウボウズハゼではそれぞれ普通10、14、カキイロヒメボウズハゼでは9、14）、歯の数（同サイズの個体を比べた場合、コンテリボウズハゼは、ハヤセボウズハゼとヒスイボウズハゼより歯の数が多く、ナンヨウボウズハゼよりやや少ない）、鱗の配置と大きさ（カキイロヒメボウズハゼは躯幹部前半に鱗を欠く；トラフボウズハゼは頭部背面の鱗が細かい）などにより区別される。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島に分布する。国内では他に種子島、屋久島、奄美大島から記録があり、さらに和歌山県でも1個体の記録がある。国外では台湾、香港、広東省（中国）、フィリピン、ティオマン島（マレーシア）、インドネシアに分布する。フィリピンでは普通種である。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県内では、ナンヨウボウズハゼが普通種として分布し、本種を含むその他のナンヨウボウズハゼ属の種はいずれも個体数が少ない。コンテリボウズハゼに近縁の *Stiphodon semoni* はインドネシア、パプアニューギニア、ソロモン諸島、バヌアツ、ニューカレドニア、クイーンズランド（オーストラリア）に分布し、インドネシアではコンテリボウズハゼの分布と重複する。

生態的特徴 : 両側回遊性と考えられる。河川加入後は中流域に分布し、平瀬や比較的小さな淵に生息することが多い。大きな滝や堰の上流には見られない。岩の表面を削るように摂餌する様子が観察されることから、付着藻類食と推測される。

生息地の条件 : 本種の生息には自然な地形の残された溪流環境が不可欠である。冬季の水温が低い場所では越冬が難しいようである。

現在の生息状況 : 沖縄島北部では多くの川で見つがっているが、個体数は少なく、同時に見られる個体数は1~2個体であることが多い。1河川に10個体以上が生息することもあるが、生息状況は不安定で、個体数の変動が大きい。石垣島、西表島においても個体数は多くない。

学術的意義・評価 : ボウズハゼ類は、熱帯島嶼河川の淡水域に限られた環境でニッチを分けて、多くの属、種に分化しており、生態学的に興味深い。本種の分布域は広く、分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威 : 河川の浚渫により生息地が消失した例がある。汽水域や下流域における大規模な改修工事は加入を妨げる可能性がある。河川改修、農地開発、森林伐採、道路や建物の建設等により河川に土砂が流入すると、生息条件が悪化する。

原記載 : Herre, A. W. C. T., 1927. Gobies of the Philippines and the China Sea. *The Philippine Bureau of Science Monographic Publications on Fishes*, 23: 1–352 + Pls.1–30.

参考文献 : Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. *Société Française d'Ichtyologie*, Paris.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ヒスイボウズハゼ
 分類類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Stiphodon alcedo* Maeda, Mukai and Tachihara, 2012
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 吻は丸く、口は下付き。雄の第1背鰭は伸長し、先端が尖るが、雌では伸長せず丸い形である。雄の体色は普通淡褐色で、体側中央の下側に網目状の黒色縦帯を持つ。頭部側面には淡い青色光沢がある。胸鰭鰭条は普通黒点を欠き、黒点を持つ場合でもやや不明瞭。婚姻色の雄の体と鰭は黒っぽく、頭部側面と胸鰭基部の上部は金属光沢のある青緑色となる。躯幹部と尾部の体側には12本の金属光沢のある青緑色の横帯を持つことが多い。婚姻色にはバリエーションがあり、黒みが強い個体のほか、躯幹部から尾部の体側、背鰭、臀鰭、尾鰭がオレンジ色になる個体もある。後者は3cmほどの小型個体に多い。雌は淡い黄褐色で体側に2本の黒色縦帯を持つ。下側の黒色横帯は体側中央よりやや腹側よりに位置し、8~11個の黒色斑を連ねた形となることがある。上側の黒色横帯は細く、しばしば不明瞭となる。最大体長は5.2 cm。

近似種との区別 : 雌は同属他種と似るが、体側の黒色縦帯の形状、胸鰭に目立つ模様を欠くこと(ハヤセボウズハゼ、ニライカナイボウズハゼ、トラフボウズハゼは多数の黒色斑を持つ)、第2背鰭鰭条数が普通9、胸鰭鰭条数が普通16であること(ナンヨウボウズハゼではそれぞれ普通10、14、カキイロヒメボウズハゼでは9、14)、歯の数(同サイズの個体を比べた場合、ヒスイボウズハゼは、コンテリボウズハゼ、ナンヨウボウズハゼ、ニライカナイボウズハゼ、トラフボウズハゼより歯の数が少ない)、鱗の配置と大きさ(カキイロヒメボウズハゼは躯幹部前半に鱗を欠く；トラフボウズハゼは頭部背面の鱗が細かい)などにより区別される。

分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島と西表島のみから報告されている。他に、最近台湾からも見つかった。東南アジアにも分布する可能性が高いが報告はない。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県内では、ナンヨウボウズハゼが普通種として分布し、本種を含むその他のナンヨウボウズハゼ属の種はいずれも個体数が少ない。

生態的特徴 : 両側回遊性と考えられる。河川加入後は中流域の淵で、ナンヨウボウズハゼやコンテリボウズハゼとともに見られることが多い。ハヤセボウズハゼと行動を共にすることもある。大きな滝や堰の上流には見られない。付着藻類食と考えられる。沖縄島における産卵期は10~12月。越冬個体であっても、春から夏には繁殖行動は見られない。卵は石の下に単層に産み付けられ、雄により保護される。卵は小さく電球型で、短径0.45~0.46 mm、長径0.55~0.58 mm。孵化仔魚は小さく体の各部は未発達。脊索長1.2~1.3 mmで、大きな卵黄を持つ。飼育環境下では、孵化2日後に胸鰭原基が形成され、4日後に1.7~2.0 mmとなり、眼が黒化し、口が開いた。体長3 cm弱で成熟する。

生息地の条件 : 本種の生息には自然な地形の残された溪流環境が不可欠である。冬季の水温が低い場所では越冬が難しいようである。

現在の生息状況 : 沖縄島北部では、2006年以降、7河川で確認されている。100個体以上が一度に見つかることもあるが、そのような密度の生息は長続きせず、冬を越せずに姿を消した。8年間に亘って継続して観察された川もあり、そこでは年によっては数10個体が観察されたが、現在は確認できていない。他の川でも多くの場合、一時的な出現に留まる。西表島においては3河川で確認されており、生息状況の継続的な調査はされていないが、沖縄島より越冬の可能性は高いと推測される。しかし、個体数は多くないようである。

学術的意義・評価 : ボウズハゼ類は、熱帯島嶼河川の淡水域に限られた環境でニッチを分けて、多くの属、種に分化しており、生態学的に興味深い。本種は沖縄島と西表島の他には台湾での稀な確認例があるのみである。国外に未知の生息地があると推測され、研究が進めば仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。沖縄島の河川が本種のタイプ産地である。

生存に対する脅威 : 沖縄島の多くの河川で浚渫、護岸工事、ダム建設が行われ、本種の生息可能な環境は減少している。また、汽水域や下流域における大規模な改修工事は加入を妨げる可能性がある。河川改修、農地開発、森林伐採、道路や建物の建設等により河川に土砂が流入すると、生息条件が悪化する。

原記載 : Maeda, K., T. Mukai and K. Tachihara, 2012. A new species of amphidromous goby, *Stiphodon alcedo*, from the Ryukyu Archipelago (Gobiidae: Sicydiinae). *Cybium*, 35: 285–298.

参考文献 : Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. *Société Française d'Ichtyologie*, Paris.
 Maeda, K., T. Mukai and K. Tachihara, 2012. A new species of amphidromous goby, *Stiphodon alcedo*, from the Ryukyu Archipelago (Gobiidae: Sicydiinae). *Cybium*, 35: 285–298.

執筆者名 : 前田 健

和名 : シマサルハゼ
 分類類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Oxyurichthys* sp.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体は細長く、側扁する。第1背鰭は台形。雄の第1背鰭は雌より高く、棘が糸状に伸長する個体がある。眼上に細長い皮弁はない。第1背鰭前方側面に鱗がない。体色は灰褐色で、体側正中線上に沿って5つの暗色縦斑が並ぶ。さらに尾部には3本の幅広い暗色横帯を持ち、それぞれが体側正中

- 線上の縦斑を横切る。最大体長は7 cm。
- 近似種との区別：** 同属のミナミサルハゼと似るが、尾部の暗色横帯が太く、その幅が暗色縦斑の長さとはほぼ一致すること（ミナミサルハゼでは5～6本の細い暗色横帯を持つ）、鰓条部に黒色斑を持たないこと（ミナミサルハゼは黒色斑を有する）などで識別される。
- 分布の概要：** 沖縄県内では西表島のみから報告されている。国外ではインドネシアのアンボン島から知られる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較：** 沖縄県内の河川汽水域に生息する同属他種にはミナミサルハゼ、カマヒレマツゲハゼ、マツゲハゼの3種が知られる。それらは沖縄島から西表島にいたる（ミナミサルハゼは与那国島を含む）多くの島に分布し、生息河川、個体数も少なくない。それらに対しシマサルハゼの分布は局限される。
- 生態的特徴：** 河口域の泥底や軟泥底に生息する。カマヒレマツゲハゼやマツゲハゼと同所的に見られる。生活史の詳細は不明であるが、仔魚期を海で過ごすと考えられる。
- 生息地の条件：** 上流を含め良好な環境の保たれた河川の河口域に生息する。開けた水域の水深2 m以浅の泥底や軟泥底に穴を掘って住む。
- 現在の生息状況：** 西表島の2河川で確認されている。他の川からも見つかる可能性があるが、生息条件を満たす川は減少している。
- 学術的意義・評価：** 本種は、2000年にその存在が報告されたが、分類学的研究が進んでいない。未記載種の可能性がある。本種を含むサルハゼ属は汽水域や内湾の泥底の生物多様性を構成する重要なメンバーである。
- 生存に対する脅威：** 分布が局所的であり、また河口域の環境は変化しやすいことから、個体群の存続が危ぶまれる。西表島の1河川では、河口周辺の海浜での防波堤建設などにもない底質が軟泥から砂泥に変化し、生息環境が著しく悪化した。他の1河川では、上流域や河口で水質悪化が原因と考えられる羅病魚や多数の寄生虫に寄生された個体が多く見られる。河口の泥干潟では近隣集落からの下水により、一部で底質がヘドロ化、もしくは底質内部に還元層が発達し、そこに生息していた魚類の種数が激減している。また、近年、河口近くの施設の増加にもない、周辺海浜の地下水から大量の窒素分が検出され、富栄養化が進行している。
- 原記載：** 本種に適用される学名は不明であり、未記載種の可能性がある。
- 参考文献：** 中坊徹二, 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
鈴木寿之, 2015. シマサルハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 122-123.
鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾, 2004. 決定版日本のハゼ. 平凡社, 東京.
鈴木寿之・瀬能 宏・坂本勝一・岩田明久・藍澤正宏, 2000. 西表島から得られたサルハゼ属4種について. I. O. P. Diving News, 11 (7), 2-7.

執筆者名： 前田 健

和名： アオバラヨシノボリ
分類： スズキ目 ハゼ科
学名： *Rhinogobius* sp. BB
方言名： イーブー (総称)
カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態： 体は円筒形で、尾部はやや側扁する。胸鰭軟条数は16～19。体の地色は黄土色で、雄はやや灰色みを帯びる。体側の各鱗の基部近くに橙色斑を持つ。眼の前端から吻端に向けて、および眼の下端から前上顎骨後端に向けて、それぞれ赤褐色線が走る。通常頬に目立つ模様はないが、薄い橙色斑を持つ場合もある。第1背鰭、第2背鰭、臀鰭、尾鰭は橙色。雌は第2背鰭の鰭条に沿って数個の暗色斑を持つ。尾鰭には目立つ斑紋を欠くか、または尾鰭鰭条に沿って数個の暗色斑を持つが、その場合も斑紋は基部側の半分に限られる。浮遊期の仔魚は黄色い。最大体長は、雄が約5 cm、雌が約4 cm。

近似種との区別： アヤヨシノボリに似るが、アヤヨシノボリは頬に水色の斑紋が散りばめられること、体側中央に沿って7～8個の不明瞭な暗色斑を持つこと、尾鰭鰭条の基部から先端部分まで赤褐色斑を持ち、多数の横帯を形成することなどにより、アオバラヨシノボリと区別される。クロヨシノボリは頬に赤褐色の斑紋が散りばめられること、体側中央に明瞭な破線状の黒色縦線を持つことが多いこと、尾鰭鰭条の基部から先端部分まで赤褐色斑を持ち、多数の横帯を形成すること、胸鰭基部上部に濃青色の斑紋を持つことなどによりアオバラヨシノボリと区別される。ただし、両種とも本種との識別が難しい個体があるため注意が必要である。

分布の概要： 沖縄島の固有種。沖縄島北部の河川を中心に分布するが、生息河川は限られる。現在の南限は読谷村である。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁のアヤヨシノボリは中琉球の固有種であるが、沖縄島のほか、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、久米島にも分布する。ヨシノボリ属のうち沖縄島固有種は本種のみである。アオバラヨシノボリは、比較的勾配の緩やかな河川の中流から上流に分布し、淵のような緩流部を好む。本種は、ゴクラクハゼ、クロヨシノボリ、シマヨシノボリ、アヤヨシノボリ、ヒラヨシノボリと同所的に見られるが、ゴクラクハゼやアヤヨシノボリ、シマヨシノボリより上流に分布することが多く、またシマヨシノボリやヒラヨシノボリが瀬に生息するのに対し、本種は淵に多い。

生態的特徴： 比較的勾配の緩やかな河川の中流から上流に分布し、淵のような緩流部を好む。河川型であり、近縁のアヤヨシノボリのように仔魚が海へ出ることはない。産卵期は4～9月で、流れの緩やかな淵の石の下に長径4.3 mm、短径1.5 mmの紡錘型の大きな卵を生みつける。生み出された卵は、孵化まで雄親によって保護される。孵化仔魚は体長5.8 mmで卵黄を持つが、すでに脊索の末端が上屈

生息地の条件 : 良好な環境が保たれた河川の河口域に生息する。干潮時の水深が 10~50 cm の場所にある軟泥底から見つかったている。

現在の生息状況 : 沖縄県内では沖縄島の 1 河川、石垣島の 1 河川、西表島の 1 河川のみで確認されている。各河川でわずかな個体数の採集例が知られるのみであり、個体数は非常に少ない。近年の確認例はほとんどない。

学術的意義・評価 : 本種の生息地は、国外においてもパプアニューギニアとフィジーしか知られていない。調査が進めば他の地域からも見つかる可能性はあるが、現在のところ、琉球列島は本種の数少ない貴重な生息地となっている。石垣島の宮良川が本種のタイプ産地である。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であり、また河口域の生息環境は開発の影響を受けやすい。赤土の堆積などによる底質の変化にも注意が必要である。これまでに確認された県内の生息地は、道路建設、橋梁工事や護岸工事により環境が大きく変化し、すでに生息していない可能性が高い。

原 記 載 : Akihito and K. Meguro, 2000. Review of the gobiid genus *Cristatogobius* found in Japan with description of a new species. *Ichthyological Research*, 47: 249–261.

参 考 文 献 : 鈴木寿之, 2015. ヒメトサカハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 124-125.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : クロトサカハゼ

分 類 : スズキ目 ハゼ科

学 名 : *Cristatogobius nonatoae* (Ablan, 1940)

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 頭と体はやや側扁する。両眼間から第 1 背鰭起部にかけてとさか状の皮質隆起が発達する。頭部、体側部、胸鰭基部に黒点を欠く。臀鰭は暗灰色で先端側が赤色、または全体が黒色で、黄色線はない。背鰭と尾鰭は赤色で、背鰭と尾鰭の上部に不規則な黄色線模様があり、尾鰭の鰭条は黄色である。最大体長は約 5 cm である。

近似種との区別 : 臀鰭中央に黄色縦線を欠くこと、頭部、体側部、胸鰭基部に黒点を欠くこと、背鰭と尾鰭が赤色で、不規則な黄色線模様を持つことなどにより、同属のトサカハゼおよびヒメトサカハゼと区別される。

分布の概要 : 沖縄県内では石垣島と西表島から知られる。他に国内では奄美大島、国外では台湾、フィリピン、タイから報告されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本国内では 3 種のトサカハゼ属が知られており、いずれの種もその分布は琉球列島に限定される。本種とヒメトサカハゼは、トサカハゼと比べて生息地および個体数が少ない。トサカハゼと同所的に見られる。

生態的特徴 : 河口域の軟泥底の穴に見られる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件 : 良好な環境が保たれた河川の河口域に生息する。干潮時の水深が 1 m 未満の場所にある軟泥底から見つかったている。

現在の生息状況 : 沖縄県内では石垣島の 1 河川、西表島の 2 河川のみで確認されている。各河川でわずかな個体数の採集例が知られるのみであり、個体数は非常に少ない。近年の確認例はほとんどない。

学術的意義・評価 : 本種の生息地は、国外においても台湾、フィリピン、タイからしか知られていない。調査が進めば他の地域からも見つかる可能性はあるが、現在のところ、琉球列島は本種の数少ない貴重な生息地となっている。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であり、また河口域の生息環境は開発の影響を受けやすい。赤土の堆積などによる底質の変化にも注意が必要である。石垣島の生息地は護岸工事により環境が大きく変化し、すでに生息していない可能性がある。西表島の 2 ヲ所の生息地では底質が変化し、生息環境の悪化が懸念される。

原 記 載 : Ablan, G L., 1940. Two new Philippine gobioids. *Philippine Journal of Science*, 71: 373–377, 2pls.

参 考 文 献 : Akihito and K. Meguro, 2000. Review of the gobiid genus *Cristatogobius* found in Japan with description of a new species. *Ichthyological Research*, 47: 249–261.
鈴木寿之, 2015. クロトサカハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 126-127.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : アゴヒゲハゼ

分 類 : スズキ目 ハゼ科

学 名 : *Glossogobius bicirrhosus* (Weber, 1894)

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 頭部は縦扁し、体は円筒形、尾部はやや側扁する。頭部はやや尖り、下顎は上顎より前へ出る。下顎の先端付近に 1 対の鬚状突起を持つ。頬の孔器列は縦列。体色は、地色が淡い黄土色または淡灰色で、細かい暗褐色斑に覆われる。背面には赤色斑が散在する。体側中央に沿って、5 つの大きな暗色斑が並ぶ。最大体長は約 7 cm である。

近似種との区別 : 下顎の先端付近に 1 対の鬚状突起を持つことで同属他種と区別できる。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島から知られる。他に国内では奄美大島、国外では台湾、中国、

フィリピン、マレーシア、インドネシアなどから報告されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較：日本では6種のウロハゼ属が知られている（本属に含まれることのあるヒトミハゼを除く）。種子島以北に分布するウロハゼを除く5種が沖縄県を中心とする琉球列島に分布するが、イワハゼ以外は全て稀である。

生態的特徴：河川汽水域の砂泥底に住む。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件：河川汽水域の砂泥底で見つかっているが、詳しい環境条件は不明。

現在の生息状況：沖縄県内では沖縄島の2河川、石垣島の3河川、西表島の2河川で確認されている。各河川において1~2個体が確認されたに過ぎず、継続した生息は確認されていない。

学術的意義・評価：琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。下顎先端に鬚状突起を持つユニークな形態も興味深い。

生存に対する脅威：汽水域の生息環境は開発の影響を受けやすい。これまでに本種が確認された場所では、浚渫、護岸工事、赤土流入による底質の変化、取水による水量の減少、道路や橋梁の建設などにより環境が変化した場所が多く、本種の生息に適さなくなっている可能性がある。

特記事項：かつては下顎に鬚状突起を持つ特徴などから *Illana* 属に含まれることがあったが、現在 *Illana* 属はウロハゼ属のシノニムとされている。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載：Weber, M., 1894. Die Süßwasser-Fische des Indischen Archipels, nebst Bemerkungen über den Ursprung der Fauna von Celebes. Zoologische Ergebnisse einer Reise in Niederländisch Ost-Indien, 3: 405-476.

参考文献：鈴木寿之, 2015. アゴヒゲハゼ, “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 134-135.

執筆者名：前田 健

和名：コンジキハゼ

分類：スズキ目 ハゼ科

学名：*Glossogobius aureus* Akihito and Meguro, 1975

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態：頭部は縦扁し、体は円筒形、尾部はやや側扁する。頭部はやや尖り、下顎は上顎より前へ出る。頬の孔器列は縦列。眼下の孔器列は分枝しない。体色は、地色が淡い黄土色または淡灰色で、細かい暗褐色斑に覆われる。体側中央に沿って、5つの大きな暗色斑が並ぶ。大型個体は30 cm 近くまで成長する。

近似種との区別：下顎先端付近に鬚状突起を持たないこと、後頭部背面に黒色点が散在しないこと、頬の孔器列が縦であり、眼下の孔器列は分枝しないことなどにより、国内で確認されている同属他種と区別される。

分布の概要：沖縄県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島から知られる。他に国内では静岡県、和歌山県、高知県、種子島、奄美大島から記録があり、国外では台湾、海南島 (中国)、フィリピン、ベトナム、カンボジア、タイ、マレーシア、インドネシア、オーストラリアから報告されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較：日本では6種のウロハゼ属が知られている（本属に含まれることのあるヒトミハゼを除く）。種子島以北に分布するウロハゼを除く5種が沖縄県を中心とする琉球列島に分布するが、イワハゼ以外は全て稀である。

生態的特徴：河川汽水域または淡水域の下流部に分布する。砂泥底または砂礫底の、岩の隙間や植物の根の間に潜む。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件：比較的大きな河川で見つかることが多いようである。川岸に植生があつて、倒木や岩などがある河川環境が必要と考えられる。

現在の生息状況：沖縄県内では沖縄島の3河川、宮古島の1河川、石垣島の2河川、西表島の3河川で確認されている。西表島の1細流を除き、これまでに確認された個体数はわずかであり、生息が継続していない場所が多いと考えられる。

学術的意義・評価：西表島住吉が本種のタイプ産地である。琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威：これまでに本種が確認された場所では、浚渫、工場排水等による水質悪化、牧場からの有機汚濁、護岸工事、道路や橋梁の建設などにより環境が変化した場所が多く、本種の生息に適さなくなっている可能性がある。

特記事項：東南アジアでは重要な食用対象種である。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載：Akihito and K. Meguro, 1975. Description of a new gobiid fish, *Glossogobius aureus*, with notes on related species of the genus. Japanese Journal of Ichthyology, 22: 127-142.

参考文献：鈴木寿之, 2015. コンジキハゼ, “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 136-137.

執筆者名：前田 健

和名：ウラウチイソハゼ

分類：スズキ目 ハゼ科

学名：*Eviota ocellifer* Shibukawa and Suzuki, 2005

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態：体はやや側扁し、体高は高い。頭部の前鰓蓋管に開孔がない。雄の第1背鰭第1・2棘は伸長する。

胸鰭下半部に分枝軟条がある。頭と体の地色は薄いベージュ色で、頭部に焦げ茶色の斑点が散在し、眼から5~6本の焦げ茶色の放射状の線が出る。体側には数個の焦げ茶色の横帯やX字状の斑紋がある。第1背鰭基部近くに大きな黒色斑がある。最大体長は約2 cmである。

近似種との区別： 頭部の前鰓蓋管に開孔がないこと、胸鰭下半部に分枝軟条があること、頭と体の地色は薄いベージュ色で、頭部に焦げ茶色の斑点が散在し、眼から5~6本の焦げ茶色の放射状の線が出ること、体側に数個の焦げ茶色の横帯やX字状の斑紋があること、第1背鰭基部近くに大きな黒色斑があることなどで同属他種と区別される。

分布の概要： 西表島の1河川のみから知られている。国内、国外含め、他に記録はない。

近縁な種及び群との分布状況の比較： イソハゼ属のほとんどの種はサンゴ礁域に住む。ミナミイソハゼは、ウラウチイソハゼと同じく河川汽水域に生息し、日本固有種とされるが、琉球列島の島々に広く分布するほか、本州や四国にも分布する。また、ミナミイソハゼは沿岸の岩礁域にも生息する。

生態的特徴： 河口域の岩礁帯に生息し、水深1~1.5 mの岩のくぼみや隙間、カキ殻の間などに単独で見られる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件： 詳しい環境条件は不明であるが、環境の良好な河口域の岩礁帯が必要と考えられる。

現在の生息状況： 西表島の1河川からしか見つかっていない。個体数は多くない。生息地の環境は悪化しつつある。他の川からも見つかる可能性はあるが、近隣河川でも環境の悪化が見られ、生息条件を満たす河川は減少していると考えられる。

学術的意義・評価： 西表島の浦内川が本種のタイプ産地であり、知られている唯一の生息地である。

生存に対する脅威： 生息地が局所的であり、個体数が少ないため、個体群の存続が危ぶまれる。本種の生息河川では、周辺の開発により水質の悪化や底質の変化が見られ、本種個体群への影響が懸念される。

原 記 載： Shibukawa, K. and T. Suzuki, 2005. Two new species of the gobiid fish genus *Eviota* (Teleostei, Perciformes, Gobioidae) from the western Pacific. Bulletin of the National Science Museum Series A (Zoology), 31: 65-76.

参 考 文 献： 鈴木寿之, 2015. ウラウチイソハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 120-121.

執 筆 者 名： 前田 健

和 名： シマエソハゼ

分 類： スズキ目 ハゼ科

学 名： *Schismatogobius ampluvinculus* Chen, Shao and Fang, 1995

カ テ ゴ リ ー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態： 体は細長く、円筒形。尾柄は細い。雄は雌と比べて口が大きくなり、大型の雄では上顎後端が眼の後縁をはるかに超える。肛門前長は体長の56~60%。鱗を欠く。胸鰭軟条数は15または16。頭部は焦げ茶色。軀幹部と尾部、尾鰭基部にそれぞれ1つの幅広い黒色横帯を持ち、その間は白色または淡黄褐色で背面はしばしば橙色みを帯びる。胸鰭上部に大きな黒色斑を持つ。小型のハゼ類で最大体長は約2.5 cm。2 cm以下の個体が多い。

近似種との区別： 同属のエソハゼと似るが、肛門前長が大きいこと、尾部の黒色横帯の中に明瞭な淡色斑がない場合が多く、1本の太く明瞭な黒色横帯となること、胸鰭上部に大きな黒色斑を持ち、それが胸鰭上部の縁辺近くに達することなどにより識別される。ただし体色は条件によって変化するため誤同定も多いと考えられ、注意が必要である。

分布の概要： 沖縄県内では沖縄島、久米島、石垣島、西表島に分布する。他に、国内では種子島、屋久島、国外では台湾から報告がある。エソハゼ属の分類は未解決であり、本種は東南アジアにも生息する可能性はある。

近縁な種及び群との分布状況の比較： エソハゼ属はインド・西太平洋に広く分布する。台湾から琉球列島には少なくとも3種が分布する。シマエソハゼとエソハゼの国内における分布は琉球列島に限られる。両種の生息環境は類似し、個体数が多い場合には両種が混じって見られることが多い。

生態的特徴： 河川淡水域下流部の瀬から淵頭に生息する。流れによって揺れ動くような砂利の中に半身を埋めて頭を出していることが多い。その体の模様が底質中に溶け込み、じっとしていると見つけることは困難である。黒斑が目立つ胸鰭をひらひら動かしていることが多い。両側回遊性で、仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。体長1 cm未満で河川に加入し、着底する。食性や産卵習性は不明。

生息地の条件： 生息する底質が限定される。底質が固まっておらず、流れによって揺れ動くような砂利底が必要であるが、面積は広くなくても良く、流れの速い中にそのような部分が小さなパッチ状に存在する環境に見られることが多い。沖縄島ではやや細かい砂利底に住むが、地質の異なる西表島ではやや粗い丸石による礫底に住む。遡上の障害となる段差などのない下流部に見られる。上記のような条件を満たす環境は河川内に通常あまり多くはない。

現在の生息状況： 沖縄島では、北部各地の河川で確認されているが、生息場所は各河川の中でも通常極めて狭い範囲に限られ、また生息状況は不安定である。狭い瀬に多数の個体が見られることもあるが、通常その生息は持続しない。恒常的に見られる場所は知られていない。久米島や石垣島でも同様と考えられる。西表島においては常に観察される場所もあるようだが、個体数は少なく、生息河川も多くない。

学術的意義・評価： エソハゼ属は熱帯島嶼河川の魚類相を構成する貴重かつユニークな一員である。砂利に紛れて潜む独特な習性を持ち、生態学的にも興味深い。琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威： 小型のハゼ類であり、底質変化に敏感である。浚渫により底質が変わると姿を消す。また河川改修

<魚類>

や周辺の開発等により土砂が流入すると、礫間が詰まり生息に不適となる。本種の生息地は集落に近い下流部にあることが多いため攪乱されやすく、安定した生息が困難となっている。

- 特記事項 : 日本産の種を含むエソハゼ属の分類には多くの問題があり、研究が進められている。
原記載 : Chen, I-S., K-T. Shao and L-S. Fang, 1995. A new species of freshwater goby *Schismatogobius ampluvinculus* (Pisces: Gobiidae) from southeastern Taiwan. *Zoological Studies*, 34: 202-205.
参考文献 : 前田 健, 2014. シマエソハゼ. “日本産稚魚図鑑 第二版”, 沖山宗雄(編), 東海大学出版会, 神奈川, 1296-1297.
立原一憲, 2015. シマエソハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 244-245.

執筆者名 : 前田 健

和名 : エソハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Schismatogobius roxasi* Herre, 1936
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態 : 体は細長く、円筒形。尾柄は細い。雄は雌と比べて口が大きくなり、大型の雄では上顎後端が眼の後縁をはるかに超える。肛門前長は体長の 53~57%。鱗を欠く。胸鰭軟条数は 14 または 15。頭部は焦げ茶色。躯幹部と尾部、尾鰭基部にそれぞれ 1 つの幅広い焦げ茶色の横帯を持つが、明瞭ではなくあいまいな模様となることが多い。特に尾部の横帯は、体側正中線の背側に黄褐色斑紋、腹側に白色斑があって、2 本の細い黒色横帯のように見える場合が多い。胸鰭鰭条に沿って細かい黒色斑が並ぶ。シマエソハゼより大きくなり、最大体長は約 3.5 cm。しかし、国内では 3 cm 未満の個体が多い。

近似種との区別 : 同属のシマエソハゼと似るが、肛門前長が小さいこと、体側の横帯があいまいで、尾部では 2 本の細い黒色横帯のように見えること、胸鰭には細かい黒色斑を多数持ち、縁近くに達する大きな黒色斑を欠くことなどにより識別される。ただし体色は条件によって変化するため誤同定も多いと考えられ、注意が必要である。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島に分布する。他に、国内では奄美大島、国外では台湾とフィリピンから報告がある。ただし、エソハゼ属の分類には混乱があり、現在知られている分布は正確ではない可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : エソハゼ属はインド・西太平洋に広く分布する。台湾から琉球列島には少なくとも 3 種が分布する。エソハゼとシマエソハゼの国内における分布は琉球列島に限られる。両種の生息環境は類似し、個体数が多い場合には両種が混じって見られることが多い。

生態的特徴 : 河川淡水域下流部の瀬から淵頭に生息する。流れによって揺れ動くような砂利の中に半身を埋めて頭を出していることが多い。その体の模様が底質中に溶け込み、じっとしていると見つけることは困難である。両側回遊性で、仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。食性や産卵習性は不明。

生息地の条件 : 生息する底質が限定される。底質が固まっておらず、流れによって揺れ動くような砂利底が必要であるが、面積は広くなくても良く、流れの速い中にそのような部分が小さなパッチ状に存在する環境に見られることが多い。沖縄島ではやや細かい砂利底に住むが、地質の異なる西表島ではやや粗い丸石による礫底に住む。遡上の障害となる段差などのない下流部に見られる。上記のような条件を満たす環境は河川内に通常あまり多くはない。

現在の生息状況 : 沖縄島では、北部各地の河川で確認されているが、生息場所は各河川の中でも通常極めて狭い範囲に限られ、また生息状況は不安定である。狭い瀬に多数の個体が見られることもあるが、通常その生息は持続しない。恒常的に見られる場所は知られていない。西表島においては常に観察される場所もあるようだが、個体数は少なく、生息河川も多くない。

学術的意義・評価 : エソハゼ属は熱帯島嶼河川の魚類相を構成する貴重かつユニークな一員である。砂利に紛れて潜む独特な習性を持ち、生態学的にも興味深い。琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威 : 小型のハゼ類であり、底質変化に敏感である。浚渫により底質が変わると姿を消す。また河川改修や周辺の開発等により土砂が流入すると、礫間が詰まり生息に不適となる。本種の生息地は集落に近い下流部にあることが多いため攪乱されやすく、安定した生息が困難となっている。

- 特記事項 : 日本産の種を含むエソハゼ属の分類には多くの問題があり、研究が進められている。
原記載 : Herre, A. W. C. T., 1936. Notes on fishes in the Zoological Museum of Stanford University, V. New or rare Philippine fishes from the Herre 1933 Philippine expedition. *Philippine Journal of Science*, 59: 357-373, Pls.1-2.
参考文献 : 立原一憲, 2015. エソハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 246-247.

執筆者名 : 前田 健

和名 : コマチハゼ
分類 : スズキ目 クロユリハゼ科
学名 : *Parioglossus taeniatus* Regan, 1912
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態** : 体はやや細長く、側扁する。第1背鰭前方に皮質隆起がある。頭部の前眼肩甲管に4開孔、前鰓蓋管に2開孔がある。左右の腹鰭は分かれ、それぞれ1棘4軟条。体色は黄褐色で、体側正中線の下側を通る黒色縦帯を持つ。この黒色縦帯は尾鰭上にも延長するが、尾鰭上では先端に近づくほど、細く、薄くなる。最大体長は約2.5 cmである。
- 近似種との区別** : 近似のサツキハゼは体側の黒色縦帯が体側正中線付近を通ること、ヨスジハゼは体側の黒色縦帯の下縁が臀鰭基底に接すること、ミヤラビハゼは第1背鰭に黒色斑を持つことにより区別される。
- 分布の概要** : 沖縄県内では西表島のみから知られている。国内では他に記録はない。国外では、フィリピン、パラオ、バヌアツ、フィジー、アルダブラ環礁（セーシェル）から報告がある。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : サツキハゼ属にはインド・太平洋に広く分布する種が多い。本種もインド洋西部のアルダブラ環礁から南太平洋のフィジーに至る広い範囲に分布する。日本国内におけるサツキハゼ属の分布は、サツキハゼとベニツケサツキハゼを除いて全て琉球列島に限られる。本種はその中でも国内における生息地が少ない種の一つで、西表島の1河川からしか見つかっていない。
- 生態的特徴** : 沖縄県内では、河口域のマングローブ湿地で確認され、水路沿いのヒルギ類の根元の中層付近でミヤラビハゼの群れと混泳しているところが観察されている。国外では、マングローブ域のほか、汽水域や沿岸域の砂底や泥底、岩礁などに住むとされる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。
- 生息地の条件** : 詳しい環境条件は不明であるが、環境の良好なマングローブ域の水路が必要と考えられる。
- 現在の生息状況** : 沖縄県内では西表島の1河川からしか見つかっていない。1993年以前には2個体が確認されたのみであったが、2000年以降継続して確認されている。しかし個体数は少なく、多くても10個体程度である。生息地の環境は悪化しつつある。
- 学術的意義・評価** : 琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。
- 生存に対する脅威** : 生息地が局所的であり、個体数が極めて少ないため、個体群の存続が危ぶまれる。本種の生息地である水路では、人や船舶の出入りが増え、水路沿いのヒルギ類が枯れたり、底質が変化するなど、環境が変化しており、本種個体群の消失が危惧される。
- 特記事項** : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)
- 原記載** : Regan, C. T., 1912. New fishes from Aldabra and Assumption, collected by Mr. J. C. F. Fryer. The Transactions of the Linnean Society of London. Second Series. Zoology, 15 (pt.2, no.18): 301-302.
- 参考文献** : Rennis, D. S. and D. F. Hoese, 1985. A review of the genus *Parioglossus*, with descriptions of six new species (Pisces: Gobioidae). Records of the Australian Museum, 36: 169-201.
鈴木寿之, 2015. コマチハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 142-143.
鈴木寿之・瀬能 宏・藍澤正宏, 1994. 西表島で採集された日本初記録のサツキハゼ属魚類3種. I. O. P. Diving News, 5 (9): 2-6.
- 執筆者名** : 前田 健

和名 : ヒメサツキハゼ
分類 : スズキ目 クロユリハゼ科
学名 : *Parioglossus interruptus* Suzuki and Senou, 1994
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態** : 体はやや細長く、側扁する。第1背鰭前方に皮質隆起がある。頭部の前眼肩甲管に4開孔、前鰓蓋管に2開孔がある。左右の腹鰭は分かれ、それぞれ1棘4軟条。体色は黄褐色で、体側下半部を通る黒色縦帯を持つが、この黒色縦帯は尾柄部では不明瞭となる。尾鰭の基部側に半円形の黒色斑があり、その中心は尾鰭基底の中央よりやや下側に位置する。最大体長は約2.5 cmである。
- 近似種との区別** : 近似のボルネオハゼは体側の黒色縦帯を欠き、尾鰭の黒色斑の上縁が尾鰭基底中央より下側に位置すること、コビトハゼは、尾鰭の黒色斑の中心が尾鰭基底の中央よりやや上側に位置すること、ヨスジハゼ、ミヤラビハゼ、コマチハゼは体側の黒色縦帯が頭部から尾鰭にまで達することなどにより区別される。
- 分布の概要** : 沖縄県内では西表島のみから知られている。国内では他に記録はない。国外では、マプール島（マレーシア、ボルネオ島北東沖）およびニューギニア島から報告がある。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : サツキハゼ属にはインド・太平洋に広く分布する種が多い。ヒメサツキハゼは記録が少ないものの、西表島、マプール島、ニューギニア島といった離れた場所で見つかることから、その周辺に広く分布すると推測される。日本国内におけるサツキハゼ属の分布は、サツキハゼとベニツケサツキハゼを除いて全て琉球列島に限られる。本種はその中でも国内における生息地が少ない種の一つで、西表島の2河川からしか見つかっていない。
- 生態的特徴** : 沖縄県内では、河口域のマングローブ湿地で確認されている。水路沿いのヒルギ類の根元の中層付近でミヤラビハゼやボルネオハゼと混泳し、浮遊しながらプランクトンを食べているところが観察されている。夜間や干潮時にはヒルギ類の根の間やカキ殻などの隙間に潜り込んでいる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。
- 生息地の条件** : 詳しい環境条件は不明であるが、環境の良好なマングローブ域の水路が必要と考えられる。
- 現在の生息状況** : 沖縄県内では西表島の2河川からしか見つかっていない。そのうち1河川で継続して確認されているが、個体数はごくわずかである。生息地の環境は悪化しつつある。
- 学術的意義・評価** : 西表島の仲間川が本種のタイプ産地である。琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状

<魚類>

況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。
生存に対する脅威 : 生息地が局所的であり、個体数が極めて少ないため、個体群の存続が危ぶまれる。本種の生息地である水路では、人や船舶の出入りが増え、水路沿いのヒルギ類が枯れたり、底質が変化するなど、環境が変化しており、本種個体群の消失が危惧される。西表島のもう1ヵ所の確認地点では、橋梁建設と道路整備に伴う土砂の廃棄やマングローブ伐採によって環境が悪化し、現在では本種は見られなくなっている。

原 記 載 : Suzuki, T. and H. Senou, 1994. *Parioglossus interruptus*, a new species of goby from the western Pacific. Japanese Journal of Ichthyology, 41: 281–286.

参 考 文 献 : Rennis, D. S. and D. F. Hoese, 1985. A review of the genus *Parioglossus*, with descriptions of six new species (Pisces: Gobioidae). Records of the Australian Museum, 36: 169–201.
鈴木寿之, 2015. ヒメサツキハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 144-145.
鈴木寿之・瀬能 宏・藍澤正宏, 1994. 西表島で採集された日本初記録のサツキハゼ属魚類3種. I. O. P. Diving News, 5(9): 2-6.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : タイワンキンギョ
分 類 : スズキ目 ゴクラクギョ科
学 名 : *Macropodus opercularis* (Linnaeus, 1758)
方 言 名 : トーイユ
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 : 体長約7 cm。体はやや細長く側扁し、背鰭・臀鰭の基底が長い。尾鰭の後縁はやや深く切れ込み、鰓蓋の後端に橙色に縁取られた輝青色の眼状斑がある。体色は橙色の地色で、体側に10~12本の青緑色の横帯を持つ。成熟した雄は、背鰭・臀鰭の後部軟条、腹鰭の前部軟条および尾鰭上下葉の軟条が伸長する。

近縁種との区別 : 同属のチョウセンブナとは、尾鰭後端が湾入することにより、識別可能である。

分布の概要 : 日本国内では沖縄県の久米島、沖縄島、渡嘉敷島、石垣島および南大東島に分布する。ただし、南大東島の個体群は、明らかに移殖起源である。琉球列島内では沖永良部島にも生息するが、これは1937年に移殖されたものであるといわれている。国外ではラオス北東部、ベトナム北部、揚子江上流部、中国南部、海南島、台湾、紅頭嶼に分布する。

近縁な種および群との分布状況の比較 : 日本本土には同属のチョウセンブナが分布するが、新潟県や長野県に生息するチョウセンブナは、1914年ごろ朝鮮半島から移殖されたものである。

生態的特徴 : 湧水、水田の水路、湿地、湖沼や河川の止水域など流れがないか、極めて緩い場所に生息する。上鰓腔に発達した迷路状器官によって空気から直接酸素を取り入れることができる。そのため、水深が極めて浅く小さい、低酸素の水域でも生存可能である。沖縄島における産卵期は3~6月で、複数回産卵を行う。産卵のために、雄は水草の茂る場所に気泡で直径5~10 cmの浮巣をつくり、巣の下で雌を抱接して放卵させ放精し、受精卵を巣のなかに収容する。雄は孵化まで卵を保護する。雑食性で水面に落下する昆虫などを捕食する。

生息地の条件 : 水生植物が繁茂した、自然度の高い止水域が必要である。

現在の生息状況 : 生息地は互いに分断され、多くの生息地ではわずかな個体が残存するのみである。平地の止水域は開発の影響を受けやすく、年々生息地が失われているのが現状である。

学術的意義・評価 : 琉球列島のタイワンキンギョが自然分布であるか、移殖されたものであるかは結論が出ていない。本種が自然分布であると断定するに足る証拠は得られていないものの、県内の広い範囲で本種の分布が確認されていたことや、特異な繁殖様式を持つことなどから、自然分布の可能性が高いと考えられる。自然分布であれば、琉球列島の純淡水魚の分布の歴史的背景を探る上で極めて貴重な存在である。

生存に対する脅威 : 土地の造成に伴う沼や湿地の消失、河川改修に伴う自然川岸の消失などによる生息場所の著しい減少が挙げられる。また、業者やマニアによる採集圧も著しい。さらに沖縄の止水環境にはカワスズメやグッピーなど、様々な要因で人為的に持ち込まれた外来種が多数定着しており、それらとの競争も懸念される。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

原 記 載 : Linnaeus, C., 1758. Systema. Naturae, ed., (10): 824pp.

参 考 文 献 : 青柳兵司, 1984. 琉球列島産淡水魚類総説. 動物学会誌, 58: 13-14.

北川哲郎・森下 匠・根来 央・細谷和海, 2011. 飼育科におけるタイワンキンギョの繁殖特性. 近畿大学農学部紀要, 44: 55-61.

黒岩 恒, 1927. 琉球弧における淡水魚類採集概報. 動物学雑誌, 39: 355-368.

坂口總一郎, 1922. 闘魚 *Macropodus opercularis* に就て. 動物学雑誌, 43: 915-920.

執 筆 者 名 : 遠藤 (高田) 未来美

3) 絶滅危惧 I B 類 (EN)

和名 : ニホンウナギ
 分類 : ウナギ目 ウナギ科
 学名 : *Anguilla japonica* Temminck and Schlegel, 1846
 方言名 : ウナジー (混称)
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態 : 全長 80 cm。体は細長く、背部が一様に暗色、腹部が白色を呈し、斑紋はない。下顎がわずかに上顎より突出し、埋没鱗を持つ。背鰭起部は、胸鰭後端と肛門の中間か後方に位置。
 近似種との区別 : 背部が一様に暗色、腹部が白色で、顕著な斑紋を欠く。背鰭基部が胸鰭後端と肛門の中間もしくはやや後方に位置することで区別可能。
 分布の概要 : 朝鮮半島、台湾、中国、ベトナム、日本では北海道中部以南の各地。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表島から沖縄島に分布するが個体数は少ない。沖縄県下の河川では、汽水域に分布することが多く、淡水域にはオオウナギが生息する。
 生態的特徴 : マリアナ諸島西方海域で産卵し、仔魚が海流に乗って琉球列島に来遊後、シラスウナギに変態して河川に遡上する。
 生息地の条件 : 餌生物が豊富な河川汽水域。水質の良くない都市河川にも生息するが、琉球列島における個体数は多くない。
 現在の生息状況 : わが国における漁獲量は、1965 年以降 1/5 程度に減少している。
 学術的意義・評価 : 水産重要種であるとともに、大規模な回遊を行う種として学術的に極めて重要。
 生存に対する脅威 : 産卵場周辺海域の環境変化による仔魚の来遊量の減少。河口域の改変による環境劣化。シラスウナギ採捕による資源量の減少。
 特記事項 : IUCN カテゴリ : Endangered (EN)。
 原記載 : Temminck, C. J. and H. Schlegel, 1846. Fauna Japonica, sive descriptio animalium quae in itinere per Japoniam suscepto annis 1823–30 collegit, notis observationibus et adumbrationibus illustravit P. F. de Siebold. Part 1: 1–20.
 参考文献 : 小早川みどり, 2015. ニホンウナギ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 148-149. 黒木真理・塚本克己, 2011. 旅するウナギ 1 億年の時空を超えて. 東海大学出版会, 秦野. Tsukamoto, K., 1992. Discovery of spawning area for Japanese eel. Nature, 356: 789–791.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : アミメカワヨウジ
 分類 : トゲウオ目 ヨウジウオ科
 学名 : *Hippichthys heptagonus* Bleeker, 1849
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態 : 体長 15 cm。背鰭 23~30 軟条、胸鰭 13~16 軟条、臀鰭 2 または 3 軟条、尾鰭 10 軟条、体輪数 14, 15+36~42。軀幹部と尾部の上隆起線は不連続、軀幹部の中央隆起線の後方は下方に曲がる。主鯔蓋骨に 1 本の縦走隆起線が発達する。雄の育児嚢は尾部に位置する。生時の体色は、濃褐色で多数の小白斑が散在する。眼から 3 本の黒色帯が放射状に伸びる。軀幹部中央隆起線は暗褐色で、両側が赤色を呈す。
 近似種との区別 : 同属他種とは背鰭起部が尾部にあることにより区別される。また、ハクテンヨウジとは総体輪数が多いこと、カワヨウジとは軀幹部に白色横帯を欠くことによっても識別できる。
 分布の概要 : インド洋から西太平洋にかけての熱帯域。日本では、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島に生息しする。高知県と神奈川県からも報告があるが、偶発的分布と考えられる。
 生態的特徴 : 夏季に抱卵した雄が出現するが、生活史の詳細は未解明。
 生息地の条件 : 河川汽水域上端域に生息し、川岸の植生の間に潜む。
 現在の生息状況 : 各島の生息河川はごく限られ、いずれも個体数が少ない。
 学術的意義・評価 : 中琉球が分布の北限と考えられ、生物地理学的に興味深い。
 生存に対する脅威 : 生息河川および個体数が少ないため、それらの河川で河川改修や架橋の付け替え、リゾート開発に伴う生息環境の悪化などが懸念される。
 特記事項 : IUCN カテゴリ : Least Concern (LC)。
 原記載 : Bleeker, P., 1849. Bijdrage tot de kennis der ichthyologische fauna van het eiland Madura, met beschrijving van eenige nieuwe soorten. Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen, 22(8): 1–16.
 参考文献 : 瀬能 宏, 2015. アミメカワヨウジ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 206-207.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : オキナワキチヌ
 分類 : スズキ目 タイ科
 学名 : *Acanthopagrus chinshira* Kume and Yoshino, 2008

<魚類>

方 言 名 : チンシラー

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 体長 50 cm。背鰭鱗条数は 11 棘 11 軟条、側線上方の背鰭棘条中央部下方の横列鱗数は 4.5 である。頭長は、背鰭第 2 棘長の 1.5~1.8 倍であり、側線鱗数は 44~47 である。生時の体色は、背部が銀黒色、体側から腹部が銀白色を呈す。腹鰭と臀鰭は、白みを帯びた淡黄色である。

近似種との区別 : 同所的に生息するミナミクロダイとは、腹鰭と臀鰭の色彩で識別可能である。

分布の概要 : 東アジアの固有種であり、香港と台湾に分布。日本では沖縄島と石垣島に生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島ではミナミクロダイと同所的に生息する。冬季から春季の低水温時には、比較的浅い場所に出現するが、高水温期には深場に移動すると考えられている。

生態的特徴 : 本種の正確な産卵期は、未解明であるが、本種の浅場への接岸時期から推測すると、近縁のミナミクロダイ (沖縄島 12~3 月) やナンヨウチヌ (西表島 12~4 月) と同様であると考えられる。この時期には、接岸し、漁獲対象となり、多数の個体が水揚げされる。遊漁による釣獲もこの時期に集中している。

生息地の条件 : 沖縄島では中城湾、金武湾、名護湾など内湾環境にのみ生息し、サンゴ礁海域には出現しない。幼魚期には波打ち際の浅所に出現する。

現在の生息状況 : 主に沖縄島の内湾にのみ生息する。産卵期に過度の漁獲圧にさらされており、特に遊漁による大型個体の選択的漁獲が問題である。大型個体は急速に個体数が減少しつつある。

学術的意義・評価 : 東アジアの固有種で、沖縄島が分布東限であり、生物地理学的に重要である。水産重要種であり、漁獲対象となっており、今後、資源を持続的有効利用するための方策が必要。

生存に対する脅威 : 産卵期に集中して漁獲されている。特に遊漁によって大型個体が選択的に釣獲されていることが憂慮される。また、幼魚が出現する内湾の波打ち際が、埋め立てにより急速に消失している。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Near Threatened (NT)。

原 記 載 : Kume, M. and T. Yoshino, 2008. *Acanthopagrus chinsira*, a new spanid fish (Perciformes: Sparidae) from the East Asia. *Bulletin of the national museum of nature and science*, (A), 2: 47-57.

参 考 文 献 : 林 公義・萩原清司, 2013. オキナワキチヌ. “日本産魚類検索 全種の同定 第三版,” 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 秦野, 957.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : アトクギス

分 類 : スズキ目 キス科

学 名 : *Sillaginops macrolepis* (Bleeker, 1859)

方 言 名 : ウジュル (混称)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 : 体長 20 cm。体は、側扁した細長い円筒状。吻は円錐形で尖り、口が小さく、下端に開く。眼は大きく背面近くに位置し、鱗が大きい。生時の体色は、全体が銀白色で、背側がやや褐色を帯び、腹部が白色を呈す。背鰭に沿って 1~4 個の暗色斑、第 1 背鰭上部に大きな 1 黒色斑がある。

近似種との区別 : 琉球列島にはホシギスとモトギスが生息し、前種とは体側に不規則な黒斑を欠くこと、後種とは第 1 背鰭に黒色斑を持つことから識別される。

分布の概要 : フィリピン、カリマンタン島、スラウェシ島、モルッカ諸島、ニューブリテン島、ソロモン諸島などに分布。日本では西表島と石垣島から記録されている。

生態的特徴 : 夏季に成熟個体が採集されているが、生活史は未解明。

生息地の条件 : マングローブの発達した河川に隣接した健全な砂浜海岸に生息する。

現在の生息状況 : 石垣島と西表島の各 1 河川の河口と隣接して広がる砂浜海岸に生息。

学術的意義・評価 : 八重山諸島が分布の北限であり、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 局所分布し、個体数が少ない。砂浜海岸の汚染や埋め立て、そこに流入する河川の環境変化。

原 記 載 : Bleeker, P., 1859. *Derde bijdrage tot de kennis der vischfauna van Singaporea*. *Natuurkd. Tijdschr. Neder.-Indië*, 20: 446-456.

参 考 文 献 : Kago, T., 2013. Phylogenetic systematics of the family Sillaginidae (Percomorpha: order Perciformes). *Zootaxa*, 3642(1): 1-105.

鈴木寿之, 2015. アトクギス. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 220-221.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : メガネモチノウオ

分 類 : スズキ目 ベラ科

学 名 : *Cheilinus undulatus* Rüppell, 1835

方 言 名 : ヒロサー

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 体長 200 cm。体は楕円状で側扁し、成魚の後頭部が瘤状に突出する。側線は体側後部で中断し、背鰭条数 9 棘 10 軟条、臀鰭条数 3 棘 8 軟条、側線有孔鱗数 16+10 である。体側の各鱗には背腹方向に

- 長い1黒褐色斑がある。生時の体色は緑色で、眼から後方に向かう2本の黒色線を有す。
- 近似種との区別 : 成魚では体色が緑色であること、膨出した後頭部をもつことから同属他種と容易に区別できる。
- 分布の概要 : インド-太平洋熱帯域に広く分布する。日本では、成魚は奄美大島以南の琉球列島に生息し、幼魚は紀伊半島以南から記録されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本にはベラ科モチノウオ属9種が生息している。その多くが本種と重複して分布している。
- 生態的特徴 : 昼行性で、魚類、甲殻類、貝類などを捕食する。
- 現在の生息状況 : 健全なサンゴが発達する水深50mまでのサンゴ礁水域。幼魚はミドリイシ属の群落が発達した場所、成魚は水深のあるサンゴ礁の外側斜面や水路部に生息することが多い。
- 現在の生息状況 : 大型個体の観察例が減少している。
- 学術的意義・評価 : サンゴ礁域で見られる大型硬骨魚類のひとつであり、サンゴ礁生態系の中で重要な生態的地位を占めている。
- 生存に対する脅威 : 漁獲対象種となっており、電燈潜りで漁獲されたものが市場に水揚げされ、観賞用としても流通している。また、遊漁の対象にもなり、大型個体が釣獲されている。健全なサンゴ礁が発達した場所が無くなると生息場所が消失する。
- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Endangered (EN)。
- 原記載 : Rüppell, W. P. E. S., 1835. Neue Wirbelthiere zu der Fauna von Abyssinien gehörig. Fische des Rothen Meeres. Frankfurt-am-Main, Part 1: 1-28, pls.1-7.
- 参考文献 : Randall, J. E., S. M. Head and A. P. L. Sanders., 1978. Food habits of the giant humphead wrasse, *Cheilinus undulatus* (Labridae). Environmental Biology of Fishes, 3: 235-238.
- Westneat, M. W., 2001. Suborder Labroidei: Labridae. "The living marine resources of the Western Central Pacific", Carpenter K. E. and V. H. Niem (eds.), Identification Guide for Fishery Purposes, vol. 6, 3381-3467, pls.1-5.
- 吉野哲夫, 2005. メガネモチノウオ. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編", 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 178-179.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : ゴシキタメトモハゼ
 分類 : スズキ目 カワアナゴ科
 学名 : *Giuris* sp. 1
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態 : 頭部は縦扁し、両眼は広く離れる。体は円筒形で、尾柄はやや側扁する。眼窩上縁の鱗は複数列または点列。体の地色は灰褐色で、黄色または緑色を帯びることも多い。腹面は白い。頬から鰓蓋にかけて3本の紫色の縦線を持つ。胸鰭基部は黄色く、中央を1本の紫色縦線が横切る。体側に暗色横斑が並ぶ。その少し下方に躯幹部から尾柄まで続く暗色縦帯を持つ。婚姻色の雄の臀鰭には基部近くに黄色縦線があり、さらに縁が黄色く縁取られる。大型個体は体長20cmを超える。
- 近似種との区別 : タメトモハゼと似るが、ゴシキタメトモハゼは眼窩上縁の鱗が複数列または点列であること(タメトモハゼでは1列)、体側下部に躯幹部から尾柄まで続く暗色縦帯を持つこと(タメトモハゼでは暗色斑の列を持つことがあっても、まばらで尾柄部には達しない)、婚姻色の雄の腹鰭の縁が黄色いこと(タメトモハゼでは黄色くない)などにより区別される。
- 分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島から報告がある。国内では他に和歌山県と奄美大島で記録されている。国外にも広く分布すると考えられるが、分類が整理されておらず、正確な分布域は不明である。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 国内ではタメトモハゼの分布域と概ね重複するが、タメトモハゼより個体数が少ない。タメトモハゼの中に混じって見つかることが多い。
- 生態的特徴 : 川淡水域下流部から中流部の淵に生息する。川岸に水生植物が繁茂する場所や倒木などのある場所に住む。また樹木に覆われた淵でも見つかる。タメトモハゼの群がりに混じって中層や底で静止していることが多いが、危険を察知すると非常に俊敏に泳ぎ、植生の中や落ち葉の積もった中などに一瞬で姿をくらます。産卵習性は不明。両側回遊性で、仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。河川淡水域で河川加入直後と考えられる体長1.1cmのタメトモハゼ属の個体が採集されている。種の同定は困難であるが、タメトモハゼもゴシキタメトモハゼも体長約1cmで河川に加入し着底すると推測される。
- 生息地の条件 : 川岸にシマツユクサやセイコノヨシ等の水生植物が繁茂する、流れの緩やかな淵、または樹木に覆われた淵を好む。大きな堰の上流には生息しない。
- 現在の生息状況 : 生息状況は不安定であり、個体数の年変動が大きい。15年ほど前には場所によってはタメトモハゼより多くみられる年があったが、現在はタメトモハゼと比べ個体数はかなり少ない。タメトモハゼと同じく良好な生息環境は減少している。
- 学術的意義・評価 : 分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。
- 生存に対する脅威 : 河川における本種の生息地は集落に近く、水害防止を目的とした河川改修や浚渫により生息環境が失われることが多い。特に水生植物が繁茂すると浚渫が行われることが多く、それにより本種の恒常的な生息が妨げられていると考えられる。堰等の建設も生息可能な範囲を縮小させる要因となる。
- 特記事項 : 分類学の問題が未解決で、学名は未確定である。鈴木ほか(2004)では *Ophieleotris* sp. 1、中坊(2013)では *Ophieleotris* sp. 2 と表記されている。

〈魚類〉

参 考 文 献 : 前田 健, 2014. タメトモハゼ属の1種. “日本産稚魚図鑑 第二版”, 沖山宗雄 (編), 東海大学出版会, 秦野, 1227-1228.
中坊徹二, 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 神奈川.
鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾, 2004. 決定版日本のハゼ. 平凡社, 東京.
鈴木寿之, 2015. ゴシキタメトモハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 230-231.
鈴木寿之・坂本勝一・瀬能 宏, 2005. 絶滅の危機に瀕するハゼ亜目魚類2種に対する新標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 53: 198-200.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : オウギハゼ
分 類 : スズキ目 カワアナゴ科
学 名 : *Bunaka gyrynooides* (Bleeker, 1853)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 体は円筒形で、吻端はやや尖る。眼下の孔器列は縦列。体は褐色で、体側に多数の暗色縦線があり、背面はやや淡い色をしていることが多い。小型個体は、胸鰭と尾鰭に数本の顕著な暗色横帯、第1背鰭、第2背鰭、臀鰭に数本の顕著な縦帯をそれぞれ持つが、これらの帯模様は成長とともに不明瞭になる。大型個体は体長約30 cm、体重1 kgに達する。

近似種との区別 : オウギハゼの小型個体はテンジクカワアナゴと似るが、本種は各鰭に顕著な模様を持つことや孔器列の特徴などで識別される。テンジクカワアナゴは最大で体長約16 cmほどであり、本種ほど大きく成長しない。ホシマダラハゼは本種同様に大きくなるが、両眼がやや離れる顔つき、鱗が大きいこと、体色の違いなどにより本種と識別される。また、オウギハゼの河川加入直後の半透明な仔魚はテンジクカワアナゴのものと同様、混同されることがあるが、着底して変態する時の体長が明瞭に異なる。オウギハゼは体長2.5 cm前後で着底するのに対し、テンジクカワアナゴは体長1.6~2.0 cmで着底し、2.0 cmを超える個体は全身が褐色で尾鰭は丸いため、識別は容易である。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、宮古島、西表島から報告がある。国内では他に奄美大島で記録されている。国外では台湾、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニア、オーストラリア、パラオ、ポンペイ、フィジー、スリランカ、インドなどに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁なカワアナゴ属やエリトゲハゼなどと同様に熱帯地方に広く分布し、日本は分布の縁辺にあたる。本種はその中でもエリトゲハゼと並んで個体数が少なく、琉球列島を北限し、テンジクカワアナゴなどとは異なり日本本土では見つかっていない。

生態的特徴 : 河川淡水域下流部から中流部に生息し、岸に植生が豊富で岩の多い淡水域の瀬尻から淵頭で見つかることが多い。昼間は岩陰や植生の陰に潜む。巻貝類などを捕食する。産卵習性は不明。両側回遊性で、仔魚は海で浮遊期を過ごし、体長約2.5 cmで河川に加入し、着底すると考えられる。

生息地の条件 : 本種の生息には瀬と淵の明瞭な自然な地形の残された河川が必要である。大型個体は植生を伴う場所に生息することが多い。大型個体は少なくとも数年間越冬して成長していると推測されるが、冬季に死体が見つかった例が複数あることから、越冬時に衰弱する個体もあると考えられる。

現在の生息状況 : 沖縄県内では稀である。2~3個体が同時に見つかることもあるが、通常単独で、個体数は多くない。汽水域上流部や淡水域下流部の堰の下などでまとまった個体数の仔魚が見られることがあるが、成長できる環境、個体は少ないと考えられる。

学術的意義・評価 : 分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威 : 特に沖縄県では、水害防止を目的とした河川改修や浚渫により生息環境が失われることが多い。水生植物が繁茂すると浚渫が行われ、それにより本種の生息が妨げられている場所が多い。堰等の建設も生息可能な範囲を縮小させる要因となる。

特記事項 : 前回改訂時(2005年発行)には、標準和名がなく、「カワアナゴ科の1種」として掲載されていたが、その後に標準和名が提唱された。また、環境省のレッドデータブック2014にも同様に「カワアナゴ科の1種」として掲載されている。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

原 記 載 : Bleeker, P., 1853. Diagnostische beschrijvingen van nieuwe of weinig bekende vischsoorten van Sumatra. Tiental V-X. Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië, 4: 243-302.

参 考 文 献 : 前田 健, 2014. オウギハゼ. “日本産稚魚図鑑 第二版”, 沖山宗雄 (編), 東海大学出版会, 秦野, 1228-1229.
前田 健, 2015. カワアナゴ科の1種. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 351.
Pusey, B., M. Kennard and A. Arthington, 2004. Freshwater fishes of north-eastern Australia. CSIRO Publishing, Collingwood.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : トビハゼ
分 類 : スズキ目 ハゼ科
学 名 : *Periophthalmus modestus* Cantor, 1842
方 言 名 : トントンミー (総称)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態** : 背鰭は2基で、第1背鰭の先端は丸い。左右の腹鰭間に膜蓋と癒合膜がある。吻は突出し、上唇前縁を被う。眼は上方に突出し、眼下に眼を収容するくぼみと下眼瞼がある。体色は体側がくすんだ黄褐色で微かな黒色点が散在し、腹部が灰色を帯びる。最大体長は約7 cmである。
- 近似種との区別** : 同属のミナミトビハゼとは、第1背鰭の先端が尖らないこと（ミナミトビハゼでは尖る）、第1背鰭の縁近くに暗色帯を持たないこと（ミナミトビハゼは明瞭な暗色帯を持つ）、左右の腹鰭が癒合し、膜蓋を持つこと（ミナミトビハゼでは左右の腹鰭は分離し、膜蓋を欠く）などにより識別される。
- 分布の概要** : 沖縄県内では、沖縄島の塩屋湾、羽地内海、中城湾、漫湖のみに分布する。他に国内では東京湾、伊勢湾以西の本州、四国、九州、種子島、屋久島、国外では、朝鮮半島、中国、台湾に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 沖縄島の生息地では、ミナミトビハゼが同所的に生息する。トビハゼの分布が東アジアに限定され、沖縄県内における生息地も局限されるのとは対照的に、ミナミトビハゼは南アフリカからサモアに至るインド・太平洋の広い範囲に分布し、また沖縄県内でも沖縄島の他、久米島、宮古島、池間島、石垣島、小浜島、西表島、与那国島に広く分布する。沖縄県内においてもミナミトビハゼはほぼ全域に生息し、トビハゼの局限された分布とは対照的である。
- 生態的特徴** : 半陸生性であり、泥質干潟に生息孔を掘る。時には干潟上の干出域を胸鰭と尾柄を使って飛び跳ね、多毛類、ヨコエビ類、小型カニ類、稚魚等を捕食する。また時折、乾燥や紫外線対策および老廃物の排泄促進のために水溜りに体を浸したり、泥上で体を横転させて濡らす（泥シャワー）行動を行う。冠水時には沈水を避け、岸辺の水際より高い場所に移動する。沖縄県における産卵期は3~8月頃、盛期は4~6月である。雄は生息孔の周辺になわばりを形成する。また、垂直に掘り下げられた生息孔の末端から上方に向けて産卵室を掘り、入り口を1~3カ所開き、それらの周りに泥を吐き出して煙突状の土塀を築く。卵は産卵室の天井や側面の、間隙水の水面より高い位置に産み付けられ、空気中で発生する。孵化仔魚は大潮日の夜間の満潮時に産卵巣から放出される。雄は産着卵を孵化するまで保護し、孵化仔魚の放出にも関与する。孵化仔魚は約1カ月の浮遊生活を送り、外部形態及び皮膚構造が成魚と同様になると干潟に着底する。
- 生息地の条件** : 河口域及び内湾の泥質干潟に生息する。生活範囲は潮間帯とほぼ一致し、小潮時の潮汐変動範囲内に生息孔及び産卵巣を形成する。底質は含水率約40%、シルト分を約50%含む軟泥質で、その堆積厚が20 cm以上ある場所を好む。また、泥シャワーを行う水溜りや小水路を必要とし、産卵巣も小水路の周辺に多く形成される。したがって本種が生息していく上で、泥質干潟の底質、間隙水および海水を含めた、干潟生態系の保全が重要である。
- 現在の生息状況** : 生息状況についてまとまった知見はない。しかし埋め立て、河川改修および護岸整備等により、生息地である泥質干潟が縮小していることから、生息個体数も減少傾向にあることは容易に推察される。中城湾沿岸は生息環境が最も広く、生息個体数が最も多い。主要な生息地は中城湾北部の新港地区と南部の佐敷東地区である。
- 学術的意義・評価** : トビハゼは、国内における分布が飛び石状で、沖縄県内でも限られた生息地のみに分布するという点で生物地理学的に重要である。また、泥質干潟の生物群集の重要な一員であり、半陸上生活をする点でも興味深い。
- 生存に対する脅威** : 埋め立て事業による干潟の消失、および周辺の開発に伴う干潟環境の変化が最大の脅威となる。沖縄県では、これまでに行われた大規模な埋め立て事業により多くの生息地が失われてきたと考えられる。現在の生息地はそれらによって縮小、分断された結果残された貴重な生息地である。しかし、現存する生息地である塩屋湾、羽地内海、中城湾、漫湖のいずれにおいても、この10年で湾内または隣接する海域で大規模な埋め立てが行われており、今後の干潟環境の変化に注意が必要である。主要な生息地である中城湾の佐敷とうるま市具志川では、泥質干潟の環境が急激に変化しつつあり、個体群の維持が危ぶまれる（トカゲハゼの項参照）。
- 原記載** : Cantor, T. E., 1842. General features of Chusan, with remarks on the flora and fauna of that island. *Annals and Magazine of Natural History (New Series)*, 9: 265-278, 361-370, 481-493.
- 参考文献** : 萩原清司, 1998. トビハゼ. “日本の希少な野生水生生物に関するデータブック”, 水産庁(編), 日本水産資源保護協会, 東京, 98-99.
細谷誠一, 2003. 沖縄島のトビハゼ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), 財団法人自然環境研究センター, 東京, 211-212.
立原一憲, 2005. 琉球列島にすむ希少魚. “希少淡水魚の現在と未来: 積極的保全のシナリオ”. 片野修・森 誠一(編), 信山社, 東京, 297-311.
田北 徹・石松 淳, 2015. 水から出た魚たち—ムツゴロウとトビハゼの挑戦. 海游舎, 東京.
- 執筆者名** : 前田 健・津波古優子* *前回改訂版(2005)における津波古による記載内容を一部引用した。

和名 : アサガラハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Caragobius urolepis* (Bleeker, 1852)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態** : 体は細長く、やや側扁する。眼は小さい。頭部に鬚状突起を持たない。背鰭は1基で基底が長く、6棘30~37軟条。臀鰭も基底が長く、31~36軟条。いずれも鰭膜が尾鰭とつながる。胸鰭は小さく、17~20軟条。全身が赤い。最大体長は約7 cmである。
- 近似種との区別** : チワラスボ属やヒゲワラスボ属と似るが、頭部に皮褶や鬚状突起を持たないことにより区別される。また本種はチワラスボ属やヒゲワラスボ属ほど極端に細長くない。
- 分布の概要** : 沖縄県内では、沖縄島、石垣島、西表島から報告がある。他に、国内では奄美大島、国外では台湾、

<魚類>

フィリピン、タイ、インドネシア、インド、フィジーに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : アサガラハゼ属には本種と *Caragobius rubristriatus* の2種が含まれる。アサガラハゼがインド・西太平洋に広く分布するのに対し、*Caragobius rubristriatus* の分布はオーストラリア北部に限られる。

生態的特徴 : 汽水域の軟泥底の中に潜む。生息密度は低い。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。沖縄島の海岸で、浮遊生活末期とみられる体長7~8 mmの仔魚が採集されている。このサイズで河川に加入し、着底すると考えられる。

生息地の条件 : 軟泥干潟の滞筋の周辺などから見つかる。生息可能な環境は限定され、また変化しやすい。

現在の生息状況 : 本種はアクセスが容易でない軟泥中に潜むことから、生息状況を把握することが難しいが、同様に軟泥中に潜むヒゲワラスボ属と比べて仔魚の出現頻度がかなり低いことから、生息密度が低いことが推測される。沖縄島では、干潟環境は埋め立て等の開発により縮小を続けており、その中でも限られた場所に生息すると考えられるアサガラハゼの個体群も大幅に減少していると推測される。石垣島、西表島における生息状況は不明である。

学術的意義・評価 : 泥干潟の生物多様性を示す意味で重要である。本種の生態はほとんど不明であるが、泥の中でどのように生活し、繁殖しているのか非常に興味深い。

生存に対する脅威 : 河川改修や護岸工事、浚渫、道路建設のような河川河口域の環境変化や干潟の埋め立てなどにより、生息地が失われることが多いと考えられる。また上流部における農地開発や建物や道路の建設などにより汽水域に赤土が流入し、干潟の底質が変化すると本種は生息不可能となる。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Bleeker, P., 1852. Diagnostische beschrijvingen van nieuwe of weinig bekende vischsoorten van Sumatra. Tiental I-IV. Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië, 3: 569-608.

参考文献 : Maeda, K. and K. Tachihara, 2014. Larval fish fauna of a sandy beach and an estuary on Okinawa Island, focusing on larval habitat utilization by the suborder Gobioidae. Fisheries Science, 80: 1215-1229.

Murdy, E. O. and K. Shibukawa. A revision of the Indo-Pacific fish genus *Caragobius* (Gobiidae: Amblyopinae). Zootaxa, 301: 1-12.

立原一憲, 2015. アサガラハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 308-309.

執筆者名 : 前田 健

和名 : チワラスボ属の1種 3

分類 : スズキ目 ハゼ科

学名 : *Taenioides* sp. 3

カテゴリー : 絶滅危惧IB類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 体は非常に細長く、円筒形。眼は小さい。頭部には皮褶があり、下顎の下面に3対および中央に1本(計7本)の鬚状突起を持つ。下顎から後ろに伸びる皮褶の後端は、眼下後方の縦列皮褶の近くに達しない。背鰭は1基で基底が長く、6棘44~50軟条。臀鰭も基底が長く、44~51軟条。胸鰭は糸状の遊離軟条を持たず、15~18軟条。脊椎骨数は28~30。鱗を欠く。体色は黄褐色から黒褐色で金属光沢を持つ。背鰭の基部と尾鰭の中央は黒褐色。最大体長は約26 cmである。

近似種との区別 : チワラスボ属の1種1とチワラスボ属の1種2とは、下顎の下面に7本の鬚状突起を持つこと(チワラスボ属の1種1では6本、チワラスボ属の1種2では本種と同じく7本)、背鰭と臀鰭の軟条数がそれぞれ44~50、44~51であること(チワラスボ属の1種1ではそれぞれ42~44、41~44、チワラスボ属の1種2ではそれぞれ64~68、63~65)、体が金色であること(チワラスボ属の1種1とチワラスボ属の1種2は体が赤く、金属光沢はない)などにより区別される。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島と西表島から知られる。沖縄島では、漫湖、中城湾、大浦川、汀間川で見つかっている。他の場所にも生息する可能性があるが、最近まで国内のチワラスボ属は1種と考えられ、正確に区別されて来なかったため、情報が不十分である。国内では、他に和歌山県、高知県、奄美大島から知られる。分類が整理されておらず、国外における分布は不明。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同種もしくは近縁と考えられる *Taenioides gracilis* はタイ産地がインドで、インド・西太平洋に分布するとされる。国内には少なくとも4種のチワラスボ属が生息する。本種は琉球列島から日本本土に広く分布するが、チワラスボ属の1種1とチワラスボ属の1種2は、沖縄島のみから見つかっている。別の1種(チワラスボ)は佐賀県と和歌山県から知られる。

生態的特徴 : 汽水域や内湾の泥底から採集される。穴の中に潜む。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。沖縄島の海岸で、浮遊生活末期とみられる体長9~10 mmの仔魚が採集されている。このサイズで河川に加入し、着底すると考えられる。浮遊期は約1ヵ月である。

生息地の条件 : マングローブを伴う、自然な地形の残された汽水域で見つかる。

現在の生息状況 : 本種は泥中に潜み、発見が容易ではないことから生息状況を把握することが難しいが、同様に軟泥中に潜むヒゲワラスボ属と比べて仔魚の出現頻度が低いことから、生息密度が低いことが推測される。沖縄島では比較的広く分布するものの、汽水域の環境は開発や河川改修により改変されやすく、内湾の干潟も埋め立て等の開発により縮小を続けていることから、本種の個体群も大幅に減少していると推測される。西表島における生息状況は不明である。

学術的意義・評価 : チワラスボ属の分類は未解決の問題を多く含むが、泥干潟の生物多様性を示す意味で重要である。また眼が小さく、鱗を欠き、体が細長いなど特殊な形態を持っており、泥中での生活への適応と考えられる。本種の生態はほとんど不明であるが、泥の中でどのように生活し、繁殖しているのか非常に興味深い。

生存に対する脅威 : 河川改修や護岸工事、浚渫、道路建設など、河川河口域の環境変化や干潟の埋め立てなどにより、生息地が失われることが多いと考えられる。また上流部における農地開発や建物や道路の建設などにより汽水域に赤土が流入し、干潟の底質が変化すると本種は生息不可能となる。

特記事項 : 本種は、Kurita and Yoshino (2012) の中で、*Taenioides* sp. C とされている。*Taenioides gracilis* (Valenciennes, 1837) の可能性があり、分類の研究が進められている。

原記載 : 学名未確定。

参考文献 : Kurita, T. and T. Yoshino, 2012. Cryptic diversity of the eel goby, genus *Taenioides* (Gobiidae: Amblyopinae), in Japan. *Zoological Science*, 29: 538–545.
Maeda, K. and K. Tachihara, 2014. Larval fish fauna of a sandy beach and an estuary on Okinawa Island, focusing on larval habitat utilization by the suborder Gobioidi. *Fisheries Science*, 80: 1215–1229.
立原一憲, 2015. チワラスボ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 234-235.

執筆者名 : 前田 健

和名 : カエルハゼ
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Smilosicyopus leprurus* (Sakai and Nakamura, 1979)
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 体は細長く、頭部は縦扁する。上顎と下顎に犬歯状の歯を持ち、櫛状の歯や唇歯を持たない。体の前半は鱗を欠き、尾部には円鱗を持つ。第1背鰭は四角く、低い。雌雄とも体色は灰褐色で、吻端から眼の下に至る黒色縦線の他に目立つ模様は少ない。成熟した雌の腹部は赤くなる。最大体長は 5.5 cm。

近似種との区別 : ヨロイボウズハゼ、アカボウズハゼ、ヒノコロモボウズハゼの雌と似るが、体の前半部に鱗がないこと（ヨロイボウズハゼは円鱗、アカボウズハゼは櫛鱗を持つ）、尾部の鱗が円鱗であること（上記3種は櫛鱗を持つ）、吻端がやや尖ることなどにより識別可能。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島、与那国島に分布する。他に、国内では屋久島と奄美大島、海外では台湾、パラオ、ニューギニア島、クイーンズランド（オーストラリア）から報告されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : *Smilosicyopus fehmanni* がパラオ、ニューギニア島、ソロモン諸島、バヌアツ、ニューカレドニア、クイーンズランド、*Smilosicyopus nigriradiatus* がミクロネシアに分布する。本属は他に南太平洋に4種が分布する。

生態的特徴 : 両側回遊性と考えられる。海で約2カ月の浮遊期を過ごし、体長約1.3 cm で河川に加入する。河川上流域の平瀬や淵に生息する。食性の詳細は不明であるが、動物食と考えられる。

生息地の条件 : 本種の生息には、自然な地形の残された溪流環境が不可欠である。

現在の生息状況 : 沖縄島では稀であり、安定して生息する場所はほとんどない。また個体数も少ない。石垣島と西表島においても個体数は少なく、生息環境は悪化している。与那国島の状況は不明であるが、生息状況は不安定であると考えられる。

学術的意義・評価 : ボウズハゼ類は、熱帯島嶼河川の淡水域の限られた環境でニッチを分けて、多くの属、種に分化しており、生態学的に興味深い。本種の分布域は広く、分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。石垣島の荒川が本種のタイプ産地である。

生存に対する脅威 : ある程度落差のあるダムの上流にも遡上するが、ダムの規模や構造によっては遡上が不可能となり、生息が妨げられる。沖縄島における生息地では新たなダムが建設中であり、生息環境の存続が危ぶまれる。河川改修、農地開発、森林伐採、林道建設等により河川に土砂が流入すると、生息条件が悪化する。

特記事項 : 本種はかつてアカボウズハゼ属とされていたが、近年の研究により、別属とされた。本種は、*Smilosicyopus* 属のタイプ種である。また、従来知られていたより広範囲に分布することが明らかにされた。 IUCN カテゴリ : Data Deficient (DD)。

原記載 : Sakai, H. and M. Nakamura, 1979. Two new species of freshwater gobies (Gobiidae: Sicydiaphiinae) from Ishigaki Island, Japan. *Japanese Journal of Ichthyology*, 26: 43–54.

参考文献 : Keith, P. and L. Taillebois, 2013. Status and distribution of *Smilosicyopus* species (Teleostei, Gobioidi). *Cybium*, 38: 69–73.
Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. *Société Française d'Ichtyologie*, Paris.
立原一憲, 2015. カエルハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 108-109.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ミナミアシシロハゼ
 分類 : ズキ目 ハゼ科
 学名 : *Acanthogobius insularis* Shibukawa and Taki, 1996
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 II 類 (VU)

<魚類>

- 形態** : 体は円筒形。第1背鰭の棘数は普通8。成熟雄では、第1背鰭棘はやや伸長し、上下顎が大きく、厚くなる。体色は黄褐色で、細かい暗色斑に覆われる。体側に8~10本の乳白色の横帯を持つ。第1背鰭、第2背鰭、尾鰭（下部を除く）には多数の黒色斑と白色斑を持つ。最大体長は約5 cmである。
- 近似種との区別** : 本種は、同時に見られることの多いゴクラクハゼと似るが、体高が低いこと、頭部が小さいこと、第1背鰭に8棘を有すること（ゴクラクハゼでは6棘）、第2背鰭の鰭条数が多いこと、体側に青い斑紋を持たず、乳白色の細い横帯を持つことなどにより識別される。イワハゼやコンジキハゼなどのウロハゼ属とも似るが、鰭条数の他、吻がやや丸みを帯びること（ウロハゼ属では直線的でやや尖る）などにより区別される。
- 分布の概要** : 沖縄県内では沖縄島北部の塩屋湾と羽地内海周辺およびそれらに流入する河川のみに分布する。琉球列島の固有種で、沖縄島以外の生息地は奄美大島の一部のみである。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 同属のアシシロハゼやマハゼ、ハゼクチは、日本本土の他、朝鮮半島や中国など大陸にも分布するが、本種の分布はそれらと比較し局限される。奄美大島以南の琉球列島に分布する唯一のマハゼ属魚類である。
- 生態的特徴** : 内湾とそこに注ぐ河川の汽水域、河口周辺の干潟に生息する。産卵期は1~5月で、汽水域の石の下に単層の卵塊を産み付ける。産卵は干潟の滞筋の上流部や河川汽水域の上流部で確認されている。卵は非常に細長く、長径3.4 mm、短径0.5 mmである。孵化仔魚の全長は3.1 mm。飼育環境下では孵化後25日で着底した。浮遊期を内湾で過ごすと考えられ、体長約1 cmで河口域の干潟に加入し、着底する。加入直後の個体は4~5月頃に多くみられる。成長とともに上流へ移動する。夏から秋の成長は緩やかであるが、水温が下がる12月頃に成長速度が上がり、体長40 mmに達すると、成熟し、産卵する。産卵期が終わる5月頃に大型個体が姿を消すため、本種は年魚であると考えられる。
- 生息地の条件** : 生活史を完結させるために、内湾、泥質干潟から河川汽水域までの連続した環境のセットが必要であると考えられる。
- 現在の生息状況** : 沖縄島における分布地は局限される。個体数の推定は行われていないが、生息環境が縮小、悪化していることから減少傾向にあると推測される。羽地内海と塩屋湾の間にある河川の汽水域にも出現することがあるが、生息に適した環境がなく、定着していない。
- 学術的意義・評価** : 琉球列島の固有種であり、かつ極めて遺存性の高い分布を示しており、この地域の大陸からの分断や孤立の地史的背景を考える上で極めて重要な種である。塩屋湾に注ぐ大保大川は本種のタイプ産地である。
- 生存に対する脅威** : 塩屋湾とそこに流入する大保大川では、大保ダムが建設され、また周辺海域が埋め立てられるなど環境が大きく変わっており、本種の生息環境への影響が心配される。羽地内海と流入河川においても、羽地ダムの建設、海岸の護岸整備や湾内の浚渫、流入河川の改修など大規模な環境の改変が進み、生息環境が消失しつつあると考えられる。分布が局限され、また開発の盛んな汽水域に生息することから、本種の生息基盤は非常に脆弱と考えられる。本種は比較的目立たないため、気が付いたら絶滅していたということがないよう、注意が必要である。
- 原記載** : Shibukawa, K. and Y. Taki, 1996. A new gobiid fish, *Acanthogobius insularis*, from the Ryukyu Islands, Japan. *Ichthyological Research*, 43: 79-85.
- 参考文献** : 立原一憲, 2015. ミナミアシシロハゼ. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 328-329. 米沢俊彦, 2003. ミナミアシシロハゼ. “鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編-鹿児島県レッドデータブック”, 鹿児島県環境生活部環境保護課(編), 財団法人鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 140.
- 執筆者名** : 前田 健・國島大河

和名 : マサゴハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Pseudogobius masago* (Tomiyama, 1936)
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態** : 体は細長く、やや側扁した円筒形。吻は丸い。体色は淡い灰褐色で、尾鰭基底にくさび型の黒色斑がある。婚姻色を呈した雄では、第2背鰭と臀鰭が黒っぽくなる。小型のハゼ類であり、体長は最大で約2 cm。
- 近似種との区別** : 同所的に見られるスナゴハゼの小型個体と混同されることがある。スナゴハゼは、本種より体高が高く、尾鰭基底に2黒色斑が横列し（マサゴハゼでは上の黒色斑がその前方にある別の黒色斑とつながってくさび型になる）、第1背鰭に黒色斑を持つ（マサゴハゼはこれを欠く）。また、スナゴハゼでは第1背鰭下の体側に黒色横帯を持つが、マサゴハゼはこれを持たない。沖縄県内では共存しないが、コクチスナゴハゼも、同じく体高が高いこと、第1背鰭の先端および後半部が黒いことなどでマサゴハゼと区別される。
- 分布の概要** : 沖縄県内では、沖縄島の塩屋湾、羽地内海、中城湾、漫湖、豊崎干潟のみに分布する。琉球列島では、沖縄島の他に鹿児島県の種子島と奄美大島に分布し、他に国内では宮城県および福井県以南の本州、四国、九州、対馬、壱岐、五島列島、国外では朝鮮半島、台湾、中国、ベトナムに分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 沖縄県内では、同属のスナゴハゼが沖縄島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、小浜島に広く分布し、また各島の中でも普遍的に見られるのに対し、マサゴハゼの分布は沖縄島に限られ、島内における生息地も局限される。コクチスナゴハゼは八重山諸島に分布し、沖縄島からは知られていない。スナゴハゼ属には熱帯域に住む種が多く、東アジアの温帯から亜熱帯域のみに

- 分布するのはマサゴハゼだけである。
- 生態的特徴** : 湾奥に形成される泥質干潟に生息し、干潮時には干潟表面に現れる浅い水たまりに比較的高密度で見られる。沖縄島ではほぼ周年産卵すると考えられる（三重県では6~8月、福岡県近郊では5~9月が産卵期と推測されている）。産卵習性は不明。人工授精により得られた受精卵は、長径1.2mm、短径0.4mm、孵化仔魚は全長約2mm。仔魚は内湾で成長すると推測され、体長7~8mmで着底する。最小成熟体長は13mm。年魚と考えられ、沖縄島の個体群では寿命が半年に満たない可能性がある。
- 生息地の条件** : 湾奥に形成される比較的広く平坦な干潟に生息する。干潮時に地盤高の高い干潟表面に現れる軟泥底の浅い水たまりを好む。スナゴハゼやミナミヒメハゼなどと同時に見られることが多いが、それら2種は生息環境の底質や水深、塩分などの範囲が広く、さまざまな環境に出現するのに対し、マサゴハゼの生息環境は限定的である。中城湾ではトカゲハゼと同所的に生息する。沖縄島における生息地はトビハゼとほぼ一致する。
- 現在の生息状況** : 生息状況についてまとまった知見はない。しかし、埋め立てや海岸の護岸整備などにより、生息地である干潟が縮小していることから、生息個体数は大幅に減少していると考えられる。中城湾の佐敷干潟は最も面積の広い生息地であったが、砂嘴の移動により、干潟面積が大幅に縮小している。
- 学術的意義・評価** : 本種は琉球列島でも限られた島のみ分布し、沖縄島内における分布も局限される。また、スナゴハゼ属では、熱帯域に多くの種が分布し、温帯から亜熱帯のみに生息する本種の分布は特殊と言える。ハゼ類の分布域の形成を考える上で重要な意味をもつと考えられる。
- 生存に対する脅威** : 埋め立て事業による干潟の消失、および周辺の開発に伴う干潟環境の変化が最大の脅威となる。生息地における個体数は少なくないが、生息環境は過去と比べ、大幅に縮小している。沖縄島では、これまでに行われた大規模な埋め立て事業により多くの生息地が失われてきたと考えられる。現在の生息地はそれらによって縮小、分断された結果残された貴重な生息地である。しかし、現存する生息地である塩屋湾、羽地内海、中城湾、漫湖のいずれにおいても、この10年で湾内または隣接する海域で大規模な埋め立てが行われており、今後の干潟環境の変化に注意が必要である。
- 原記載** : Tomiyama, I., 1936. Gobiidae of Japan. Japanese Journal of Zoology, 7: 37-112.
- 参考文献** : 道津喜衛, 1958. マサゴハゼの生活史. 九州大学農学部学芸雑誌, 16: 359-370.
細谷誠一, 2003. 沖縄島のマサゴハゼ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), 財団法人自然環境研究センター, 東京, 207-208.
乾 隆帝, 2015. マサゴハゼ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 330-331.
伊藤 亮・向井貴彦, 2007. 三重県揖斐川下流域におけるマサゴハゼの生活史. 南紀生物, 49: 103-107.
Koyama, A., R. Inui, H. Iyooka, Y. Akamatsu and N. Onikura, 2016. Habitat suitability of eight threatened gobies inhabiting tidal flats in temperate estuaries: model developments in the estuary of the Kuma River in Kyushu Island, Japan. Ichthyological Research, 63: 307-314.
國島大河・西丸裕敏・立原一憲, 2014. 沖縄島佐敷干潟におけるスナゴハゼ *Pseudogobius javanicus* とマサゴハゼ *P. masago* の生息環境. 魚類学雑誌, 61: 59-67.

執筆者名 : 前田 健・國島大河

和名 : ホホグロハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Mugilogobius cavifrons* (Weber, 1909)
カテゴリー : 絶滅危惧IB類 (EN) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧IB類 (EN)

- 形態** : 頭部はやや縦扁し、両眼は広く離れる。吻は丸い。第1背鰭棘は糸状に伸長しない。第2背鰭と臀鰭の軟条数はどちらも8。体は暗灰褐色で、体側に8~10本の不明瞭な暗色横帯を持つ。第1背鰭中央部に大きな黒色斑がある。第1背鰭と第2背鰭の縁に沿って白色または黄色の縦帯を持ち、縁は灰色。尾鰭には3~6本の暗色横帯を持つ。最大体長は約4cmである。
- 近似種との区別** : 第2背鰭と臀鰭の軟条数が8であること、尾鰭に3~6本の暗色横帯を持つこと、第1背鰭棘は糸状に伸長しないことなどにより、沖縄県内に生息する同属他種と区別される。
- 分布の概要** : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島、与那国島から知られる。国内では他に記録はない。国外では台湾、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニア、ミクロネシアのグアム島とコスラエ島に分布する。また、ハワイのオアフ島に移入し、普通種として分布を拡大させている（船舶のバラスト水による移入と考えられている）。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 日本国内では7種のアベハゼ属が知られており、アベハゼを除く6種が沖縄県に分布する。イズミハゼとナミハゼは沖縄島から八重山諸島まで広く分布し、ホホグロハゼを含む残る4種は八重山諸島を中心に分布する。
- 生態的特徴** : 河川汽水域のマングローブや汽水湿地に生息する。大型甲殻類が掘ったと考えられる穴や落ち葉や枝の積もった泥底の水たまりに単独で見られる。ジャノメハゼ、タヌキハゼ、ナミハゼなどと同所的に生息する。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられるが、生活史の詳細は不明。
- 生息地の条件** : 良好な環境が保たれた河川の汽水域のマングローブ林内や汽水湿地に生息する。
- 現在の生息状況** : 沖縄島では1カ所のみから知られるが極めて稀である。八重山諸島でも石垣島の1水系、西表島の2水系、与那国島の1水系からしか見つかっておらず、生息地は局限される。個体数は少ない。
- 学術的意義・評価** : 沖縄県は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。
- 生存に対する脅威** : 分布が非常に局所的であり、生息地は小規模である。浚渫、圃場整備などによる生息地の消失が生

<魚類>

特記事項 : 存に対する脅威となる。
原記載 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Weber, M., 1909. Diagnosen neuer Fische der Siboga-Expedition. Notes from the Leyden Museum, 31: 143-169.
参考文献 : Larson, H. K., 2001. A revision of the gobiid fish genus *Mugilogobius* (Teleostei: Gobioidae), and its systematic placement. Records of the Western Australian Museum Supplement, 62: 1-233.
鈴木寿之, 2015. ホホグロハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 248-249.

執筆者名 : 前田 健

和名 : キバラヨシノボリ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Rhinogobius* sp. YB
方言名 : イーブー (総称)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態 : 体は円筒形で、尾部はやや側扁する。胸鰭軟条数は18~20。体の地色は灰褐色で、体側の各鱗の基部近くに赤色斑を持つ。眼の前端から吻端に向けて、および眼の下端から前上顎骨後端に向けて、それぞれ赤色線が走る。特に沖縄島の数久田川周辺の個体では、後者の赤色線が太く、良く目立つ。類には、細かい赤色点が生ずるが、ほとんどこれを持たない個体もある。西表島には類の赤色点が生ずる個体が多い。雄の第1、第2背鰭の縁および尾鰭の背縁と後縁は黄色または乳白色。臀鰭の縁および尾鰭の腹縁は青白い。雌ではこれらの縁取りの色が薄い。尾鰭中央部の鰭条に沿って赤褐色の細かい斑紋が並び、横帯を形成する。浮遊期の仔魚は黄色い。最大体長は約6 cm。

近似種との区別 : クロヨシノボリに似る。キバラヨシノボリは、胸鰭軟条数がやや少ないこと (クロヨシノボリでは19~22)、体側中央の破線状の黒色縦線がやや不明瞭であること (クロヨシノボリでは明瞭であることが多い)、沖縄島数久田川周辺産では眼の下端からの赤色線が太く明瞭であること、西表島産では類の赤色点の密度が高いことなどによりクロヨシノボリと区別されるが、産地によって特徴が異なり、またクロヨシノボリとの識別が困難な個体も多い。キバラヨシノボリの生息の有無を確認するには、河川内で成長する黄色い浮遊仔魚の存在を確認することが確実である (クロヨシノボリの仔魚は半透明で、基本的に海へ流下して成長する)。

分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、久米島、石垣島、西表島に分布し、県外では鹿児島県の奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島に分布する。琉球列島の固有種である。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : キバラヨシノボリはクロヨシノボリと共通の祖先から分化したと考えられているが、クロヨシノボリが琉球列島のほか、本州、四国、九州にも広く分布するのに対し、キバラヨシノボリの分布は琉球列島に限られる。各島における分布河川もクロヨシノボリに比べて少ない。キバラヨシノボリは滝などの上流部に生息することが多い。西表島ではヒラヨシノボリと同所的に生息し、その場合にはキバラヨシノボリが淵に、ヒラヨシノボリが瀬に住み分けている。沖縄島では、クロヨシノボリなど他のヨシノボリ属が同所的に見つかることもあるが、キバラヨシノボリの生息地は基本的には他のヨシノボリ属が生息しない上流部に限定される。

生態的特徴 : 小河川の上流部に生息する。特に海岸段丘に形成された落差が大きい滝の上流にある、勾配の緩やかな区間に生息地が多い。河川型であり、近縁のクロヨシノボリのように仔魚が海へ出ることはない。クロヨシノボリと共通の両側回遊性の祖先から、滝の上で生活史を完結することにより種分化したと考えられている。沖縄島における産卵期は1~8月で、流れの緩やかな淵の石の下に長径4.3 mm、短径1.4 mmの紡錘型の大きな卵を生みつける。生み出された卵は、孵化まで雄親によって保護される。孵化仔魚は体長5.3 mmで大きな卵黄を持つ。約1週間かけて卵黄を吸収し、その頃に脊索末端の上屈が始まり、背鰭と臀鰭の原基が出現する。仔魚は淵の表層等を遊泳して上流域に留まり、3~4週間で着底する。寿命は雄4年、雌6年である。卵の大きさや孵化仔魚の体長、発育段階などは産地によって異なる場合がある。上記の知見は沖縄島の個体群に関するものである。

生息地の条件 : 無防備な仔魚が遊泳しながら成長するため、仔魚の捕食者がほとんどいない環境が条件となる。生息地の下流側にギンガメアジやユゴイ等の遊泳性魚類や他のヨシノボリ属が遡上し難い規模・形状の滝や段差が必要である。自然度の高い広葉樹林に囲まれた清冽な河川の上流部を好む。

現在の生息状況 : 沖縄島では、ダム建設、河川改修や道路工事、河川周辺の開発などにより、生息環境が悪化し、さらに新たなダム建設により、個体群存続の危機に直面している川もある。グッピーやグリーンソードテール、パールダニオなどの移入種が大量繁殖している生息地もあり、本種への影響が懸念される。久米島と石垣島では、もともと生息地が極めて少なく、そこにダムが建設されたため、個体群の存続が危ぶまれている。西表島では、比較的環境が保たれ、生息状況も安定している場所が多い。

学術的意義・評価 : 河川内で浮遊期を過ごす中卵型ヨシノボリ属の1種であり、進化、生態学的に非常に貴重である。現在のところ、このような生態を持つヨシノボリ類は本種とアオバラヨシノボリの2種しか知られていないが、両者の初期生活史の特性にはさまざまな違いが見られ、さらに地域間でも変異があり、大変興味深い。西表島では各河川で平行進化したことが示唆され、他の島でも同様の可能性が考えられる。また一部の場所では河川争奪などによる移動も推測され、その種分化、進化の過程は、生物の進化、分布域形成に関して重要な知見をもたらすと期待される。

生存に対する脅威 : ダム建設は個体群の消滅をまねく大きな脅威である。特にダム本体の建設と湛水による生息場所の消失と、ダム湖の出現に伴い両側回遊型ハゼ類が陸封されることにより生じる種間競争が、本種の

生存にとって非常に大きな負の要因となる。沖縄島の数久田川や安富祖川では、キバラヨシノボリの良好な生息地にダム建設が進められており、本種個体群への深刻な影響が危惧される。石垣島の個体群はすでにダム建設により壊滅状態となっている。河川改修や砂防ダムの建設、河川周辺の開発により生息環境が悪化した河川もある。浮遊期を河川内で過ごすため、グッピーやグリーンソードテール、パールダニオなどの移入種の増加も脅威となる可能性がある。各河川または各地域で独自に進化したと考えられ、それぞれの個体群が保全単位として貴重である。ダム間をつなぐ導水路によって、別河川の個体が侵入しうる、またはすでに侵入していると考えられ、遺伝的な攪乱が懸念される。

特記事項 : 学名は付けられていないが、一般に *Rhinogobius* sp. YB と呼ばれている。各河川または各地域の個体群がそれぞれ独自に進化したと考えられ、分類の整理が必要である。分布河川的全貌は未解明であり、保全のためには、全ての分布地を把握することとその遺伝的な組成を明らかにすることが急務であろう。

参考文献 : 平嶋健太郎・立原一憲, 2000. 沖縄島に生息する中卵型ヨシノボリ 2 種の卵内発生および仔稚魚の成長に伴う形態変化. 魚類学雑誌, 47: 29-41.

名護博物館, 2012. ロストワールド!? 「轟の滝」上流のキバラヨシノボリ. “発見! 私たちのすむ名護の川と自然—あなたは何本の川を知っていますか?—”, 名護博物館, 名護, 78-80.

立原一憲, 2005. 琉球列島にすむ希少魚. “希少淡水魚の現在と未来: 積極的保全のシナリオ”. 片野修・森 誠一 (編), 信山社, 東京, 297-311.

立原一憲, 2009. 琉球列島の中卵型ヨシノボリ属 2 種: 島嶼の河川で進化してきたヨシノボリ類の保全と将来. 魚類学雑誌, 56: 70-74.

立原一憲, 2015. キバラヨシノボリ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 252-253.

執筆者名 : 前田 健・立原一憲

和名 : ミスジハゼ

分類 : スズキ目 ハゼ科

学名 : *Callogobius* sp.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 頭部は縦扁し、体は円筒形、尾部は側扁する。頭部に多数の皮褶がある。第 2 背鰭は 1 棘 10 軟条、臀鰭は 1 棘 8 軟条。尾鰭は細長く、頭長より長い。胸鰭は頭長とほぼ同じ長さ。左右の腹鰭は癒合して膜蓋を持ち、後縁は丸い。縦列鱗数は 45 以上で、背鰭前方の背面に鱗を有する。体色は、乳白色の地に細かい暗色斑を持つ。第 1 背鰭下の体側、第 2 背鰭基部後端付近の体側、尾鰭基部にそれぞれ 1 本の暗色横帯を持つ。1 本目は第 1 背鰭、2 本目は第 2 背鰭と臀鰭の斑紋にそれぞれつながっている。最大体長は約 5 cm である。

近似種との区別 : 第 2 背鰭軟条数が 10 であることで、本種と同じく河川汽水域に見られるタネハゼ (第 2 背鰭軟条数は 13~15) と容易に識別される。また、左右の腹鰭が癒合し後端が丸いこと、尾鰭が頭長より長いこと、縦列鱗数が 45 以上で、背鰭前方の背面に鱗を有することなどにより国内に分布する同属他種と区別される。

分布の概要 : 沖縄県内では石垣島と西表島からのみ知られている。国外では東南アジアなどに広く分布する可能性があるが、詳細は不明。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : オキナワハゼ属には、インド・西太平洋の温帯から熱帯域に多くの種が知られるが、分類が未解決のものも多い。日本には少なくとも 10 種が分布する。琉球列島を中心とする南日本に分布する種が多いが、八重山諸島に分布が限られるのは本種のみである。サンゴ礁域に住む種が多く、本種とタネハゼのみが河川汽水域に生息する。

生態的特徴 : マングローブ域の軟泥底に住む。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件 : マングローブ域の軟泥底で見つかっているが、詳しい環境条件は不明。

現在の生息状況 : これまでに石垣島の 1 河川および西表島の 3 河川で見つかっているが、生息環境は悪化しており、生息地が消失した場所もある。生息地が極限される上に個体数が少ないため、個体群の存続が危ぶまれる。

学術的意義・評価 : 本種は、1981 年に初めて報告され、1984 年に和名が付けられたが、未だ学名が確定しておらず、未記載種の可能性がある。分布については不明な点が多いが、現在のところ確実な産地は八重山諸島のみである。マングローブ域の生物多様性を構成する重要なメンバーである。

生存に対する脅威 : 分布が局所的であり、またマングローブ域の環境は変化しやすいことから、個体群の存続が危ぶまれる。橋梁建設と道路整備により、生息地が消失または生息環境が著しく悪化した場所が多い。底質の変化にも注意が必要である。

参考文献 : 中坊徹二, 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.

鈴木寿之, 2015. ミスジハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 118-119.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ニセシラヌイハゼ

分類 : スズキ目 ハゼ科

学名 : *Silhouettea* sp.

<魚類>

カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態：体はやや細長い。吻は非常に短い。眼は頭部背面に位置する。項部と腹鰭前方に鱗を欠く。第2背鰭基底は臀鰭基底より明らかに短い。雄は第2背鰭の後端が臀鰭後端近くまで伸長し、一方雌は第1背鰭が烏帽子状に伸長する。体色は淡い黄褐色で、臀鰭の先端側に明瞭な黒色縦帯を持つ。雄の第1背鰭と第2背鰭の先端側に橙色斑が連なる。一方雌では、第1背鰭の後部に明瞭な黒色斑を持ち、腹鰭中央部が黒くなり、脇部に黒色横帯を持つなど、性的二型が顕著である。最大体長は約2.5 cmである。

近似種との区別：ミナミシラヌイハゼに似るが、本種は、項部に鱗を欠くこと（ミナミシラヌイハゼでは鱗に覆われる）、臀鰭先端側に明瞭な黒色縦帯を持つことなどにより区別される。

分布の概要：沖縄県内では、沖縄島、石垣島、西表島に分布する。国内では他に奄美大島と加計呂麻島から知られる。国外にも広く分布する可能性があるが、研究が進んでおらず、不明。

近縁な種及び群との分布状況の比較：日本には少なくとも3種のシラヌイハゼ属が分布し、そのうちニセシラヌイハゼとミナミシラヌイハゼの2種が琉球列島から報告されている。ニセシラヌイハゼは河川の河口域に生息し、ミナミシラヌイハゼはサンゴ礁池に生息する。

生態的特徴：河川河口域の開けた細砂底に生息する。砂に半身を埋めていることが多い。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられるが、生活史の詳細は不明。ヒメハゼ属と同所的に見られるが、本種の生息範囲はヒメハゼ属と比べてかなり狭い。

生息地の条件：河口域の砂底の中でも本種の生息する場所のごく限られた範囲であり、底質の選好性が非常に強いと考えられる。規模が小さく環境の多様性が低い汽水域では、生息に適した環境が存在しない場合が多い。

現在の生息状況：生息が確認されている河川は少なく、生息地は局限される。生息環境が悪化している場所が多い。

学術的意義・評価：シラヌイハゼ属の分類には未解決の点が多く、研究が進められている。本種の学名は未確定であり、海外における分布も不明である。河口域の中で独特のニッチを利用する種である。

生存に対する脅威：本種は底質環境の変化に敏感であると考えられ、河川改修、護岸工事、浚渫、道路建設、農地や工事現場からの土砂流入などの開発の影響を受けやすい。沖縄島における重要な生息河川である大浦川では、本種の生息地に木道が建設され、生息環境の消失が危惧される。また大浦川が注ぐ大浦湾では、米軍基地の建設が進められており、浮遊期の生息環境が失われる可能性がある。

原記載：学名未確定。

参考文献：中坊徹二, 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
鈴木寿之, 2015. ニセシラヌイハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 355.

執筆者名：前田 健

和名：キララハゼ

分類：スズキ目 ハゼ科

学名：*Acentrogobius viridipunctatus* (Valenciennes, 1837)

カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省カテゴリー：絶滅危惧II類 (VU)

形態：頭はやや側扁し、体も側扁した円筒形。背側の鱗は眼の後縁に達する。鰓蓋上部に鱗があり、頬に鱗がない。体色は灰褐色で、頭部と体側に金属光沢のある緑色または紫色の斑点が散在する。眼から上顎と鰓蓋にかけて3本の暗色線がある。鰭に目立つ黒色斑はない。最大体長は約12 cmである。

近似種との区別：同所的に見られることのあるフタスジノボリハゼは、キララハゼと同じく体側に金属光沢のある緑色または紫色の斑点を持つが、それらが体側中央にほぼ一列に並び、赤色斑によって取り囲まれること、キララハゼより体高が低いことなどによって区別される。体型の似るカスミハゼは背鰭と尾鰭に多数の黒色斑を持つこと、ホクロハゼは胸鰭基部上部に大きな黒色斑（中心は青紫色）を持つことなどにより、キララハゼとの識別は容易。

分布の概要：沖縄県内では沖縄島の中城湾沿岸と漫湖にのみ分布する。沖縄島は国内における唯一の生息地である。国外では台湾、中国、フィリピン、マレーシア、インドネシア、タイ、インドなどに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：キララハゼ属のうち、琉球列島における分布が沖縄島に限定される種はキララハゼのみである。

生態的特徴：泥質干潟にU字型の生息孔を掘って生活する。トカゲハゼやトビハゼのように干出時に干潟面に出ることはない。産卵期は4月上旬～6月中旬頃と推定される。卵は生息孔の壁面に産み付けられる。孵化仔魚は全長3 mmで、約2週間の浮遊生活を経て着底すると考えられる。大型の個体はテッポウエビ類と共生していると推察される。

生息地の条件：中城湾ではトカゲハゼと同所的に見られ、漫湖ではトビハゼの生息場所よりもやや地盤高が低い範囲で見つかる。泥質干潟の潮間帯で、底質が膝まで沈む軟泥質である場所を好む。

現在の生息状況：生息状況についてまとまった知見はない。中城湾における主要な生息地は北部の新港地区と南部の佐敷東地区であるが、両地域とも干潟の環境変化が著しい。漫湖では生息地である泥質干潟が縮小していることから、生息個体数も減少傾向にあると推察される。

学術的意義・評価：キララハゼの分布は広いが、沖縄島の生息地は分布の東限にある飛び地であり、沖縄島の個体群は、生物地理や沖縄の地史を考える上で重要である。

生存に対する脅威：埋め立て事業による干潟の消失、および周辺の開発に伴う干潟環境の変化が最大の脅威となる。生息地における個体数は少なくないが、生息環境は過去と比べ、大幅に縮小している。沖縄島では、

これまでに行われた大規模な埋め立て事業により多くの生息地が失われてきたと考えられる。現在の生息地はそれらによって縮小、分断された結果残された貴重な生息地である。佐敷では、砂嘴の移動により、干潟面積が大幅に縮小している。

原 記 載 : Cuvier, G and A. Valenciennes, 1837. Histoire naturelle des poissons, 12. Levrault, Paris.
参 考 文 献 : 細谷誠一, 2003. キララハゼ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), 財団法人自然環境研究センター, 東京, 170-171.
田端重夫, 2014. キララハゼ. “日本産稚魚図鑑 第二版”, 沖山宗雄 (編), 東海大学出版会, 秦野, 1316-1317.

執 筆 者 名 : 前田 健・津波古優子* *前回改訂版 (2005) における津波古による記載内容を一部引用した。

和 名 : コビトハゼ
分 類 : スズキ目 クロユリハゼ科
学 名 : *Parioglossus rainfordi* McCulloch, 1921
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 : 体はやや細長く、側扁する。第 1 背鰭前方に皮質隆起がある。頭部の前眼肩甲管に 5 開孔、前鰓蓋管に 2 開孔がある。左右の腹鰭は分かれ、それぞれ 1 棘 4 軟条。体色は黄褐色で、体側中央の下側を通る暗色縦帯がある。尾鰭基部の中央からその背側にかけて黒色横斑を持つ。最大体長は約 2.5 cm である。

近似種との区別 : 尾鰭基部の中央からその背側にかけて黒色横斑を持つことなどにより、日本に分布する同属他種と識別される。マイコハゼは尾鰭基部に黒色横線を持つが、コビトハゼの斑紋はより太い。またマイコハゼは体側に明瞭な黒色縦帯を持つ。

分布の概要 : 沖縄県内では石垣島と西表島から知られる。他に国内では奄美大島、国外ではフィリピン、パラオ、ボーンペイ、インドネシア、パプアニューギニア、オーストラリアに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : サツキハゼ属にはインド・太平洋に広く分布する種が多い。本種も琉球列島からオーストラリアに至る広い範囲に分布する。

生態的特徴 : 沖縄県内では、河口域のマングローブ湿地で確認されている。水路沿いのヒルギ類の根元の中層付近でミヤラビハゼやボルネオハゼと混泳し、浮遊しながらプランクトンを食べているところが観察されている。夜間や干潮時にはヒルギ類の根の間やカキ殻などの隙間に潜り込んでいる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件 : 詳しい環境条件は不明であるが、環境の良好なマングローブ域の水路が必要と考えられる。

現在の生息状況 : 沖縄県内では石垣島の 1 河川と西表島の 4 河川で確認されているが、いずれの生息地でも確認個体数は数個体であり、生息地の環境は悪化しつつある。それらのうち継続して確認されているのは、西表島の 1 河川のみである。

学術的意義・評価 : 琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威 : 生息地が局所的であり、個体数が極めて少ないため、個体群の存続が危ぶまれる。これまでに本種が確認された河川の多くでは、橋梁建設と道路整備によって生息環境が悪化した。西表島の 1 河川では、人や船舶の出入りが増え、水路沿いのヒルギ類が枯れたり、底質が変化するなど、環境が変化している。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
原 記 載 : McCulloch, A. R., 1921. Notes on, and descriptions of Australian fishes. No. 2. Proceedings of the Linnean Society of New South Wales, 46 (pt.4, no.184): 457-472, Pls.37-41.

参 考 文 献 : 中坊徹二, 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
鈴木寿之, 2015. コビトハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 254-255.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : クサフグ
分 類 : フグ目 フグ科
学 名 : *Takifugu niphobles* (Jordan and Snyder, 1901)
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) (沖縄島のクサフグ)

形 態 : 体長 10 cm。体はやや細長く、断面が円い。鼻腔は露出しない。体背面と腹面を小棘が被うが、体側にはない。生時の体色は、ややくすんだ緑色で腹面が白い。体背面に小白色斑が散在し、背鰭基底下に 1 黒色鞍状斑がある。虹彩は赤橙色で、背鰭と胸鰭がくすんだ黄色。尾鰭は黄色を呈する。

近似種との区別 : 同所的に生息するオキナワフグとは、体色から識別可能。

分布の概要 : サハリン、朝鮮半島、黄海、渤海、中国の南シナ海と東シナ海、台湾に分布。日本では、北海道南部から九州南岸に広く生息。琉球列島では屋久島、種子島、奄美大島、沖縄島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県内では、オキナワフグが八重山諸島から沖縄諸島に広く分布するのに対し、本種の分布は沖縄島の特定の湾に限られている。

生態的特徴 : 本州の個体群では、初夏の満月と新月の満潮時に磯海岸に集団で来遊し、波打ち際に産卵する特異

<魚類>

- な繁殖習性が知られている。しかし、沖縄島個体群ではそのような産卵行動は確認されておらず、
解明が望まれる。
- 生息地の条件 : 内湾の波打ち際から河川汽水域に生息する。
- 現在の生息状況 : 沖縄島の大浦湾、金武湾、中城湾に生息。近年減少傾向にある。
- 学術的意義・評価 : 琉球列島の個体群は、動物地理学的に貴重であり、九州以北や中国大陸沿岸の集団との遺伝学的検討が必要である。
- 生存に対する脅威 : 分布が限られているにもかかわらず、中城湾では多くの生息場所が埋め立てにより消失し、現在も大規模な埋め立てが進行中である。また、大浦湾でも米軍施設の移転に伴う大規模埋立てが計画されている。
- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
- 原記載 : Jordan, D. S. and J. O. Snyder, 1901. A review of the gymnodont fishes of Japan. Proc. U. S. Natl. Mus., 24(1254): 229-264.
- 参考文献 : 瀬能 宏, 2015. 沖縄島のクサフグ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 406-407.
- 執筆者名 : 立原一憲

4) 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 和名 : タナゴモドキ
分類 : スズキ目 カワアナゴ科
学名 : *Hypseleotris cyprinoides* (Valenciennes, 1837)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
- 形態 : 体は側扁し、体高が高い。口は小さい。左右の腹鰭は分離する。体色は灰褐色または黄褐色で、体側中央のやや下寄りに暗色縦帯を持つ。雄の第1背鰭、第2背鰭は黒っぽく、そこに白色斑が散在する。腹鰭は基部側が黄色く中央部が赤色、縁は白い。雌の鰭には明瞭な模様が少ない。最大体長は約6 cm。
- 近似種との区別 : 国内に類似の種は分布しない。
- 分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島から報告がある。国内では他に和歌山県、高知県、宮崎県、奄美大島で記録されている。国外では、台湾、フィリピン、インドネシア、ミクロネシア、南アフリカ、マダガスカル、レユニオン島、パプアニューギニア、バヌアツ、ニューカレドニア、フィジー、サモアなどに分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : タナゴモドキ属はオーストラリアで多くの種に分化しており、それらのほとんどはオーストラリア固有である。本種はそれらとは対照的に分布が広い。
- 生態的特徴 : 河川淡水域下流部や水田周辺の用水路等に生息する。川岸に水生植物が繁茂する流れの緩やかな場所で、中層を遊泳する。危険を察知すると植物の茂みの間に逃げ込む。倒木や水生植物の茎などの表面に付着卵を生みつける。1回の産卵数は数万個に達する。卵は、長径・短径とも約0.3 mmで球形に近い。孵化仔魚は全長約1.2 mmで、体の各部分はきわめて未発達。両側回遊性で、仔魚は海で浮遊期を過ごす。河川加入直前と考えられる体長8.4 mmの後屈曲期仔魚が沖縄島の海岸で採集されている。河川淡水域で見られる約1 cmの個体は、体高が低いが、成魚と似た形態を示す。沖縄島、石垣島、フィリピンのルソン島の個体群間で遺伝的な分化は認められず、仔魚は浮遊期に広範囲に分散し、例えばフィリピンで生まれた仔魚が琉球列島の河川に加入し得ると考えられる。
- 生息地の条件 : 川岸にシマツユクサやセイコノヨシ等の水生植物が繁茂する、流れの緩やかな場所に生息する。植生のある水田の用水路や湿地にも住む。大きな堰の上流には生息しない。
- 現在の生息状況 : 沖縄島では多くの河川で確認されているが、生息状況は不安定である。浚渫により生息環境が失われることが多く、恒常的に生息する場所はない。かつては低地部に湿地や水田があり、そこにも多く生息していたと考えられるが、現在ではそのような環境はほとんど残されていない。宮古島には生息可能な環境がほとんど残されていない。石垣島においても生息環境は減少している。西表島では、圃場整備や道路の建設等により生息地であった湿地や水路が失われ、生息地が減少している。
- 学術的意義・評価 : タナゴモドキ属は卵サイズや仔魚の生息環境が種ごとに異なり、その生活史の進化は非常に興味深い。タナゴモドキはその系統の中で最も基部で分岐した種と考えられる。本種の仔魚は広域に分散すると考えられており、分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。
- 生存に対する脅威 : 河川におけるタナゴモドキの生息地は集落に近く、水害防止を目的とした河川改修や浚渫により生息環境が失われることが多い。特に水生植物が繁茂すると浚渫が行われることが多く、それにより本種の恒常的な生息が妨げられている場所が多い。また低地部の湿地や水田は大幅に減少しており、また水田の用水路がコンクリートで固められた水路となり、生息地が失われる例も多い。堰等の建設も生息可能な範囲を縮小させる要因となる。また、タナゴモドキの生息地にはカワスズメやグッピー等の移入種が生息することが多い。直接的な影響は不明であるが、生息環境などをめぐる競争が起こっている可能性がある。
- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Data Deficient (DD)。

- 原 記 載 : Cuvier, G and A. Valenciennes, 1837. Histoire naturelle des poissons, 12. Levrault, Paris.
 参 考 文 献 : 道津喜衛・前田 健, 2014. タナゴモドキ. “日本産稚魚図鑑 第二版”, 沖山宗雄 (編), 東海大学出版会, 秦野, 1225-1227.
 道津喜衛・鈴木寿之・柳 昌之, 1998. タナゴモドキ (ハゼ科魚類) の採卵, 卵内発生, 仔魚. 長崎県生物学会誌, 49: 15-21.
 鈴木寿之, 1998. タナゴモドキ. “日本の希少な野生生物に関するデータブック”, 水産庁 (編), 日本水産資源保護協会, 東京, 188-189.
 立原一憲, 2005. 琉球列島にすむ希少魚. “希少淡水魚の現在と未来: 積極的保全のシナリオ”, 片野 修・森 誠一 (編), 信山社, 東京, 297-311.
 Thacker, C. and P. J. Unmack, 2005. Phylogeny and biogeography of the eleotrid genus *Hypseleotris* (Teleostei: Gobioidae: Eleotridae), with redescription of *H. cyprinoides*. Records of the Australian Museum, 57: 1-13.
 富田峻平・松崎章平・岡慎一郎・戸田 実・今井秀行, 2016. 絶滅危惧種タナゴモドキ集団の高い遺伝的多様性と遺伝的均一性. 魚類学雑誌, 63: 27-32.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : タメトモハゼ
 分 類 : スズキ目 カワアナゴ科
 学 名 : *Giuris* sp. 2
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 : 頭部は縦扁し、両眼は広く離れる。体は円筒形で、尾柄はやや側扁する。眼窩上縁の鱗は1列。体の地色は灰褐色で、黄色または緑色を帯びることも多い。腹面は白い。後頭部から項部に小黑点が散在する。頬から鰓蓋にかけて3本の紫色の縦線を持つ。胸鰭基部は黄色く、中央を1本の紫色縦線が横切る。体側中央に沿って暗色斑が並ぶ。その少し下方にも小さい暗色斑が並ぶことがあるが、尾部まで続く連続した縦帯にはならない。婚姻色の雄では、体側に黄色や水色の斑紋が散在する。婚姻色の雄の臀鰭には基部近くに黄色縦線があり、さらに基部が赤いが、先端近くには黄色縦線はない。雌の臀鰭には目立つ模様はない。大型個体は体長20 cmを超える。

近似種との区別 : ゴシキタメトモハゼと似るが、タメトモハゼは眼窩上縁の鱗が1列であること (ゴシキタメトモハゼでは複数列または点列)、体側下部に暗色斑の列を持つことがあっても、まばらで尾柄部には達しないこと (ゴシキタメトモハゼは体側下部に躯幹部から尾柄まで続く暗色縦帯を持つ)、婚姻色の雄の腹鰭の縁が黄色くならないこと (ゴシキタメトモハゼでは黄色くなる) などにより区別される。

分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、渡嘉敷島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島から報告がある。国内では他に静岡県、種子島、屋久島、奄美大島、徳之島で記録されている。国外では台湾やフィリピンのほか西太平洋に広く分布すると考えられるが、分類が整理されておらず、正確な分布域は不明である。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 国内ではゴシキタメトモハゼの分布域と概ね重複するが、ゴシキタメトモハゼより個体数が多く、確認例も多い。

生態的特徴 : 河川淡水域下流部から中流部の淵に生息する。川岸に水生植物が繁茂する場所や倒木などのある場所に多い。また樹木に覆われた淵でも良く見つかる。1~10個体ほどでやや間隔を空けて、中層や底で静止していることが多いが、危険を察知すると非常に俊敏に泳ぎ、植生の中や落ち葉の積もった中などに一瞬で姿をくらます。落下昆虫や水生昆虫、巻貝、甲殻類などを食べる。産卵習性は不明。両側回遊性で、仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。河川淡水域で河川加入直後と考えられる体長1.1 cmのタメトモハゼ属の個体が採集されている。この発育段階における種の同定は困難であるが、タメトモハゼもゴシキタメトモハゼも体長約1 cmで河川に加入し着底すると推測される。

生息地の条件 : 川岸にシマツユクサやセイコノヨシ等の水生植物が繁茂する、流れの緩やかな淵、または樹木に覆われた淵を好む。大きな堰の上流には生息しない。

現在の生息状況 : 沖縄島では多くの河川で確認されているが、生息状況は不安定である。個体数の年変動が大きい。浚渫により生息環境が失われることが多い。渡嘉敷島や久米島、宮古島、与那国島ではもともと生息地が少ない。石垣島や西表島においても良好な生息環境は減少している。

学術的意義・評価 : 分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威 : 河川における本種の生息地は集落に近く、水害防止を目的とした河川改修や浚渫により生息環境が失われることが多い。特に水生植物が繁茂すると浚渫が行われることが多く、それにより本種の恒常的な生息が妨げられている場所が多い。堰等の建設も生息可能な範囲を縮小させる要因となる。

特記事項 : 分類学的問題が未解決で、学名は未確定である。鈴木ほか (2004) では *Ophieleotris* sp. A、中坊 (2013) では *Ophieleotris* sp. 1 と表記されている。

- 参 考 文 献 : 前田健, 2014. タメトモハゼ属の1種. “日本産稚魚図鑑 第二版”, 沖山宗雄 (編), 東海大学出版会, 秦野, 1227-1228.
 中坊徹二, 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
 鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾, 2004. 決定版日本のハゼ. 平凡社, 東京.
 鈴木寿之・坂本勝一・瀬能 宏, 2005. 絶滅の危機に瀕するハゼ亜目魚類2種に対する新標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 53: 198-200.
 立原一憲, 2015. タメトモハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 228-229.

執筆者名：前田 健

和名：ヤエヤマノコギリハゼ
分類：スズキ目 カワアナゴ科
学名：*Butis amboinensis* (Bleeker, 1853)
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態：頭部は縦扁し、吻が著しく尖る。体は円筒形で、尾柄は細い。体側に副鱗 (Auxiliary scale) を持たない。眼と眼窩縁の隆起線との間に鱗をほとんど持たない。間鰓蓋骨上に鱗を持たない。上顎骨の後端は眼の中央下に達しない。胸鰭鰭条数は17~19。左右の腹鰭は分離する。体色は、褐色の地に黒色や橙色の点が散在する。尾鰭は褐色であるが、上部後方は透明。最大体長は約7 cm。

近似種との区別：独特の体型により、国内産の他のハゼ類との識別は容易である。ヒトミハゼやコンジキハゼも吻が尖るが、左右の腹鰭が癒合して吸盤状となる。

分布の概要：沖縄県内では石垣島と西表島に生息するほか、沖縄島でも1個体の採集記録がある。国内では他に高知県、屋久島、奄美大島から記録があるが、いずれも稀。国外では、台湾、フィリピン、インドネシア、シンガポール、アンダマン諸島、ニューギニア島、ソロモン諸島、オーストラリア、フィジーに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ノコギリハゼ属はインド・西太平洋に5~6種が知られ、ヤエヤマノコギリハゼは日本に分布する唯一の種である。

生態的特徴：河川汽水域に生息する。川岸にアダンやヒルギ類が繁茂する場所に生息し、水没したアダンの葉や幹、ヒルギ類の支柱根の下側に腹部を上にして貼りついていることが多い。遊泳の際には仰向けまたは逆立ちの状態泳ぐことも多い。動物食である。産卵習性は不明。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。仔魚の形態は不明であるが、タイにおける同属他種の研究から、体長1 cm未達で着底すると推測される。

生息地の条件：植生の豊富な、自然な川岸が残された汽水域が必要である。特にアダンの生い茂る環境を好む。

現在の生息状況：沖縄島では偶発的な出現に留まり、定着していないと考えられる。石垣島では生息環境が悪化し、個体数が減少している。西表島における生息環境は比較的安定している場所が多いようであるが、環境が悪化した場所もある。

学術的意義・評価：汽水域の生物多様性を構成する貴重な一員である。分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。仰向けで定位する独特な習性も興味深い。

生存に対する脅威：本種が生息するアダンなどが茂った場所は河川の中でも限定されるため、もともと個体数は多くない。その限定的な環境が河川改修、道路建設などで失われると生息が困難となる。船の航行により、川岸の植生に影響が出ている場所もあり、本種への影響が懸念される。

特記事項：IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載：Bleeker, P., 1853. Vierde bijdrage tot de kennis der ichthyologische fauna van Amboina. *Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 5: 317-352.

参考文献：立原一憲, 2015. ヤエヤマノコギリハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 102-103.

執筆者名：前田 健

和名：ヒゲワラスボ
分類：スズキ目 ハゼ科
学名：*Trypauchenopsis intermedia* Volz, 1903
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：体は非常に細長く、円筒形。眼は小さい。頭部は多数の鬚状突起に覆われる。背鰭は1基で基底が長く、普通6棘28~35軟条。臀鰭も基底が長く、27~33軟条。胸鰭は16~19軟条。脊椎骨数は26~28。鱗を欠く。全身が赤い。最大体長は約10 cmである。

近似種との区別：頭部が多数の鬚状突起に覆われることなどにより、チワラスボ属と識別される。

分布の概要：沖縄県内では沖縄島、久米島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島から知られる。国内では他に高知県、屋久島、奄美大島、徳之島から報告がある。国外ではフィリピン、インドネシア、グアム、ポーンペイ、南アフリカなどに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ヒゲワラスボ属にはヒゲワラスボ1種が知られているが、実際には複数種が存在すると考えられる。各種の分布は不明。

生態的特徴：汽水域や内湾の軟泥底から採集される。雌は約3 cmで成熟する。産卵習性は不明。仔魚は海で約1カ月の浮遊期を過ごし、沖縄島では6~1月に体長8~10 mmで河川に加入する。

生息地の条件：軟泥底に住む。マングローブを伴う、自然な地形が残された汽水域で見つかることが多い。

現在の生息状況：本種は泥中に潜み、発見が容易ではないことから生息状況を把握することが難しいが、同様に泥中に潜むチワラスボ属やアサガラハゼと比べて仔魚の出現頻度は高い。比較的広く分布するものの、汽水域の環境は開発や河川改修により改変されやすく、内湾の干潟も埋め立て等の開発により縮小を続けていることから、本種の個体群も大幅に減少していると推測される。

- 学術的意義・評価 : 泥干潟の生物多様性を構成する重要なメンバーである。本種の生態はほとんど不明であるが、泥の中でどのように生活し、繁殖しているのか非常に興味深い。
- 生存に対する脅威 : 河川改修や護岸工事、浚渫、道路建設など、河川河口域の環境改変や干潟の埋め立てなどにより、生息地が失われることが多いと考えられる。また上流部における農地開発や建物や道路の建設などにより汽水域に赤土が流入し、干潟の底質が変化すると本種は生息不可能となる。
- 特記事項 : ヒゲワラスポには複数種が混同されていると考えられ、分類の研究が進められている。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
- 原記載 : Volz, W., 1903. Neue Fische aus Sumatra. Zoologischer Anzeiger, 26(703): 553-559.
- 参考文献 : Maeda, K. and K. Tachihara, 2014. Larval fish fauna of a sandy beach and an estuary on Okinawa Island, focusing on larval habitat utilization by the suborder Gobioidae. Fisheries Science, 80: 1215-1229.
- Shibukawa, K. and E. O. Murdy, 2012. A redescription of the eel goby *Trypauchenopsis* (Gobiidae: Amblyopinae) with comments on relationships. Copeia, 2012: 527-534.
- 立原一憲, 2015. ヒゲワラスポ, “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 312-313.

執筆者名 : 前田 健

和名 : **ヨロイボウズハゼ**
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Lentipes armatus* Sakai and Nakamura, 1979
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態 : 頭部はやや縦扁する。上顎が下顎より前に突出し、口は下付き。雌は上顎に三尖頭の櫛状の歯、下顎に唇歯を持つ。雄では、上顎の三尖頭の歯、下顎の唇歯はそれぞれ中央部分に限られ、後方に犬歯状の歯を持つ。雄は躯幹部側面に大きな棘のある櫛鱗を持ち、雌ではこの部分は主に円鱗に覆われる。腹鰭は肉質の丸い吸盤状で、吸着力が強い。雄の体色は灰色で、腹部側面に3本の黒色横線、第2背鰭前方に1個(稀に2~3個)の黒色点を持つ。婚姻色の雄の吻と腹は空色を呈し、尾柄や背鰭の縁辺は白くなる。頭部と尾部、第2背鰭、腹鰭が赤色を呈する個体も稀に見られる。雌の体は透明感のある淡い灰色。最大体長は約5 cm。

近似種との区別 : 雌はカエルハゼ、アカボウズハゼ、ヒノコロモボウズハゼと似るが、三尖頭の歯と唇歯を持ち、犬歯状の歯を持たないこと、躯幹部側面が円鱗に覆われること(アカボウズハゼは櫛鱗を持ち、他の2種では無鱗)などにより識別可能。体型、体色も若干異なる。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島に分布する。他に、国内では種子島、屋久島、奄美大島から報告がある。かつては琉球列島固有種とされていたが、近年台湾からも報告された。東南アジアにも分布する可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヨロイボウズハゼ属の分類の全貌は未解決であり、東南アジアでは多くの種が記載されているが、各種の分布に関しては断片的な情報しかない。本種はヨロイボウズハゼ属の中で最も北に分布する。

生態的特徴 : 両側回遊性と考えられる。海で浮遊期を過ごした仔魚は、体長約1.2~1.4 cmで河川に加入する。瀬の中でも特に流れの早い場所に生息する。水深10 cm未満の浅い瀬にも、100 cmを超える深い場所にも生息するが、流れの弱い場所には見られない。砂防ダムや滝の上流にも生息する。食性の詳細は不明であるが、雑食と考えられ、水槽内では付着藻類と昆虫の両方を食べる。

生息地の条件 : 本種の恒常的な生息には、自然な地形の残された溪流環境が不可欠である。

現在の生息状況 : 沖縄島北部では多くの川で見つかっているが、恒常的に見られる場所は限られる。当歳魚と考えられる小型個体は高密度に生息することもあるが、多くの場所で生息状況は不安定であり、翌年には見られなくなる場合もある。石垣島、西表島においても個体数は多くない。

学術的意義・評価 : ヨロイボウズハゼ属の分類は未解決である。ボウズハゼ類は、熱帯島嶼河川の淡水域に限られた環境でニッチを分けて、多くの属、種に分化しており、生態学的に興味深い。また、ヨロイボウズハゼ属は、海洋島を含むインド・太平洋の広い範囲に分布するが、分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。石垣島の荒川が本種のタイプ産地である。

生存に対する脅威 : 河川の浚渫、護岸改修により生息地が破壊される例がある。特に流れの速い場所を好む本種の生息には淵と瀬のメリハリのある河川地形が必須であり、平坦に均された川には生息が不可能である。河川の直線化も、生息可能な環境を消失させる要因となる。河川改修、砂防ダムの建設、農地開発、森林伐採、林道建設等により河川に土砂が流入すると、生息条件が悪化する。

原記載 : Sakai, H. and M. Nakamura, 1979. Two new species of freshwater gobies (Gobiidae: Sicydiaphiinae) from Ishigaki Island, Japan. Japanese Journal of Ichthyology, 26: 43-54.

参考文献 : Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. Société Française d'Ichthyologie, Paris.

酒井治巳, 1981. 生臭でも坊主は坊主. 淡水魚, 7: 133-139.

執筆者名 : 前田 健

和名 : **アカボウズハゼ**
 分類 : スズキ目 ハゼ科

〈魚類〉

学 名 : *Sicyopus zosterophorus* (Bleeker, 1856)

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧IA類 (CR)

形態 : 唇は厚く、上唇の中央に切れ込みを持たない。口は下付き。上顎と下顎に犬歯状の歯を持ち、櫛状の歯や唇歯を持たない。雄は淡灰色の地に通常5本の暗色横帯を持ち、尾部は赤みを帯びる。また眼の下に黒色横斑を持つ。婚姻色の雄は、尾部の赤色が鮮やかになり、背面は輝緑色を呈する。雌は全身淡褐色で、体側の鱗は黒く縁取られる。最大体長は5.5 cm。

近似種との区別 : 雌はヒノコロモボウズハゼ、ヨロイボウズハゼ、カエルハゼと似るが、軀幹部体側が黒く縁取られた櫛鱗に覆われることにより識別可能。しかし、小型個体では確認が難しいので注意が必要である。

分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島に分布する。国内では他に種子島、屋久島、奄美大島、国外では台湾、広東省(中国)、フィリピン諸島、インドネシア、パラオ、パプアニューギニア、ソロモン諸島、バヌアツ、ニューカレドニア、フィジー、クイーンズランド(オーストラリア)に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : アカボウズハゼ属の中で最も広範囲に分布する。同属のヒノコロモボウズハゼはオセアニアには分布しない。沖縄県内では、ヒノコロモボウズハゼより生息個体数が多い。

生態的特徴 : 両側回遊性であり、海で約2カ月の浮遊期を過ごし、体長1.3~1.4 cmで河川に加入する。主に小河川の上流域にある流れのゆるやかな淵に生息し、滝や砂防ダムの上流で見られることが多い。ただし稚魚は比較的下流で見つかることもある。中層を遊泳することも多い。動物食で、水生昆虫や甲殻類を食べる。

生息地の条件 : 本種の恒常的な生息には、自然な地形の残された溪流環境が不可欠である。滝などの上流で、ユゴイ類などの中層遊泳性魚類が生息せず、他のボウズハゼ類が少ない環境に多い。本種はボウズハゼ類の中で最も上流に分布する種の一つである。

現在の生息状況 : 沖縄島北部では多くの川で見つかっているが、恒常的に見られる場所は限られ、多くの場所で生息状況は不安定である。個体数に変動が大きく、大型個体が常に見られる場所はほとんどない。石垣島と西表島においては比較的安定して高密度に生息する河川があるが、生息環境は悪化しており、個体数が減少している。

学術的意義・評価 : ボウズハゼ類は、熱帯島嶼河川の淡水域の限られた環境でニッチを分けて、多くの属、種に分化しており、生態学的に興味深い。本種の分布域は広いが、西太平洋と南太平洋の個体群間には遺伝的な分断が認められ、生物地理学的に重要である。また分布の縁辺にあたる琉球列島における本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威 : ある程度落差のあるダムの上流にも遡上するが、ダムの規模や構造によっては遡上が不可能となり、生息が妨げられる。河川改修、農地開発、森林伐採、道路や建物の建設等により河川に土砂が流入すると、生息条件が悪化する。捕食者のいない滝や堰の上流は、アカボウズハゼの典型的な生息環境であるが、グッピーやグリーンソードテールのような移入種が大繁殖することがあり、アカボウズハゼへの影響が危惧される。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Bleeker, P., 1856. Nieuwe bijdrage tot de kennis der ichthyologische fauna van Bali. *Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 12: 291-302.

参考文献 : Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. *Société Française d'Ichtyologie*, Paris.

Taillebois, L., K. Maeda, S. Vigne and P. Keith, 2012. Pelagic larval duration of three amphidromous Sicydiinae gobies (Teleostei: Gobioidi) including widespread and endemic species. *Ecology of Freshwater Fish*, 21: 552-559.

Taillebois, L., H. Tabouret, C. Pecheyran and P. Keith, 2015. Inputs from microchemistry to the understanding of three Sicydiinae species' life cycle. *Life and Environment*, 65: 73-84.

Taillebois, L., M. Castelin, J. R. Ovenden, C. Bonillo and P. Keith, 2013. Contrasting genetic structure among population of two amphidromous fish species (Sicydiinae) in the central west Pacific. *Plos One*, 8: e75465.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ミナミヒメミズハゼ

分類 : スズキ目 ハゼ科

学名 : *Luciogobius ryukyuensis* Chen, Suzuki and Senou, 2008

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 体は円筒形で非常に細長い。尾部は側扁し、頭部は縦扁する。成熟オスの頭部は左右に張り出す。背鰭は1基で、腹鰭は小さい。胸鰭の最上部の軟条の先はわずかに遊離する。鱗を欠く。背鰭は1棘9~11軟条、臀鰭は1棘9~12軟条、胸鰭は15~18軟条、腹鰭は1棘5軟条、脊椎骨数は37または38。体は黄褐色で、顕著な斑紋はない。最大体長は約6 cmである。

近似種との区別 : ミミズハゼに似るが、胸鰭上部の遊離軟条が小さく(ミミズハゼでは長く明瞭)、背鰭、臀鰭、胸鰭の鰭条数のモードが異なる(ミミズハゼでは、背鰭1棘11~13軟条、臀鰭1棘12~13軟条、胸鰭17~19軟条)。ミミズハゼは沖縄県には分布しない。

分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、久米島、石垣島、西表島に分布する。沖縄島における分布河川は北部に限られ、西海岸では名護市、東海岸では金武町が南限である。国内では他に奄美大島と加計呂麻島に分布する。日本固有種とされ、国外からは知られていない。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ミミズハゼ属の分類には未解決の問題が多く、分布に関しても研究が必要である。

沖縄島には本種の他に少なくとも1種のみミズハゼ属が河川淡水域に生息し、さらに約10種が河口周辺を中心とした岩礫海岸に生息すると考えられる。石垣島と西表島、久米島では、本種以外のミズハゼ属は見つかっていない。一方、宮古島では複数種のみミズハゼ属が見つかっているが、ミナミヒメミズハゼは生息しない。

生態的特徴 : 礫底の瀬（汽水域では干潮時に瀬になる場所）に生息する。日中は底質間隙中に潜んでいるが、夜には間隙中から出てくることも多く、比較的目に付きやすい。沖縄島における産卵期は12～3月。卵は細長く、長径2.0～2.6 mm、短径0.6～0.8 mm。孵化仔魚は脊索長2.8～3.3 mmで橙赤色の卵黄を有し、直ちに海へ流下する。約1ヵ月の浮遊期を海で過ごした後、体長10～12 mmで河川に加入する。着底後の未成魚は、春から秋まで汽水域上流部から淡水域下流部にかけて分布し、成長する。多くの個体は冬までに体長3 cmを超え、成熟する。産卵期になると、汽水域の干潮時に瀬になる場所に集まり産卵する。産卵場は普通1ヵ所で、着底後の生息域の最下流部にあたる。卵は石の下に単層に産み付けられ、雄により孵化まで保護される。1卵塊あたりの卵数は200～1,400。産卵を終えた成魚は淡水域へ移動する。寿命は不明であるが、少なくとも2年は生きると推測される。

生息地の条件 : ミミズハゼ属は一般に湧水のある礫底間隙を好み、本種も間隙が多く流れのある礫底を必要とする。汽水域上流部から淡水域下流部の環境が良好に保たれていることが条件となる。底質中に潜むため、特に底質の変化に敏感と考えられる。また、遡上力は弱く、30～50 cm程度の小さな堰や段差でもその上流には生息しない。産卵場がほぼ1ヵ所に限られるため、本種の保全にはその環境の維持が重要である。ナガノゴリと産卵期や産卵場が重複し、ナガノゴリは大きな石を産卵床として利用し、ミナミヒメミズハゼはナガノゴリが利用しない小さい石を産卵床とする。仔稚魚期を過ごす海域の環境も重要と考えられる。

現在の生息状況 : 沖縄島では、浚渫による生息環境の破壊や、土砂の流入による底質の変化、取水による河川流量の減少、堰の建設などの影響を受け、生息に適した環境が減少しており、個体群は大幅に縮小していると考えられる。沖縄島における本種の分布は北部に限られ、開発の進んだ中南部には生息しないが、過去に中南部に生息していたかどうかは不明である。久米島における生息地は1ヵ所しか知られておらず、その個体群は非常に小規模である。下流部の環境改変と流域における農地開発が著しく、危機的な状況にある。石垣島における状況は不明。西表島における生息地は3河川しか知られていない。いずれも小規模で、生息環境は悪化している。

学術的意義・評価 : ミミズハゼ属は分類が未解決で多数の未記載種を含むとされ、琉球列島産の種についても研究が進められている。浮遊期の分散が限定的であることが示唆され、仔魚の分散や種分化に関する研究に貴重な知見を提供すると考えられる。また細長い体で底質間隙中に潜む独特の習性を持ち、生態学的にも興味深い。西表島の河川が本種のタイプ産地である。

生存に対する脅威 : 河床の浚渫や改修工事により、生息地が直接的に攪乱される例が多い。本種は底質間隙中に生息するため底質環境の変化に著しく弱いと考えられる。農地開発や建物、道路等の工事による土砂の流入、取水による流量の減少は、底質を変化させ、本種個体群に大きな打撃を与える。堰や段差の建設は、生息区間を縮小させる。仔魚の生息環境となる河口周辺の環境改変も本種の生存に対する脅威となる。久米島、西表島等の小規模個体群は特に危機的と考えられる。ミミズハゼ属は、浮遊期の分散範囲が比較的狭いと考えられ、島嶼間の遺伝的交流の可能性は低い。一度個体群が消滅すれば、他地域から仔魚が加入する機会はほとんどないと考えられる。

原記載 : Chen, I-S., T. Suzuki and H. Senou, 2008. A new species of gobiid fish, *Luciogobius* from Ryukyus, Japan (Teleostei: Gobiidae). *Journal of Marine Science and Technology*, 16: 248–252.

参考文献 : Kondo, M., K. Maeda, N. Yamasaki and K. Tachihara, 2012. Spawning habitat and early development of *Luciogobius ryukyuensis* (Gobiidae). *Environmental Biology of Fishes*, 95: 291–300.
前田 健, 2015. ミナミヒメミズハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 318-319.
前田 健, 2016. 両側回遊とは? バリエーションから考える. *海洋と生物*, 38: 350-355.
Maeda, K., N. Yamasaki, M. Kondo and K. Tachihara, 2008. Occurrence and morphology of larvae and juveniles of six *Luciogobius* species from Aritsu Beach, Okinawa Island. *Ichthyological Research*, 55: 162–174.

執筆者名 : 前田 健

和名 : カブキハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Eugnathogobius mindora* (Herre, 1945)
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) **環境省カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 体は細長く、やや側扁した円筒形。吻は丸い。雄は、第1背鰭が三角形で先端が尖る。体色は淡い褐色で、吻側面から眼の下、頬に5本の上後方に向かう暗褐色の斜線模様を持ち、鯉蓋の縁に沿って黒点が並ぶ。第1背鰭には3～4本の暗褐色線を持ち、その間は黄色い。臀鰭の縁は白い。雄の尾鰭基部は黄色い。最大体長は約3 cmである。

近似種との区別 : スナゴハゼ属に似るが、スナゴハゼ属では吻が丸く前方に突出するのに対し、本種の吻は丸みを帯びるものの前方に突出しない。また、頭部や鰭の模様の違いによっても容易に識別されるが、小型であるため、慎重な観察が必要である。

分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、久米島、西表島から知られる。国内では他に記録はない。国外ではフィリピン、タイ、インドネシア、オーストラリア、フィジーに分布する。

〈魚類〉

- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 本種を含むカブキハゼ属には、インド太平洋各地から約8種が知られるが、日本で報告があるのは本種のみである。
- 生態的特徴** : 河川汽水域のマングローブの林床に生息する。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる、生活史の詳細は不明。
- 生息地の条件** : 詳細な条件は不明であるが、良好な環境が残されたマングローブに生息すると考えられる。干潮時にマングローブの林床にある水たまりなどで見つかることから、乾燥化が進んだマングローブには生息しない可能性がある。
- 現在の生息状況** : 国内における本種の分布は、2008年に初めて報告された。これまで本種の生息が確認されている河川は多くないが、小型で目立たないことから見つかりにくく、今後、確認河川が増える可能性がある。しかし、その一方で生息に適した環境は失われつつあると考えられる。
- 学術的意義・評価** : 沖縄県は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。
- 生存に対する脅威** : 汽水域の環境は、河川改修、護岸工事、浚渫、道路建設など開発の影響を受けやすく、本種の生存への脅威となっている。また、遷移によりマングローブが乾燥化すると生息が困難になると考えられる。
- 特記事項** : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
- 原記載** : Herre, A. W. C. T., 1945. Notes on fishes in the Zoological Museum of Stanford University. XIV. - A new genus and three new species of gobies from the Philippines. Proceedings of the Biological Society of Washington, 58: 11-15.
- 参考文献** : 鈴木寿之, 2015. カブキハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 356.
鈴木寿之・大迫尚晴・瀬能 宏, 2008. 日本初記録のハゼ科魚類カブキハゼ (新称). 日本生物地理学会会報, 63: 81-86.
- 執筆者名** : 前田 健

和名 : マングローブゴマハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Pandaka lidwilli* (McCulloch, 1917)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態** : 体は太短く、胸鰭基部における体高は体長の21~24%。第2背鰭と臀鰭は棘を欠き、7軟条を有する。体は透明感のある淡黄褐色で、暗色斑が散在する。尾部腹面に4個の黒色斑を持つ。第1背鰭前半(第1~3棘周辺)が黒く、後半は黄色い。最大体長は1.5 cm。
- 近似種との区別** : ミツボシゴマハゼに似るが、本種は体高が低いこと(ミツボシゴマハゼの体高は体長の24~29%)、第1背鰭前半の黒色斑が先端部に達し、白色斑を欠くこと(ミツボシゴマハゼは先端部に白色斑を持つ)、腹鰭および腹鰭基部周辺に黒色素胞を持たないこと(体長1 cm以上のミツボシゴマハゼの腹鰭第1軟条基部周辺は黒い)などにより識別される。ヒナハゼの小型個体が混同されることがあるが、本種の第1背鰭前半が黒いことに対し、ヒナハゼでは第1背鰭の後半部に黒色斑を持つ。
- 分布の概要** : 沖縄県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に分布する。国内では他に記録はない。国外では、アンダマン海とオーストラリアから知られる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : マングローブゴマハゼは、近縁のミツボシゴマハゼと比べて生息河川が少なく、同じ河川の中でも生息範囲が限られる。ミツボシゴマハゼは国内では奄美大島から与那国島までの琉球列島、国外ではフィリピンに分布する。
- 生態的特徴** : 河川汽水域のマングローブに接する軟泥底の環境に生息する。沖縄島における産卵期は3~10月と考えられる。仔魚は海で約1ヵ月の浮遊期を過ごし、体長6~7 mmで河川に加入し、1 cmで成熟する。寿命は1年未満と考えられる。
- 生息地の条件** : マングローブに接する軟泥底の環境が必要である。特に干潮時に浅い水たまりが形成される場所に住む。比較的規模の大きい河川汽水域に限定される。
- 現在の生息状況** : 生息河川に限られ、生息環境は悪化しつつある。条件が良い場所では高密度の群がりを作るが、そのような場所は減少している。
- 学術的意義・評価** : 汽水域の生物多様性を構成する貴重な一員である。沖縄島と西表島の間における遺伝的分化が示唆され、生物地理学的に興味深い。体長約1 cmで成熟し、脊椎動物として最も小型の部類に入る。
- 生存に対する脅威** : 本種の生息環境は、埋め立て、マングローブの伐採、護岸工事、浚渫、道路建設などにより縮小している。
- 原記載** : McCulloch, A. R., 1917. Studies in Australian fishes No.4. Records of the Australian Museum, 11: 163-188, Pls. 29-31.
- 参考文献** : 前田 健・山崎 望・向井貴彦・立原一憲, 2011. 沖縄島におけるミツボシゴマハゼとマングローブゴマハゼの形態と生息環境. 魚類学雑誌, 58: 127-140.
向井貴彦・鈴木寿之, 2005. 沖縄島で採集されたマングローブゴマハゼ (新称). 日本生物地理学会会報, 60: 69-74.
鈴木寿之, 2015. マングローブゴマハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 336-337.
- 執筆者名** : 前田 健

- 和名 : **ギンポハゼ**
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Parkraemia saltator* Suzuki and Senou, 2013
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態 : 体は細長く、側扁する。眼は上付きで両眼間隔は狭く、吻は非常に短い。背鰭は1基で基底が長く、6棘12~13軟条。臀鰭も基底が長く、13軟条。胸鰭は14~15軟条。鱗を欠く。体色は乳白色で、黒色斑や橙色斑が散在する。婚姻色の雄は体や鰭が黒くなる。最大体長は約3.5 cmである。
- 近似種との区別 : 近似のテングギンポハゼは上顎先端に小さな皮質突起を持ち、それが下顎先端より前に出ることなどにより本種と区別される。
- 分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島に分布する。沖縄県外および国外からは知られていない。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ギンポハゼ属には、本種のほか、沖縄島、宮古島、西表島に分布するテングギンポハゼと、オーストラリアに分布する *Parkraemia ornata* が含まれる。テングギンポハゼの生息水深は本種より深い(5~12 m)。
- 生態的特徴 : 河川の河口周辺や内湾の水深2 m以浅の砂泥底または砂底に生息する。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。体長5~6 mmの着底直前のギンポハゼ属の仔魚が沖縄島と西表島の海岸や河口で採集されている。この発育段階における種の同定は困難であるが、おそらくギンポハゼと考えられ、この体長で着底することが示唆される。
- 生息地の条件 : 浅く平坦な砂泥底に住む。海草藻場周辺の砂地にも生息する。
- 現在の生息状況 : 生息地は多くなく、環境が悪化している場所も多い。
- 学術的意義・評価 : 本種は沖縄県以外からは知られていない点で非常に貴重である。西表島の浦内川が本種のタイプ産地である。
- 生存に対する脅威 : 分布が局所的である。防波堤の建設や近隣の埋め立てなどによる底質の変化、道路やホテルの建設による土砂流入、水質悪化などによる影響が危惧される。沖縄島における生息地の1つである大浦湾では、米軍基地の建設が進められ、生息地の環境変化が懸念される。
- 原記載 : Suzuki, T. and H. Senou, 2013. Review of the sand-diving goby genus *Parkraemia* (Perciformes: Gobiidae), with descriptions of two new species from the Ryukyu Islands, Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science (Ser. A)*, 7: 53-66.
- 参考文献 : 前田 健, 2014. ギンポハゼ属の1種. “日本産稚魚図鑑 第二版”, 沖山宗雄(編), 東海大学出版会, 秦野, 1233-1234.
 Maeda, K. and K. Tachihara, 2014. Larval fish fauna of a sandy beach and an estuary on Okinawa Island, focusing on larval habitat utilization by the suborder Gobioidae. *Fisheries Science*, 80: 1215-1229.
 鈴木寿之, 2015. ギンポハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 340-341.
 Suzuki, T. and H. Senou, 2013. Review of the sand-diving goby genus *Parkraemia* (Perciformes: Gobiidae), with descriptions of two new species from the Ryukyu Islands, Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science (Ser. A)*, 7: 53-66.
- 執筆者名 : 前田 健
-
- 和名 : **トサカハゼ**
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Cristatogobius lophius* Herre, 1927
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
- 形態 : 頭と体はやや側扁する。両眼間から第1背鰭起部にかけてとさか状の皮質隆起が発達する。体は紫色がかった褐色で、体側に数本の黄色横帯を持つ。頭部、体側部、胸鰭基部に多数の小黒点と輝青緑色の斑紋を持つ。臀鰭は基部が赤色、先端側が黒色で、その間に黄色線がある。第2背鰭には多数の赤い斑紋があり、その間は黄色い。基部側の赤色斑の中央に黒点を持つ。最大体長は約5 cmである。
- 近似種との区別 : 臀鰭中央に黄色縦線を持つこと、頭部、体側部、胸鰭基部に黒点を持つことなどにより、同属のヒメトサカハゼおよびクロトサカハゼと区別される。
- 分布の概要 : 沖縄県内では沖縄島、久米島、宮古島、伊良部島、石垣島、小浜島、西表島から知られる。他に、国内では屋久島、奄美大島、加計呂麻島、国外ではフィリピン、インドネシア、タイ、ポーンペイ(ミクロネシア)から報告されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本国内では3種のトサカハゼ属が知られており、いずれの種もその分布は琉球列島に限定される。ヒメトサカハゼとクロトサカハゼは確認例がかなり少ないが、本種の確認例はそれらより多い。
- 生態的特徴 : 河口域や内湾奥部の軟泥底の穴に見られる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。
- 生息地の条件 : 良好な環境が保たれた河川の河口域から内湾にいたる開けた水域の軟泥底に生息する。干潮時の水深が10~50 cmの浅い場所から見つかることが多いが、内湾の水深3~12 mの場所でも観察されている。
- 現在の生息状況 : 沖縄県内では沖縄島の6水系、久米島の2水系、宮古島の3水系、伊良部島の1水系、石垣島の3水系、西表島の7水系で確認されている。各河川における生息個体数は少なく、生息環境が悪化し

ている場所が多い。

学術的意義・評価：生態については不明な点が多いが、軟泥底に生息するハゼ類の代表的な種の一つで、マングローブ域の生物多様性を構成する重要なメンバーである。とさか状の皮質隆起を持つユニークな形態も興味深い。

生存に対する脅威：河口域の生息環境は開発の影響を受けやすい。赤土の堆積などによる底質の変化にも注意が必要である。県内の生息地では、浚渫、護岸工事、道路や橋梁の建設により生息環境が悪化している。底質が変化し、生息に適さなくなった場所もある。

原 記 載：Herre, A. W. C. T., 1927. Gobies of the Philippines and the China Sea. The Philippine Bureau of Science Monographic Publications on Fishes, 23: 1-352 + Pls.1-30.

参 考 文 献：Akihito and K. Meguro, 2000. Review of the gobiid genus *Cristatogobius* found in Japan with description of a new species. Ichthyological Research, 47: 249-261.
鈴木寿之, 2015. トサカハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 236-237.

執 筆 者 名：前田 健

和 名：ワカケサラサハゼ
分 類：スズキ目 ハゼ科
学 名：*Amblygobius linki* Herre, 1927
カ テ ゴ リー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形 態：体は側扁する。吻は丸い。体は乳白色で、体側に太く明瞭な2本の黒色縦帯、また頭部から第2背鰭基底部にかけての背面正中線の両側にやや細い黒色縦帯を持つ。最大体長は約5 cmである。

近似種との区別：体側の明瞭な2本の黒色縦帯によりサラサハゼ属の他種と識別される。

分布の概要：沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島から知られる。国内では他に屋久島と奄美大島から報告がある。国外ではフィリピン、インドネシア、パラオ、ミクロネシアに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ラサハゼ属にはインド・太平洋に広く分布する種が多い。本種も琉球列島から東南アジア、ミクロネシアに至る広い範囲から知られている。

生態的特徴：河川汽水域の泥底または砂泥底に生息し、底から数cm離れて遊泳する。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。

生息地の条件：河口域やマングローブ周辺の泥底や砂泥底に生息する。

現在の生息状況：沖縄島では稀であり、継続した生息は確認されていない。西表島でも生息地は多くなく、個体数は少ない。生息環境が悪化している場所も多い。

学術的意義・評価：琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威：もともと個体数が少ない上に、橋梁や道路の建設、護岸工事などの影響により、生息環境が悪化している場所が多い。

原 記 載：Herre, A. W. C. T., 1927. Gobies of the Philippines and the China Sea. The Philippine Bureau of Science Monographic Publications on Fishes, 23: 1-352 + Pls.1-30.

参 考 文 献：鈴木寿之, 2015. ワカケサラサハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 355.

執 筆 者 名：前田 健

和 名：カワクモハゼ
分 類：スズキ目 ハゼ科
学 名：*Bathygobius* sp.
カ テ ゴ リー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形 態：頭部はやや縦扁し、体は太短い円筒形。吻が短く、傾斜は急。体色は黄褐色で、暗褐色や赤褐色の斑紋を持つ。胸鰭には多数の暗褐色斑と淡黄褐色斑を持つ。最大体長は約3.5 cmである。

近似種との区別：体が太短く、吻の傾斜が急であること、前鼻管に皮弁がないこと、両眼間隔が眼径より狭いこと、頤の台形皮弁の後側端が突出すること、頭部背面の被鱗域の前端が前鰓蓋骨後端上方付近であること、胸鰭に多数の暗褐色斑と淡黄褐色斑があること、第1背鰭の基部側が黒く、先端側に黒色横帯を持たないことなどにより、沖縄県内に分布する同属他種と識別される。

分布の概要：沖縄県内では、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に分布する。他にインドネシアから報告がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較：琉球列島では10種のクモハゼ属が報告されている。インド・太平洋に広く分布する種が多いが、本種の海外における分布の詳細は不明。河川汽水域ではクモハゼが最も広く分布し、カワクモハゼの生息範囲は限られる。ヤハズハゼ、スジクモハゼ、クロヤハズハゼ等も汽水域に出現するが、それらの生息範囲はカワクモハゼより海側である。

生態的特徴：河川汽水域に生息する。干潮時に比較的流れのある場所の転石に付着したカキ殻の中から見つかることが多い。また淵の岩盤の隙間にも住むが、この場合も周辺にカキ殻を伴うことが多い。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられるが、生活史の詳細は不明。

生息地の条件：河川汽水域のカキ殻が付着した転石に住む。干潮時には比較的流れのある場所であることが多い。淵で見つかることもあるが、水が淀んだ場所には住まないようである。クモハゼと同所的に見られ

ることがあるが、クモハゼが海岸から汽水域まで幅広く出現するのに対し、本種の生息範囲は局限される。

現在の生息状況 : 生息が確認されている河川は少ないが、生息環境が特殊であり、調査が進めば他の河川でも見つかる可能性が高い。個体数は多くない。生息環境が悪化している場所が多い。

学術的意義・評価 : 学名が未確定であり、未記載種と考えられている。クモハゼ属の中で汽水域のカキ殻に住む点でユニークである。

生存に対する脅威 : 本種は汽水域の中でも限られた環境に住み、個体数も多くないため、開発による環境変化の影響を受けやすいと考えられる。

原 記 載 : 学名未確定。

参 考 文 献 : 中坊徹二, 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
鈴木寿之, 2015. カワクモハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 138-139.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : **ボルネオハゼ**

分 類 : スズキ目 クロユリハゼ科

学 名 : *Parioglossus palustris* (Herre, 1945)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 : 体はやや細長く、側扁する。第1背鰭前方に皮質隆起がある。頭部の前眼眉甲管に5開孔、前鰓蓋管に2開孔がある。左右の腹鰭は分かれ、それぞれ1棘4軟条。体色は淡い灰褐色で、体側に暗色縦帯を持たない。尾鰭下葉の基部近くに黒色斑を持つ。最大体長は約3 cmである。

近似種との区別 : 近似のヒメサツキハゼは尾鰭の黒色斑が尾鰭上葉にまたがることにより識別される。

分布の概要 : 沖縄県内では石垣島と西表島から知られる。国内では他に記録はない。国外ではフィリピン、インドネシア、パプアニューギニア、オーストラリア、アンダマン海に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : サツキハゼ属にはインド・太平洋に広く分布する種が多い。本種も琉球列島からオーストラリアに至る広い範囲に分布する。

生態的特徴 : 河口域のマングローブで確認されている。水路沿いのヒルギ類の根元の中層付近でミヤラビハゼやコビトハゼと混泳し、浮遊しながらプランクトンを食べているところが観察されている。夜間や干潮時にはヒルギ類の根の間やカキ殻などの隙間に潜り込んでいる。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。生活史の詳細は不明。

生息地の条件 : 詳しい環境条件は不明であるが、環境の良好なマングローブ域の水路が必要と考えられる。

現在の生息状況 : 沖縄県内では石垣島の2河川と西表島の7河川で確認されているが、いずれの生息地でも確認個体数は少ない。

学術的意義・評価 : 琉球列島は分布の縁辺にあたり、本種個体群の生息状況は、仔魚の分散、定着に関して重要な知見を提供すると考えられる。

生存に対する脅威 : 橋梁や道路の建設、護岸工事、農地開発により土砂が流入し、生息地の底質が変化している。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

原 記 載 : Herre, A. W. C. T., 1945. Notes on fishes in the Zoological Museum of Stanford University. XII. Two new genera and four new gobies from the Philippines and India. Copeia, 1945(1): 1-6.

参 考 文 献 : 鈴木寿之, 2015. ボルネオハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 342-343.

執 筆 者 名 : 前田 健

5) 準絶滅危惧 (NT)

和 名 : **オオメジロザメ**

分 類 : メジロザメ目 メジロザメ科

学 名 : *Carcharhinus leucas* Müller and Henle, 1839

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 全長 300 cm。吻は幅広く、短い。目が小さく、上顎の歯は、三角形で鋸歯を有する。背中隆起線はない。第1背鰭は、胸鰭基底部よりも後方。第2背鰭基底部は、臀鰭基底部とほぼ同じ、もしくはわずかに前方に位置する。

近似種との区別 : 沖縄県下で河川に侵入することが確認されているサメは、本種のほかにはレモンザメのみであり、本種は第2背鰭が大きいことで識別可能。

分布の概要 : 世界中の熱帯、亜熱帯域の海や川や湖に広く分布。日本では沖縄島と八重山諸島。水深 152 m まで生息しているが、普段は 1~30 m の浅海に生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 海域では多くのサメ類が同所的に生息しているが、河川に入るものは極めてまれである。

<魚類>

生態的特徴 : 雄 157~226 cm、雌 180~230 cm で成熟し、全長 56~81 cm の胎児を 1~13 個体出産する。本種の妊娠期間は、10、11 カ月であると推定されており、出産のピークは、6、7 月である。また、沖縄島や西表島では、誕生直後と思われる小型のオオメジロザメが河川に侵入する。

生息地の条件 : 温暖で水深 1~30 m の浅海域。産まれた後、河口が深く、干潮時にもある程度の水深が確保されている河川に侵入する。

現在の生息状況 : 生態系の頂点に位置する魚類であり、個体数は多くない。

学術的意義・評価 : 河川に侵入するサメは珍しく、なぜ河川に侵入するのか学術的に興味深い。

生存に対する脅威 : 本種は、河川を利用することから、海域に生息する他のサメ類よりも人為的影響を受けやすいと考えられる。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Near Threatened (NT)。

原記載 : Müller, J. and F. G. J. Henle., 1839. Systematische Beschreibung der Plagiostomen. Veit and Co., Berlin.

参考文献 : 松本瑠偉・内田詮三・戸田 実・仲谷一宏, 2006. オオメジロザメ, *Carcharhinus leucas* の日本の周辺海域および淡水域からの記録, 魚類学雑誌, 53 (2): 181-187.

Compagno, L. J. V., 1984. FAO species catalogue. Vol. 4, part2. Sharks of the world, FAO, 478-481.

執筆者名 : 櫻井もも子

和名 : コモチサヨリ
分類 : ダツ目 サヨリ科
学名 : *Zenarchopterus dunckeri* Mohr, 1926
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 体長 15 cm。背鰭 10~12 軟条、臀鰭 10~13 軟条、胸鰭 10 軟条、背鰭前方鱗数 27~30。鼻孔に肉質突起が伸長し、尾鰭後縁はわずかに丸い。

近似種との区別 : 尾鰭後縁の形状により他のサヨリ科魚類とは簡単に識別される。

分布の概要 : 東部インド洋から西部太平洋の熱帯域に、日本では八重山諸島と宮古島に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : わが国に生息するサヨリ科魚類のうち、唯一、河川汽水域で一生涯を終える。

生態的特徴 : 河川の河口から汽水域下流部の表層に生息し、胎生で夏季に孵出する。

生息地の条件 : マングローブの発達した河川河口から汽水域に生息する。

現在の生息状況 : かつては八重山諸島の多くの河川に大小様々な体長の群れが確認できたが、河口域の環境変化により個体数が減少しつつある。特に大型個体が少なくなっている。

学術的意義・評価 : 河川汽水域に生息する胎生のサヨリ科魚類であり、その生活史戦略は極めて興味深い、生活史に関する情報が少ない。

生存に対する脅威 : 架橋の付け替え、河川改修、マングローブの伐採などによる河川汽水域の環境改変。

原記載 : Mohr, E., 1926. Die Gattung *Zenarchopterus* Gill. Zoologische Jahrbücher, Abteilung für Systematik, Geographie und Biologie der Tiere (Jena), 52: 231-266.

参考文献 : 瀬能 宏, 2015. コモチサヨリ, “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 349.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : ナンヨウチヌ
分類 : スズキ目 タイ科
学名 : *Acanthopagrus pacificus* Iwatsuki, Kume and Yoshino, 2010
方言名 : チン (混称)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 体長 35 cm。背鰭棘条数は 11 棘 10~11 軟条、側線上方の背鰭棘条中央部下方の横列鱗数は 3.5 である。体長は体高の 2.1~2.2 倍、側線鱗数は 42~46 である。生時の体色は、背部が黒色、体側から腹部が黒くくすんだ銀白色を呈す。腹鰭と臀鰭は、暗灰色である。

近似種との区別 : 背鰭棘中央部下方の横列鱗数と腹鰭および臀鰭の色彩から識別可能。

分布の概要 : 台湾、香港、海南島、ベトナム、シンガポール、マレーシア、フィリピン、ジャワ島、ロンボク島、パプアニューギニア、オーストラリアに分布。日本では、西表島と石垣島に生息。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表島と石垣島ではミナミクロダイと同所的に生息している。石垣島では稀で、分布の中心は西表島である。

生態的特徴 : 寿命は 15~18 歳であり、産卵期は 12~4 月の比較的長期にわたる。雄性先熟の性転換を行い、約 8 歳で 50% の個体が雌に変わる。基本的に河川の汽水域から淡水域下端に生息し、産卵期に海に降りる。

生息地の条件 : 西表島のマングローブ湿地の発達した河川に生息する。

現在の生息状況 : 西表島でもすべての河川に生息しているわけではない。

学術的意義・評価 : 八重山諸島が分布北限にあたり、生物地理学的に興味深い。また、本種は生息場所の中心が河川にあり、他のクロダイ属と繁殖戦略が異なる可能性がある。

生存に対する脅威 : 産卵期に定置網で漁獲され、同時に遊漁による漁獲圧にさらされている。架橋の架け替え、道路工事、リゾート開発などにより、河川汽水域の環境が悪化している場所が多い。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原 記 載 : Iwatsuki, Y., M. Kume and T. Yoshino, 2010. A New Species, *Acanthopagrus pacificus* from the Western Pacific (Pisces, Sparidae). Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A (Zoology), 1202: 1-19.
参 考 文 献 : 林 公義・萩原清司, 2013. ナンヨウチヌ, “日本産魚類検索 全種の同定 第三版”, 中坊徹次(編), 東海大学出版会, 秦野, 956.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : ジャノメハゼ
分 類 : スズキ目 カワアナゴ科
学 名 : *Bostrychus sinensis* Lacepède, 1801
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

鱗が細かく、体表にはぬめりがある。尾鰭基底上部に黒斑を持つ。最大体長は約 15 cm。インド・西太平洋に広く分布し、沖縄県内では沖縄島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島から知られる。国内では他に奄美大島に分布する。河川汽水域のマングローブ林内やその周辺に生息する。日中はヒルギ類の支柱根周辺や木や岩の下などに潜み、夜間に表に出て、カニ等を捕食する。仔魚は海で 20 日ほどの浮遊期を過ごし、体長 5~6 mm で河川に加入し着底する。特に沖縄島では生息環境が減少し、個体数は少ない。汽水域の環境変化が脅威となる。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原 記 載 : Lacepède, B. G. E., 1801. Histoire naturelle des poissons, 3: i-lxvi + 1-558, Pls.1-34.
参 考 文 献 : 立原一憲, 2015. ジャノメハゼ, “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 224-225.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : ホシマダラハゼ
分 類 : スズキ目 カワアナゴ科
学 名 : *Ophiocara porocephala* (Valenciennes, 1837)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

頭部は縦扁し、両眼は広く離れる。体はずんぐりして、鱗が大きい。黒褐色で、稚魚は体側に 2 白色横帯、体長 15 cm ほどの個体は多数の青白い斑点を持つが、大型個体ではそれらの模様は不明瞭となる。最大体長は約 30 cm。インド洋西部から西太平洋まで広く分布し、沖縄県内では沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島から知られる。国内では他に種子島と奄美大島から記録がある。河川汽水域のマングローブ周辺等、隠れ家となる植物や石組みなどが多い場所に住み、日中はそこに潜んでいることが多い。仔魚は海で浮遊期を過ごし、体長 5~6 mm で河川に加入し着底する。汽水域の環境が単調になると生息できなくなると考えられる。釣りの対象として人気があり、特に沖縄島では個体数が多くないため、注意が必要である。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原 記 載 : Cuvier, G and A. Valenciennes, 1837. Histoire naturelle des poissons, 12. Levrault, Paris.
参 考 文 献 : 立原一憲, 2015. ホシマダラハゼ, “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課(編), ぎょうせい, 東京, 304-305.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : ミナミハゼ
分 類 : スズキ目 ハゼ科
学 名 : *Awaous ocellaris* (Broussonet, 1782)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

吻は長く、上唇が厚い。第 1 背鰭に黒色斑を持つこと、頬に鱗を持つことなどにより近似のクロミナミハゼと識別されるが、クロミナミハゼも小型個体は第 1 背鰭に黒色斑を持つことがあり、誤同定が多いようである。太平洋各地に広く分布し、沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島、与那国島から知られる。河川淡水域下流部の砂底の淵に生息し、驚くと砂に潜る。両側回遊性と考えられる。沖縄島ではクロミナミハゼと比べて個体数が少ない。本種生息地では浚渫により自然な河川形態が失われることが多く、本種の生息に大きな影響を与えている。また西表島では観光客増加の影響を受けている。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原 記 載 : Broussonet, P. M. A., 1782. Ichthyologiae, sistens piscium descriptiones et icones. Decas I. London.
参 考 文 献 : 鈴木寿之・瀬能 宏, 2004. 西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機. 魚類学雑誌, 51: 72-74.
Watson, R. E., 1992. A review of the gobiid fish genus *Awaous* from insular streams of the Pacific Plate. Ichthyological Exploration of Freshwaters, 3: 161-176.

執 筆 者 名 : 前田 健

<魚類>

和名 : ヒラヨシノボリ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Rhinogobius* sp. DL
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 該当なし

頭部は縦扁し、雄の吻は伸長する。眼の前縁から吻端に向けて著しく太い赤褐色線を持ち、胸鰭基底上部に暗色縦斑を持つ（近似のクロヨシノボリは胸鰭基底に暗色横斑を持つ）。琉球列島の固有種で、沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島、県外では種子島、屋久島、奄美大島に分布する。両側回遊性と考えられるが、各島の個体群間における遺伝的交流は乏しいことが示唆されている。河川上流の渓流域に生息し、流れの速い瀬や淵頭に住む。同属他種と比べて、生息河川数が少なく、また河川内の生息区間も短い。沖縄島では生息地が局限され、特にダム建設の影響を受け、個体数は激減したと考えられる。学名は付けられていないが、一般に *Rhinogobius* sp. DL と呼ばれている。

参考文献 : 高木基裕・久門伸司・大原健一・関 伸吾・米澤俊彦・大迫尚晴・鈴木寿之, 2015. 琉球弧広域に生息するヒラヨシノボリの集団構造解析. 日本生物地理学会会報, 70: 123-130.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ニセツムギハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Acentrogobius audax* Smith, 1959
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

眼の前縁から斜め前方に黒色帯を持ち、主鰓蓋部から第1背鰭起部にかけて同じく斜めの黒色帯を持つ。雌の腹部側面には数本の細い黒色線がある。背鰭前方鱗を持つことなどにより近似のセイタカスジハゼと識別される。インド洋西部から西太平洋まで広く分布し、沖縄県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島から知られる。国内では他に屋久島から記録がある。河川汽水域や内湾湾奥の開けた水域の泥底や砂泥底に生息する。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。個体数は少ない。汽水域周辺の開発により生息環境が減少している。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Smith, J. L. B., 1959. Gobioid fishes of the families Gobiidae, Periophthalmidae, Trypauchenidae, Taenioididae and Kraemeriidae of the western Indian Ocean. Ichthyological Bulletin, Department of Ichthyology, Rhodes University, 13: 185-225, Pls.9-13.
参考文献 : 鈴木寿之, 2015. ニセツムギハゼ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 357.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ホホグロスジハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Acentrogobius suluensis* (Herre, 1927)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

雄の第1背鰭第1~3棘は糸状に伸長する。体側に2暗色縦帯を持ち、その間に4個の黒色斑がある。主鰓蓋部と第2背鰭棘先端に黒色斑がある。西太平洋に広く分布し、国内では屋久島を北限とする琉球列島に分布する。沖縄県内では沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島で記録がある。河川汽水域や内湾湾奥の水深1~2mの泥底や砂泥底に生息する。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。個体数は少ない。汽水域周辺の開発により生息環境が減少している。

原記載 : Herre, A. W. C. T., 1927. Gobies of the Philippines and the China Sea. The Philippine Bureau of Science Monographic Publications on Fishes, 23: 1-352 + Pls. 1-30.
参考文献 : 鈴木寿之, 2015. ホホグロスジハゼ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 358.

執筆者名 : 前田 健

和名 : フタスジノボリハゼ
分類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Amoya moloanus* (Herre, 1927)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 該当なし

体はやや細長く、少し側扁する。吻端は丸い。第1背鰭第2棘は糸状に伸長する（個体によっては第3棘も伸長する）。体側中央に沿って約9個の赤色で縁取られた青紫色に輝く斑紋が並び、黒色縦帯がそれらをつなぐ。眼の下に黒色垂線がある。アンダマン海と西太平洋に広く分布し、国内では沖縄県の沖縄島、久米島、石垣島、西表島に分布する。河川汽水域のマングローブ周辺の軟泥底に生息する。干潮時は穴の中に潜む。仔魚は海で浮遊期を過ごすと考えられる。汽水域周辺の開発により、生息に適した軟泥底の環境は減少している。

原 記 載 : Herre, A. W. C. T., 1927. Gobies of the Philippines and the China Sea. The Philippine Bureau of Science Monographic Publications on Fishes, 23: 1-352 + Pls.1-30.

参 考 文 献 : 鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾, 2004. 決定版日本のハゼ. 平凡社, 東京.

執 筆 者 名 : 前田 健

6) 情報不足 (DD)

和 名 : ニューギニアウナギ
 分 類 : ウナギ目 ウナギ科
 学 名 : *Anguilla bicolor pacifica* Schmidt, 1928
 方 言 名 : ウナジー (混称)
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

体長 70 cm。体は細長く、背部が一様に暗色、腹部が白色で、斑紋を欠く。背鰭起部が肛門の直上に位置する。スラウェシ、ニューギニア、フィリピン、台湾などに分布。日本では、レプトセファルスやシラスウナギ期のものが鹿児島屋久島以南で採集されているが、成魚は八重山諸島のみ。生息場所は、湿地や休耕田などである。これらの場所の開発は、生息を脅かす要因となる。日本における生活史の基礎的情報はない。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Near Threatened (NT)。
 原 記 載 : Schmidt, J., 1928. The fresh-water eels of Australia. With some remarks on the short-finned species of *Anguilla*. Records of the Australian Museum, 16: 179-210.
 参 考 文 献 : Schmidt, J., 1928. The fresh-water eels of Australia. With some remarks on the short-finned species of *Anguilla*. Records of the Australian Museum, 16: 179-210.
 Yamamoto, T., N. Mochioka and A. Nakazono, 2000. Occurrence of the third *Anguilla* species, *Anguilla bicolor pacifica* glass-eels, from Japan. Suisanzoshoku, 48: 579-580.
 掛 善 継, 2015. ニューギニアウナギ. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 361.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : ハクテンウミヘビ
 分 類 : ウナギ目 ウミヘビ科
 学 名 : *Lamnostoma polyopthalmum* (Bleeker, 1853)
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

全長 30 cm。体は、細長く円筒状、背鰭と臀鰭があり、肛門が体の中央部に位置する。側線に沿って小白色斑が並び、背鰭起部が鰓孔より後方に始まり、体断面が円形である。台湾、フィリピン、マリアナ諸島、インドネシア、ニューギニア、フィジー、サモア、タヒチ、南アフリカに分布。日本では沖縄島から知られている。河川の河口域に生息するが、生活史は未解明。

原 記 載 : Bleeker, P., 1853. Diagnostische beschrijvingen van nieuwe of weinig bekende vischsoorten van Sumatra. Tiental V-X. Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië, 4: 243-302.
 参 考 文 献 : 波戸岡清峰, 2013. ハクテンウミヘビ. “日本産魚類検索 全種の同定 第三版”, 中坊徹次 (編), 東海大学出版会, 秦野, 269.

執 筆 者 名 : 立原一憲

和 名 : アンピンボラ
 分 類 : ボラ目 ボラ科
 学 名 : *Chelon subviridis* (Valenciennes, 1836)
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

体長 20 cm。主鰓蓋骨は口角後方に延長し、口を閉じるとその後端が露出する。眼に脂腺が発達し、胸鰭基部は一様に銀色。東部太平洋から西太平洋の熱帯域に分布し、日本では、奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島から報告されている。主に河川汽水域に生息するが、個体数はきわめて少ない。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
 原 記 載 : Cuvier, G. and A. Valenciennes, 1836. Histoire naturelle des poissons, 11. Levrault, Paris.
 参 考 文 献 : 瀬 能 宏, 2015. アンピンボラ. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 363.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : モンナシボラ
分類 : ボラ目 ボラ科
学名 : *Moolgarda engeli* (Bleeker, 1858)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 11 cm。主上顎骨は、口角後方へ延長し、口を閉じるとその後端が溝の中に収容され、露出しない。脂鱗が発達し、頭部背面の鱗は前鼻孔より前に達する。胸鰭基底に斑紋を欠く。インド洋から西・中央太平洋の熱帯域に分布し、日本では瀬戸内海、沖縄島、伊良部島、石垣島、西表島から報告されている。日本からの報告は、いずれの場所も少数である。

原記載 : Bleeker, P., 1858. *Conspectus specierum Mugilis Archipelagi indici analyticus*. *Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 16: 275-280.

参考文献 : 瀬能 宏, 2015. モンナシボラ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 365.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : ネットアイソイワシ
分類 : トウゴロウイワシ目 トウゴロウイワシ科
学名 : *Atherinomorus duodecimalis* (Valenciennes, 1935)
方言名 : ハダラ(総称)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 7 cm。体は細長く伸長、やや側扁し、頭部が大きい。口はやや上方に向き、上顎末端が目の前縁に至る。生時の体色は、背部が黄緑褐色、腹部と体側が銀色を呈す。スリランカ、タイ、フィリピン、インドネシア、ニューギニア、ニューカレドニアなどに分布し、日本では八重山諸島から記録がある。穏やかなマングローブの汽水域に生息するが、その生活史は未解明である。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Cuvier, G. and A. Valenciennes, 1835. *Histoire naturelle des poissons*, 10. Levrault, Paris.

参考文献 : Kimura, S., Y. Iwatsuki and T. Yoshino, 2001. Redescription of the Indo-West Pacific atherinid fishes, *Atherinomorus endrachtensis* (Quoy and Gaimard, 1825) and *A. duodecimalis* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1935). *Ichthyological Research*, 48: 167-177.

立原一憲, 2015. ネットアイソイワシ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 365.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : ミナミギンイソイワシ
分類 : トウゴロウイワシ目 トウゴロウイワシ科
学名 : *Hypoatherina temminckii* (Bleeker, 1854)
方言名 : ハダラ(総称)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 9 cm。体は体高が低く、腹鰭から尾柄にかけて徐々に細くなる。下顎歯列後端の後方の突起が大きい。成魚の肛門は、腹鰭先端より後方に位置する。インド洋から西・中央太平洋の熱帯域に分布し、日本では奄美大島、沖縄島、西表島の内湾や河口から記録されている。いずれも個体数は少ない。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Bleeker, P., 1854. *Nieuwe tientallen diagnostische beschrijvingen van nieuwe of weinig bekende vischsoorten van Sumatra*. *Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 5: 495-534.

参考文献 : 瀬能 宏, 2015. ミナミギンイソイワシ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 366.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : ナンヨウタカサゴイシモチ
分類 : スズキ目 タカサゴイシモチ科
学名 : *Ambassis interrupta* Bleeker, 1853
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 9 cm。他のタカサゴイシモチ属魚類に比べ、体高が高く、側線が中断する。インド洋、オーストラリア、インド

ネシア、台湾からバヌアツに至る西太平洋。日本では奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島から記録。マングローブ湿地が発達する河川の汽水域に群れて生息。個体数はきわめて少ない。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
 原記載 : Bleeker, P., 1853. Diagnostische beschrijvingen van nieuwe of weinig bekende vischsoorten van Batavia. Tiental I-VI. Natuurkd. Tijdschr. Neder.-Indië, 4: 451-516.
 参考文献 : 瀬能 宏, 2015. ナンヨウタカサゴイシモチ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 366.

執筆者名 : 立原一憲

- 和名 : ハナダカタカサゴイシモチ
 分類 : スズキ目 タカサゴイシモチ科
 学名 : *Ambassis macracanthus* Bleeker, 1849
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 10 cm。体高がやや高く、前鰓蓋骨下縁は鋸歯状。東インド洋、インドネシア、フィリピンからトンガにかけての西太平洋に分布。日本では、西表島のみから記録。河川の感潮域に生息するが、個体数はきわめて少ない。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Data Deficient (DD)。
 原記載 : Bleeker, P., 1849. Bijdrage tot de kennis der Percoiden van den Malayo-Molukschen Archipel, met beschrijving van 22 nieuwe soorten. Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen, 22: 1-64.
 参考文献 : 瀬能 宏, 2015. ハナダカタカサゴイシモチ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 367.

執筆者名 : 立原一憲

- 和名 : ワキイシモチ
 分類 : スズキ目 テンジクダイ科
 学名 : *Fibramia lateralis* (Valenciennes, 1832)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 8 cm。体は楕円形で側扁し、尾柄後方に小さな 1 黒色斑を有す。台湾、インドネシア、パラオ、サモア、フィリピン、フィジー、パプアニューギニアなどに分布する。日本では、西表島のみから知られる。波の穏やかな内湾の汽水域やマングローブ水域に生息する。

- 原記載 : Valenciennes, A., 1832. Descriptions de plusieurs espèces nouvelles de poissons du genre *Apogon*. Nouvelles Annales du Muséum d'Histoire Naturelle (Paris), 1: 51-59, Pl. 4.
 参考文献 : 立原一憲, 2015. ワキイシモチ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 368.

執筆者名 : 立原一憲

- 和名 : ヒルギヌメリテンジクダイ
 分類 : スズキ目 テンジクダイ科
 学名 : *Pseudamia amblyuroptera* (Bleeker, 1856)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 6 cm。体は細長く側扁。吻端が突出し、前鼻孔に皮弁がある。生時の体色は灰色で、黒色素胞が散在し、尾鰭基底に 1 黒色斑がある。シンガポール、ボルネオ、フィリピン、パプアニューギニアに分布し、日本では西表島から知られている。個体数はきわめて少ない。

- 原記載 : Bleeker, P., 1856. Bijdrage tot de kennis der ichthyologische fauna van het Eiland Boere. Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsche-Indië, 11: 383-414.
 参考文献 : 立原一憲, 2015. ヒルギヌメリテンジクダイ, “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 368.

執筆者名 : 立原一憲

- 和名 : ダイダイコショウダイ
 分類 : スズキ目 イサキ科

<魚類>

学名 : *Plectorhinchus albovittatus* (Rüppell, 1838)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 100 cm。体は、楕円形で側扁する。体色の地色は橙色で、成魚は、顕著な縦帯や斜帯を欠き、胸鰭、腹鰭、臀鰭が暗色であるのに対し、幼魚は体側に明瞭な 2 黒色縦帯を有す。フィリピン、パラオ、グアム、黄海、南アフリカなどに分布する。日本では西表島に生息するほか、千葉県で稚魚が記録されている。マングローブの発達した汽水域の栈橋や倒木の陰に潜む。

原記載 : Rüppell, W. P. E. S., 1838. Neue Wirbelthiere zu der Fauna von Abyssinien gehörig. Fische des Rothen Meeres. Siegmund Schmerber, Frankfurt am Main.

参考文献 : 瀬能 宏, 1991. 日本初記録のダイダイコシヨウダイ (新称), I. O. P. Diving News, 2(10): 2-3.
立原一憲, 2015. ダイダイコシヨウダイ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 369.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : **ゴマクモギンボ**
分類 : スズキ目 イソギンボ科
学名 : *Omobranchus elongatus* (Peters, 1855)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長 5 cm。左右の鰓膜は、峡部を横断して連続しない。生時の体色は、眼の直後に顕著な斑紋を欠き、頭部腹面に暗色の小斑点が散在する。インド洋から西太平洋の熱帯海域に分布し、日本では西表島からのみ記録されている。河口付近の岩に付着した牡蠣殻に潜む。架橋の架け替えやリゾート開発などにより、生息地の環境悪化が懸念されている。生活史は未解明である。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Peters, W., 1855. Übersicht der in Mossambique beobachteten Seefische. Bericht über die zur Bekanntmachung geeigneten Verhandlungen der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1855: 428-466.

参考文献 : 藍沢正宏・瀬能 宏, 1992. 日本初記録のゴマクモギンボ (新称). I. O. P. Diving News, 3(7): 2-3.
瀬能 宏, 2015. ゴマクモギンボ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 369.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : **ナリタイトヒキヌメリ**
分類 : スズキ目 ネズツボ科
学名 : *Pseudocalliurichthys ikedai* Nakabo, Senou and Aizawa, 1998.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体長約 2 cm。小型かつ隠蔽的な体色をしている。口が前方に突出し、眼上に 1 対の皮弁があるが、鰓蓋部は皮弁状にならない。前鰓蓋骨棘は槍状で、1 前向棘と 3 内向棘がある。体側下部の皮褶、尾柄背部の側線を結ぶ連結枝、胸鰭後縁の欠刻を欠く。西表島の内湾と河口干潟から 2 標本が得られているのみ。

原記載 : Nakabo, T., H. Senou and M. Aizawa, 1998. New species of *Pseudocalliurichthys* (Teleostei: Callionymidae) from Iriomote Island, Japan. Copeia, 1998(2): 451-455.

参考文献 : 瀬能 宏, 2015. ナリタイトヒキヌメリ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 370.

執筆者名 : 立原一憲

和名 : **エリトゲハゼ**
分類 : スズキ目 カワアナゴ科
学名 : *Belobranchus belobranchus* (Valenciennes, 1837)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体は円筒形でやや細長く、胸鰭上部に遊離軟条がある。体は暗褐色で、眼の下から後方に約 4 本の放射状の赤褐色線がある。西太平洋に広く分布し、沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島で見つかっている。国内では他に記録はない。河川淡水域中流部の瀬または流れのある淵に生息する。両側回遊性と考えられる。沖縄県内では非常に稀であり、複数個体が同時に見つかった例はない。熱帯域からの仔魚の分散による偶発的な出現と考えられるが、淡水域中流部では浚渫や河川改修工事が頻繁に行われ、本種の定着を妨げている可能性がある。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Data Deficient (DD)。

原記載 : Cuvier, G and A. Valenciennes, 1837. Histoire naturelle des poissons, 12. Levrault, Paris.

参 考 文 献 : 鈴木寿之, 2015. エリトゲハゼ. “レッドデータブック 2014 —日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 370.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : ヒノコロモボウズハゼ
 類 : スズキ目 ハゼ科
 学 名 : *Sicyopus auxilimentus* Watson and Kottelat, 1994
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体は細長く、吻端は丸い。躯幹部体側の鱗はまばらに分布する。雄の第1背鰭は伸長し、先端が尖る。雄は灰褐色で、婚姻色の個体は尾部が赤く、肛門周辺の体側が黒くなる。雌は全身淡い褐色。フィリピンとインドネシアに分布し、沖縄県内では沖縄島、他に国内では奄美大島で見つかっている。河川淡水域中流部の瀬周辺に生息する。両側回遊性と考えられる。沖縄県内では稀であり、複数個体が同時に見られた例もあるが、再生産の有無は不明。熱帯域からの仔魚の分散による偶発的な出現と考えられる。淡水域中流部では浚渫や河川改修工事が頻繁に行われ、本種の定着を妨げている可能性がある。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Vulnerable (VU).
 原 記 載 : Watson, R. E. and M. Kottelat, 1994. *Lentipes whittenorum* and *Sicyopus auxilimentus*, two new species of freshwater gobies from the western Pacific (Teleostei: Gobiidae: Sicydiinae). *Ichthyological Exploration of Freshwaters*, 5: 351–364.
 参 考 文 献 : Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. *Société Française d'Ichtyologie*, Paris.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : トラフボウズハゼ
 類 : スズキ目 ハゼ科
 学 名 : *Stiphodon multisquamus* Wu and Ni, 1986
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

体は細長く、吻端は丸い。雄の第1背鰭は伸長する。背鰭前方の背面の鱗は細かく、雄では雌より鱗の数が少ない。雌雄とも体側に9~11本の暗色横帯があり、後頭部と項部に2または3本の明瞭な乳白色の横帯を持つ。胸鰭鰭条に沿って細かい黒色点と並ぶ。最大体長は6 cmを超える。中国南部、ベトナム、マレーシア、琉球列島に分布するが、ベトナム以外では個体数が少ない。河川淡水域中流部の淵に生息する。両側回遊性と考えられる。沖縄県内では沖縄島で見つかっているが、稀である。複数個体が同時に見られた例もあるが、再生産の有無は不明。淡水域中流部では浚渫や河川改修工事が頻繁に行われ、本種の定着を妨げている可能性がある。

原 記 載 : Wu, H.-L. and Y. Ni, 1986. Gobioidi. “The freshwater and estuaries fishes of Hainan Island”, Guangdong Science and Technology Press, Guangzhou, China, 259–314.
 参 考 文 献 : Maeda, K., H. D. Tran and H. H. Tan, 2015. Discovery of a substantial continental population of the subfamily Sicydiinae (Gobioidi: Gobiidae) from Vietnam: Taxonomic revision of the genus *Stiphodon* from the western South China Sea. *Raffles Bulletin of Zoology*, 63: 246–258.

執 筆 者 名 : 前田 健

和 名 : ニライカナイボウズハゼ
 類 : スズキ目 ハゼ科
 学 名 : *Stiphodon niraikanaiensis* Maeda, 2013
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

雄の第1背鰭は伸長する。婚姻色の雄は、体側後半部の腹側と第1および第2背鰭、尾鰭が橙色を呈し、第2背鰭と尾鰭の上部に明瞭な黒色帯を持つ。雌は、体側に11~12本のやや不明瞭な暗色横帯があり、体側中央の黒色縦帯と交差する。第1背鰭、第2背鰭、尾鰭、胸鰭の鰭条に沿って多数の黒点がある。河川淡水域中流部の主に平瀬に生息する。両側回遊性と考えられる。本種は2013年に新種記載されたばかりで、沖縄島以外からは報告がない。しかし、沖縄県内においても、4河川からわずかな個体数が見つかったのみで、継続した生息は確認されていない。熱帯域に未知の生息地があり、そこから偶発的に加入した可能性が示唆される。本種が見つかった河川では浚渫や改修工事が頻繁に行われ、本種の定着を妨げている可能性がある。

原 記 載 : Maeda, K., 2014. *Stiphodon niraikanaiensis*, a new species of sicydiine goby from Okinawa Island (Gobiidae: Sicydiinae). *Ichthyological Research*, 61: 99–107. (Published online in 2013)
 参 考 文 献 : Keith, P., C. Lord and K. Maeda, 2015. Indo-Pacific Sicydiine gobies: Biodiversity, life traits and conservation. *Société Française d'Ichtyologie*, Paris.

執 筆 者 名 : 前田 健

和名 : ドウケハゼ
分類類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Stenogobius ophthalmoporus* (Bleeker, 1854)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

体は側扁し、吻は丸い。眼下に下端が細い黒色垂線がある。体側に三日月形の黒色横帯が並び、尾鰭上部に細かい黒色点列がある。同属のタネカワハゼに似るが、頬に鱗を持つことや上述の模様などにより識別される。台湾、フィリピン、インドネシア、ベトナムに分布し、沖縄県内では沖縄島と石垣島で見つかっている。国内では他に記録はない。河川淡水域下流部の流れの緩やかな砂底または砂泥底の淵に生息する。両側回遊性と考えられる。沖縄県内では非常に稀であり、熱帯域からの仔魚の分散による偶発的な出現と考えられる。淡水域下流部では浚渫や河川改修工事が頻繁に行われ、本種の定着を妨げている可能性がある。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Bleeker, P., 1854. Vierde bijdrage tot de kennis der ichthyologische fauna van Amboina. *Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 5: 317–352.
参考文献 : 鈴木寿之, 2015. ドウケハゼ. “レッドデータブック 2014 – 日本の絶滅のおそれのある野生生物 – 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 372.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ヒモハゼ属の1種
分類類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Eutaeniichthys* sp.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) (ヒモハゼ*)

*本改訂(沖縄県)はヒモハゼのうち奄美大島以南の個体群を別種として扱った。

体は非常に細長く、吻は丸く前方へ突出し、上唇を覆う。背鰭は2基で、第2背鰭の基底は臀鰭基底と比べ顕著に長い。沖縄県の石垣島と西表島、鹿児島県の奄美大島に分布する。屋久島から青森県までの日本と朝鮮半島および中国遼寧省に分布するヒモハゼとは別種と考えられ、研究が進められている。未記載種と考えられる。河川汽水域の干潟に生息する。生息地は限られるが、生息状況の詳細は不明。

参考文献 : Mukai, T., T. Suzuki and M. Nishida, 2003. Genetic differentiation of the brackish water goby, *Eutaeniichthys gilli* (Perciformes, Gobiidae), between the Japanese and the Ryukyu Archipelagos. *Biogeography*, 5: 49–54.

執筆者名 : 前田 健

和名 : コクチスナゴハゼ
分類類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Pseudogobius gastrospilos* (Bleeker, 1853)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

吻が丸く、前方に突出する。雄の第1背鰭の第2および第3棘が伸長すること、眼下の黒色垂線が斜め後ろに向かうこと(スナゴハゼではほぼ真下に向かった後、後ろに曲がる)、第1背鰭の先端付近と中央のやや後ろ側に明瞭で大きな黒色斑があること(スナゴハゼでは中央のやや後ろ側に小さく明瞭な青黒い斑点がある)、尾鰭下部の黒色点列が不明瞭であること(スナゴハゼでは明瞭)などにより近似のスナゴハゼと区別される。インド・西太平洋に広く分布するが、国内では沖縄県の西表島と与那国島でわずかな個体数が見つかっているのみである。河川感潮域の比較的塩分が低い場所の砂泥底などに生息する。

原記載 : Bleeker, P., 1853. Diagnostische beschrijvingen van nieuwe of weinig bekende vischsoorten van Batavia. *Tiental I–VI Natuurkundig Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 4: 451–516.
参考文献 : 鈴木寿之, 2015. コクチスナゴハゼ. “レッドデータブック 2014 – 日本の絶滅のおそれのある野生生物 – 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 374.

執筆者名 : 前田 健

和名 : ムジナハゼ
分類類 : スズキ目 ハゼ科
学名 : *Mugilogobius mertoni* (Weber, 1911)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

頭部はやや縦扁し、両眼は広く離れる。吻は丸い。雄の第1背鰭第1棘は糸状に伸長する。体は褐色で、眼の後下部と頬の下部に暗色縦帯がある。第1背鰭の後部に黒色斑がある。インド・西太平洋に分布し、沖縄県内では沖縄島の1河川、石垣島の1河川、西表島の2河川で見つかっている。国内で他に記録はない。河川汽水域のマングローブ周辺に住むが、いずれの河川においても生息環境はごく狭い範囲に限られ、また個体数は非常に少ない。生息状況に

は不明な点が多い。汽水域周辺の開発により生息地の消失が危惧される。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
 原記載 : Weber, M., 1911. Die Fische der Aru- und Kei-Inseln. Ein Beitrag zur Zoographie dieser Inseln. Abhandlungen der Senckenbergischen Naturforschenden Gesellschaft Frankfurt-a.-M., 34 (1): 1-49, Pls.1-2.
 参考文献 : 大迫尚晴, 2015. ムジナハゼ. “レッドデータブック 2014 —日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 332-333.

執筆者名 : 前田 健

- 和名 : フタホシハゼ
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Mugilogobius fuscus* (Herre, 1940)
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

頭部はやや縦扁し、両眼は広く離れる。吻は丸い。頭部と体は黒褐色で、尾鰭基底の上部と下部に各1個の黒色斑がある。インド・西太平洋に分布し、沖縄県内では石垣島と西表島で見つかっている。国内で他に記録はない。河川汽水域に生息するが、生息状況の詳細は不明。個体数は非常に少ない。

- 原記載 : Herre, A. W. C. T., 1940. Notes on fishes in the Zoölogical Museum of Stanford University, VII. New and rare Philippine gobies from the Herre 1936-1937 Oriental expedition, and in the collections of the Bureau of Science. Philippine Journal of Science, 72(4): 357-369, Pls.1-6.
 参考文献 : 鈴木寿之, 2015. フタホシハゼ. “レッドデータブック 2014 —日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 375.

執筆者名 : 前田 健

- 和名 : タスキヒナハゼ
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Redigobius balteatus* (Herre, 1935)
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

第1背鰭からその下の体側にかけて明瞭な黒色横帯があること、また眼から斜め後ろへ延び胸鰭基部下端付近に達する黒色縦帯があることにより同属のヒナハゼと識別される。インド・西太平洋に広く分布するが、沖縄県内では西表島の2河川から3個体が確認されているのみである。河川汽水域の砂泥底にある岩や沈木の周りで見つかっている。熱帯域からの仔魚の分散による偶発的な出現の可能性が高い。現在沖縄県内に生息するかどうかは不明である。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
 原記載 : Herre, A. W. C. T., 1935. New fishes obtained by the Crane Pacific expedition. Field Museum of Natural History, Publications, Zoölogical Series, 18(12): 383-438.
 参考文献 : 鈴木寿之, 2015. タスキヒナハゼ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 374.

執筆者名 : 前田 健

- 和名 : スタレウロハゼ
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Glossogobius circumspectus* (Macleay, 1883)
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

頭部は縦扁し、体は円筒形。頬に多数の横列孔器がある。西太平洋に広く分布し、沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島、与那国島、国内では他に屋久島と奄美大島で見つかっている。河川汽水域のマングローブ周辺の泥底や砂泥底の斜面に見られるが、個体数は少ない。生息状況の詳細は不明。

- 原記載 : Macleay, W., 1883. Contribution to a knowledge of the fishes of New Guinea, No. 4. Proceedings of the Linnean Society of New South Wales, 8(2): 252-280.
 参考文献 : 大迫尚晴, 2015. スタレウロハゼ. “レッドデータブック 2014 —日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 354.

執筆者名 : 前田 健

- 和名 : フタゴハゼ
 分類 : スズキ目 ハゼ科
 学名 : *Glossogobius* sp.

<魚類>

カテゴリー： 情報不足 (DD)

環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)

頭部は縦扁し、体は円筒形。頬に複列の縦列孔器がある。眼の下に斜め前と斜め後ろに向かう暗色斑があり、八の字状になる。西太平洋に分布し、沖縄県内では西表島、国内では他に奄美大島で見つかっている。河川の汽水域から淡水域に生息する。沖縄県内における確認例は少なく、生息状況の詳細は不明。

原 記 載： 学名未確定。

参 考 文 献： 米沢俊彦, 2015. フタゴハゼ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 373.

執 筆 者 名： 前田 健

和 名： ホクロハゼ

分 類： スズキ目 ハゼ科

学 名： *Acentrogobius caninus* (Valenciennes, 1837)

カテゴリー： 情報不足 (DD)

環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

体はやや側扁する。体は暗褐色で、頭部から尾柄に至る体側に緑色または青色に輝く小さな点が散在する。胸鰭基部の上方に大きく明瞭な青黒い斑紋を持つ。インド・西太平洋に分布し、沖縄県内では沖縄島、国内では他に奄美大島で見つかっている。汽水域および内湾の軟泥底に生息する。沖縄島における確認例はわずかであり、現在の生息状況は不明である。

特 記 事 項： IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。

原 記 載： Cuvier, G and A. Valenciennes, 1837. Histoire naturelle des poissons, 12. Levrault, Paris.

参 考 文 献： 吉郷英範・吉野哲夫, 1999. 琉球列島で採集された *Apogon lateralis* (テンジクダイ科) と *Acentrogobius caninus* (ハゼ科). I. O. P. Diving News, 10(9): 4-7.

執 筆 者 名： 前田 健

和 名： クマノコハゼ

分 類： スズキ目 ハゼ科

学 名： *Dotsugobius bleekeri* (Poeta, 1921)

カテゴリー： 情報不足 (DD)

環境省カテゴリー： 該当なし

体は太短く、やや側扁する。頭部は鱗を欠く。体は黒褐色で、体側に6~7本の乳白色の横帯がある。体長は最大で約3 cm。インド・西太平洋に分布し、沖縄県内では沖縄島、西表島、与那国島で見つかっている。国内で他に記録はない。河川感潮域上流部に生息し、単独で岩の上に乗って、その表面を滑るように移動するところが観察される。生息状況の詳細は不明である。

原 記 載： Poeta, C. M. L., 1921. Dritte Fortsetzung der Beschreibung von neuen Fischarten der Sunda-Expedition. Zoologische Mededelingen (Leiden), 6: 203-214.

参 考 文 献： Shibukawa, K., T. Suzuki and H. Senou, 2014. *Dotsugobius*, a New Genus for *Lophogobius bleekeri* Poeta, 1921 (Actinopterygii, Gobioidae, Gobiidae), with Re-description of the Species. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A, Zoology, 40(3): 141-160.

執 筆 者 名： 前田 健

和 名： ナミノコハゼ

分 類： スズキ目 スナハゼ科

学 名： *Gobitrichinotus radiocularis* Fowler, 1943

カテゴリー： 情報不足 (DD)

環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

体は細長い。下顎の先端が尖り、著しく前方に突出する。眼は小さく、頭部背面に位置する。背鰭は1基で、5棘18軟条。胸鰭は9~10軟条。西太平洋に分布し、沖縄県内では沖縄島、石垣島、西表島で見つかっている。国内で他に記録はない。河川河口の砂浜に生息する。沖縄県内における確認例はわずかであり、現在の生息状況は不明である。

特 記 事 項： IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。

原 記 載： Fowler, H. W., 1943. Contributions to the biology of the Philippine Archipelago and adjacent regions.

Descriptions and figures of new fishes obtained in Philippine seas and adjacent waters by the United States Bureau of Fisheries steamer “Albatross”. Bulletin of the United States National Museum No. 100, 14: 53-91.

参 考 文 献： 鈴木寿之, 2015. ナミノコハゼ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 360.

執 筆 者 名： 前田 健

和名 : トンガスナハゼ
 分類 : スズキ目 スナハゼ科
 学名 : *Kraemeria tongaensis* Rofen, 1958
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)

体は細長い。下顎の先端が尖り、著しく前方に突出する。眼は小さく、頭部背面に位置する。背鰭は1基で、5棘14軟条。胸鰭は8~9軟条。左右の腹鰭は癒合膜でつながる。沖縄県内では石垣島と西表島で見つかっており、他には南太平洋のトンガ諸島から知られるのみ。河川河口の砂浜に生息し、リュウキュウナミノコハゼと同所的に見つかっているが、リュウキュウナミノコハゼと比べ個体数はきわめて少ない。沖縄県内における確認例はわずかであり、現在の生息状況は不明である。

特記事項 : IUCN カテゴリ : Least Concern (LC)。
 原記載 : Rofen, R. R., 1958. The marine fishes of Rennell Island. The Natural History of Rennell Island, British Solomon Islands, 1(10): 149-218, Pls.1-11.
 参考文献 : 鈴木寿之, 2015. トンガスナハゼ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 376.

執筆者名 : 前田 健

和名 : マイコハゼ
 分類 : スズキ目 スナハゼ科
 学名 : *Parioglossus lineatus* Rennis and Hoese, 1985
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)

体はやや細長く、側扁する。体は黄褐色で、体側に黒色縦帯、尾鰭基底に黒色横帯がある。西太平洋に分布し、沖縄県内では西表島で見つかっているが、1河川で2度確認されたのみである。国内で他に記録はない。河川河口に生息し、満潮時に砂泥底のガレ場の中層を群がりて群泳するところが観察されている。現在の生息状況は不明である。

特記事項 : IUCN カテゴリ : Data Deficient (DD)。
 原記載 : Rennis, D. S. and D. F. Hoese, 1985. A review of the genus *Parioglossus*, with descriptions of six new species (Pisces: Gobioidae). Records of the Australian Museum, 36: 169-201.
 参考文献 : 鈴木寿之, 2015. マイコハゼ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 4 汽水・淡水魚類”, 環境省自然環境局野生生物課 (編), ぎょうせい, 東京, 376.

執筆者名 : 前田 健